宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第161集

前ノ田村上第２遺跡

まえ　の　だ　むら　かみ

Maenodamurakami2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書53

２００７

宮崎県埋蔵文化財センター

前ノ田村上第２遺跡遠景（唐瀬原段丘面をのぞむ）

巻頭図版2

前ノ田１期出土石器

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した前ノ田村上第２遺跡は、後期旧石器時代における文化層が４枚確認され、各文化層において、多数の遺物が出土しております。特に、前ノ田１期におきましては、剥片尖頭器とその素材である石刃が多量に出土しており、当該期のまとまった資料を提示することができました。また、古墳時代初頭におきましては、焼失住居が２軒検出されており、出土した土器の中には型を使ったと思われる土器製作方法が観察できる興味深い資料が出土しています。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年７月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　清　野　　勉

例　　言

1　本書は、平成17年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設に係る前ノ田村上第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、日本道路公団から委託を受けて宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月１日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。

3　測量・空中写真・遺物実測は次の機関に委託した。

グリッド杭設定：(株)久保田測量

空中写真　　：(有)スカイサーベイ

石器実測委託　：(株)パスコ・国際航業(株)

自然科学分析　：(株)古環境研究所

4　本書で使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の５万分の１図を使用し作成した。確認トレンチ・遺跡周辺地形図および、旧地形の復元図については日本道路公団作成の1000分の１図を基に作成した。

5　本書で用いた座標は絶対海抜高であり、方位は座標北（G.N.）を基本とし、位置図等の一部に磁北（M.N.）を使用した。

6　土層断面図および土器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。

7　現地での実測・写真等の記録は、主に嶋田史子、永田和久が行ったほか発掘作業員が補助した。

8　本書使用の遺物実測図・トレース等は、整理作業員の協力を得て嶋田が担当した。

9　遺物写真の撮影は、﨑田一郎、嶋田が行った。

10　遺物実測図の縮尺、遺構略号は次の通りとする。

石器実測図…１／２　土器実測図…１／３　を基本としたが、例外もある。

SI…礫群　　SC…土坑　　SA…竪穴住居跡

11　第Ⅳ章　自然科学分析について、(株)古環境研究所から得られた結果を掲載しているが、一部、報告書作成段階において、図・表番号に変更があったため、その関連箇所においては加筆・修正を行っている。

12　本書執筆・編集は嶋田が行った。

13　報告書作成にあたり、宮崎県埋蔵文化財センター職員の多大な協力を得た。

14　出土遺物その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　地理的環境 …… 1
　第４節　歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 4
　第１節　確認調査の概要 …… 4
　第２節　本調査の経過 …… 5
第Ⅲ章　本調査の記録 …… 6
　第１節　調査の概要 …… 6
　第２節　遺跡の環境 …… 6
　第３節　基本層序と土層堆積について …… 7
　第４節　後期旧石器時代の調査 …… 11
　第５節　縄文時代の調査 …… 61
　第６節　弥生～古墳時代の調査 …… 68
第Ⅳ章　自然科学分析 …… 75
第Ⅴ章　まとめ …… 88

挿 図 目 次

第１図　周辺遺跡位置図 …… 3
第２図　確認調査トレンチ配置図 …… 4
第３図　基本土層図 …… 7
第４図　旧地形復元図および周辺遺跡図 …… 8
第５図　土層断面図およびグリッド配置図 …… 9・10
第６図　前ノ田１期遺構・遺物分布図 …… 12
第７図　剥片尖頭器長幅比 …… 13
第８図　石刃長幅比 …… 13
第９図　石材別出土遺物分布図 …… 14
第10図　前ノ田１期石器出土状況実測図 …… 14
第11図　前ノ田１期礫群実測図１ …… 15
第12図　前ノ田１期礫群実測図２ …… 16
第13図　前ノ田１期遺物実測図１ …… 17
第14図　前ノ田１期遺物実測図２ …… 18
第15図　前ノ田１期遺物実測図３ …… 19
第16図　前ノ田１期遺物実測図４ …… 20
第17図　前ノ田１期遺物実測図５ …… 21
第18図　前ノ田１期遺物実測図６ …… 22
第19図　前ノ田１期遺物実測図７ …… 23
第20図　前ノ田１期遺物実測図８ …… 24
第21図　前ノ田１期遺物実測図９ …… 25
第22図　前ノ田１期遺物実測図10 …… 26
第23図　前ノ田２期遺構・遺物分布図 …… 27
第24図　前ノ田２・３期石材別出土遺物分布図 …… 28
第25図　石材Ｅ石器ブロック …… 28
第26図　前ノ田２期礫群実測図１ …… 30
第27図　前ノ田２期礫群実測図２ …… 31
第28図　前ノ田２期礫群実測図３ …… 32
第29図　前ノ田２期礫群実測図４ …… 33
第30図　前ノ田２期礫群実測図５ …… 34
第31図　前ノ田２期遺物実測図１ …… 35
第32図　前ノ田２期遺物実測図２ …… 36
第33図　前ノ田２期遺物実測図３ …… 37
第34図　前ノ田２期遺物実測図４ …… 38
第35図　前ノ田２期遺物実測図５ …… 39
第36図　前ノ田２期遺物実測図６ …… 40
第37図　前ノ田２期遺物実測図７ …… 41
第38図　前ノ田２期遺物実測図８ …… 42
第39図　前ノ田２期遺物実測図９ …… 43
第40図　前ノ田２期遺物実測図10 …… 44
第41図　前ノ田２期遺物実測図11 …… 45
第42図　前ノ田２期遺物実測図12 …… 46

第43図　前ノ田２期遺物実測図13 …… 47
第44図　前ノ田２期遺物実測図14 …… 48
第45図　前ノ田２期遺物実測図15 …… 49
第46図　前ノ田２期遺物実測図16 …… 50
第47図　前ノ田３期遺構・遺物分布図 …… 51
第48図　前ノ田３期礫群実測図 …… 52
第49図　前ノ田３期遺物実測図１ …… 53
第50図　前ノ田３期遺物実測図２ …… 54
第51図　前ノ田３期遺物実測図３ …… 55
第52図　前ノ田３期遺物実測図４ …… 56
第53図　黒燿石出土分布図 …… 57
第54図　前ノ田４期遺物実測図 …… 58
第55図　礫群重量別組成図 …… 60
第56図　縄文時代遺構・出土遺物分布図 …… 62
第57図　集石遺構実測図１ …… 62
第58図　集石遺構実測図２ …… 63
第59図　炉穴実測図 …… 63
第60図　縄文時代遺物実測図 …… 63
第61図　土坑断面模式図 …… 64
第62図　土坑群Ａ実測図 …… 65
第63図　土坑群Ｂ実測図１ …… 66
第64図　土坑群Ｂ実測図２ …… 67
第65図　土坑Ａ自然科学分析（植物珪酸体分析）
試料採取点２～13 …… 67
第66図　弥生～古墳時代遺構分布図 …… 68
第67図　SA1実測図 …… 69
第68図　SA1出土遺物実測図 …… 70
第69図　SA2実測図 …… 71
第70図　SA2土坑実測図 …… 71
第71図　SA2出土遺物実測図１ …… 72
第72図　SA2出土遺物実測図２ …… 73
第73図　SA3遺構・出土遺物およびＢ区出土遺物実測図 … 74
第74図　前ノ田村上第２遺跡Ａ区基本土層における植物珪酸体
分析結果 …… 83
第75図　前ノ田村上第２遺跡Ｂ区基本土層における植物珪酸体
分析結果 …… 84
第76図　前ノ田村上第２遺跡土坑Ａおよび土坑Ｂにおける植物
珪酸体分析結果 …… 85
第77図　牧内第１遺跡（四次調査）での土坑分布状況 … 89

表目次

第１表　黒耀石産地別出土内訳表 …… 57
第２表　礫群分析表 …… 59
第３表　集石遺構一覧表 …… 61
第４表　土坑分析表 …… 64
第５表　竪穴住居跡一覧表 …… 68
第６表　前ノ田村上第２遺跡における樹種同定結果 …… 77
第７表　宮崎県、前ノ田村上第２遺跡における植物珪酸体
分析結果 …… 82
第８表　石材別石器組成表 …… 88
第９表　土器観察表 …… 92
第10表　石器観察表 …… 93～104

図版目次

巻頭図版１　前ノ田村上第２遺跡遠景(唐瀬原段丘面をのぞむ)
巻頭図版２　前ノ田１期出土石器
図版１　前ノ田１期SI1・SI11・SI13／前ノ田１期剥片尖頭器
出土状況／前ノ田２期礫群／前ノ田２期SI17･18･27
……107
図版２　前ノ田２期SI31／前ノ田３期SI42・44・46・47／
土坑検出状況①／土坑検出状況②／土坑断面①
……108
図版３　土坑断面②／土坑完掘状況①／土坑完掘状況②／ピット検出状況／土坑壁面状況①／土坑壁面状況②／土坑壁面状況(完掘)／メダケを使用した土坑掘削実験
……109
図版４　集石１検出状況／集石１断面／集石３検出状況／集石４検出状況／集石５検出状況／SA1炭化材検出状況／SA1土層断面／SA1植物繊維体検出状況 ……110
図版５　SA2床面遺物出土状況／SA2石器出土状況／SA2内SC1遺物出土状況／SA2完掘状況／前ノ田１期出土遺物① ……111
図版６　前ノ田１期出土遺物②／前ノ田２期出土遺物①…112
図版７　前ノ田２期出土遺物②／前ノ田３期出土遺物……113
図版８　前ノ田４期・縄文時代出土遺物／古墳時代（SA1･２）
出土遺物 ……114

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年２月に基本計画が出され、平成９年３月には整備計画路線となった。さらに、平成９年12月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団は翌年の２月から事業に着手している。その間、宮崎県が遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施行によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は平成11年度より宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

前ノ田村上第２遺跡（24,600㎡）では、平成12年と14年に確認調査を実施し、竪穴住居跡、礫群等の遺構や遺物が確認された。これを受けて平成17年５月16日から平成17年11月30日にかけて、遺構・遺物が確認された6,045㎡の範囲の本調査を実施した。

第２節　調査の組織

前ノ田村上第２遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体	宮崎県教育委員会
	宮崎県埋蔵文化財センター
所　長	宮薗　淳一（平成17年度）
	清野　勉　（平成18・19年度）
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫（平成17・18年度）
副所長	加藤　悟郎（平成18・19年度）
総務課長	宮越　　尊（平成17～19年度）
主幹兼総務係長	石川　恵史（平成17年度）
主幹兼総務担当リーダー	高山　正信（平成18・19年度）
調査第一課長	高山　富雄（平成17・18年度）
	長津　宗重（平成19年度）
主幹兼調査第一係長	長津　宗重（平成17年度）
主幹兼調査第一担当リーダー	
	長津　宗重（平成18年度）
副主幹兼調査第一担当リーダー	
	南中道　隆（平成19年度）
主幹兼調査第二係長	菅付　和樹（平成17年度）
主幹兼調査第二担当リーダー	
	菅付　和樹（平成18・19年度）
主査（確認調査担当）	南中道　隆　原田　茂樹
	大山　博志
主査（調査担当）	永田　和久
主事（調査・整理担当）	嶋田　史子
調査指導	小畑　弘己（熊本大学）
	泉　　拓良（京都大学）
	本田　道輝（鹿児島大学）
	田崎　博之（愛媛大学）
	柳沢　一男（宮崎大学）
	広瀬　和雄（国立歴史民俗博物館）
	大塚　昌彦（渋川市教育委員会）

第３節　地理的環境

前ノ田村上第２遺跡は、宮崎県児湯郡川南町大字川南字前ノ田15021－１･２･３･５･６･10に位置する。

川南町は、宮崎県の中央部に位置し、宮崎平野の北端部にあたる。尾鈴山塊に属する上面木山（標高1,040m）が町の北西部に位置し、そこから丘陵が派生する。さらに丘陵東麓から海岸にかけて広がる段丘面が町域の大半を占めている。日向灘は、暖流である黒潮が北進しており、海岸線は直線的である（第１図）。

河川は、上面木山系に水源を発する平田川が町の中心部を流れ、周辺には小規模な沖積地が広がる。一方で町の南側に位置する高鍋町との町境には、小丸川やその支流である切原川が流れ、比較的まとまった沖積地が広がっている。また町域の北側に位置する都農町との町境には名貫川が流れ、河岸段丘が発達している。

地質は、段丘面最下部に第三紀層の砂岩・頁岩があり、その上を洪積層、つまり尾鈴山塊の火成岩である石英粗面岩（尾鈴山酸性岩類）が覆っている。

町域の大半を占める段丘面はその分布高度や堆積物の差異により多数面に区分されており、様々な様相を呈している。その一つである唐瀬原段丘面は標高約80m～150mに位置し、東に向かい八ッ手状に延びており、狭い谷部には迫田が広がる。また国光原段丘面は標高約60～80mに位置し、広い平坦面が広がる。本遺跡はこの二つの段丘面に挟まれた、標高約60mの比較的低い場所に位置する。さらには、遺跡の北西からは大字大内を扇頂とする小規模な扇状地形（十文字扇状地）が広がっており、本遺跡はその扇端部に位置する。

第４節　歴史的環境（第１図）

１．後期旧石器時代

ＡＴ上位の資料はもとより、ＡＴ下位における資料の蓄積が進んでいる。後牟田遺跡、中ノ迫第１～３遺跡においては、ＡＴ下位よりナイフ形石器をはじめとする石器や、礫群が確認されている。ＡＴ上位からは中ノ迫第１遺跡より、横長剥片剥離の良好な接合資料を得ており、また霧島遺跡からは野岳・休場型細石刃核、小型のナイフ形石器、台形石器が出土している。

２．縄文時代

草創期の遺跡は、段丘面の付根部分を中心に散見され、国光原遺跡、霧島遺跡にて爪形文土器が、赤石・天神本遺跡、八幡第２遺跡にて隆起線（隆帯）文土器と、それに伴う石器が出土している。また、無文土器の出土も増えており、霧島遺跡や都農町の朝草原遺跡、立野第５遺跡にて出土している。

早期の遺跡は、町内に多数分布しており、中ノ迫第１～３遺跡、尾花Ａ遺跡、尾花坂上遺跡にて集石遺構を多数検出している。特に中ノ迫第３遺跡では、条痕文土器に伴う集石遺構・炉穴が検出されている。縄文時代中期の遺跡は県内でも少なく、町内に分布は見られない。後期～晩期にかけての遺跡も町内では少ないが、近年調査が行われた市納上第４遺跡において、包含層から磨消縄文系の土器に伴い、有肩打製石斧、石錘等のまとまった石器類が出土している。そして赤石・天神本遺跡では、竪穴住居跡２軒を検出している。

３．弥生時代～古墳時代

前期の遺跡は、高鍋町の小丸川左岸に位置する持田中尾遺跡が挙げられる。大陸系磨製石器、前期末の刻目突帯文土器が出土しており、いわゆる松菊里型住居も検出されている。

中期の遺跡は少なく、後期～終末期にかけて遺跡が増加する。広い平坦面を持つ段丘面上に位置する尾花Ａ遺跡、赤坂遺跡では、多数の住居跡が検出されており、集落が展開している。一方で、舌状に伸びる唐瀬原段丘面上に位置する中ノ迫Ａ遺跡や中ノ迫第２遺跡、また段丘面にのらない前ノ田村上第１・２遺跡においては、数軒の住居跡等の遺構が確認されるのみであり、集落展開に差異がみられる。なお、前ノ田村上第２遺跡が立地する十文字扇状地の両側縁部においては、住居跡30軒、周溝墓が検出されている大迫遺跡、周溝状遺構が６基検出されている下原遺跡などまとまった集落が展開する。

また墓域については、名貫川付近に位置する東平下遺跡、国光原段丘面の縁辺部に位置する赤坂遺跡において、周溝墓が検出されている。

古墳時代にはいると、湯牟田遺跡、国光原遺跡、西ノ別府遺跡、尾花Ａ遺跡で多数の住居跡が検出され、付近では川南古墳群や持田古墳群の造営が始まる。古墳群の造営は前期から始まり終末期まで続くが、とくに前期段階に柄鏡型の大型前方後円墳が継続的に造られる。宮崎平野北部における首長墓系列の古墳の造営は、４世紀代、小丸川流域の川南、持田古墳群において優勢であり、５世紀前半には西都原古墳群の男狭穂・女狭穂塚の造営に伴い、規模を縮小させていくという動きが見られる。弥生後期～古墳時代前期にかけての集落増加、周溝墓の造営そして、持田・川南古墳群の造営という流れが見られる。

４．古代以降

川南町は古代には韓家郷の一部に比定され、韓人（渡来人）との関係が想定されている地でもある。また去飛（都農町）の駅と児湯（木城町高城）の駅を結ぶ古代の官道も想定されている。

歴史時代の遺跡については、上垂門の奈良時代後半～平安時代前期に比定される蔵骨器を伴う火葬墓や、宗麟原の供養塔等が知られている。中世の遺跡は前ノ田村上第１、銀座第１遺跡等で確認されており、前ノ田村上第１遺跡においては区画溝を伴った掘立柱建物跡群を検出しており、多量の陶磁器類が出土している。また町内において「別府」等の字名が数多く残っており、中世の荘園が存在した可能性も高い。

1．前ノ田村上第２遺跡　2．前ノ田村上第１遺跡　3．前ノ田遺跡　4．赤坂遺跡　5．国光原遺跡
6．湯牟田遺跡　7．把言田遺跡　8．西ノ別府遺跡　9．尾花Ａ遺跡　10．尾花坂上遺跡
11．川南古墳群　12．持田中尾遺跡　13．持田古墳群　14．山王古墳群　15．野首第１遺跡
16．野首第２遺跡　17．南中原第２遺跡　18．老瀬坂上第３遺跡　19．下耳切第３遺跡
20．北牛牧第３・第５遺跡　21．後牟田遺跡　22．野稲尾遺跡　23．中ノ迫第３遺跡
24．中ノ迫第２遺跡　25．中ノ迫第１遺跡　26．下原遺跡　27．大内原遺跡　28．赤石・天神本遺跡
29．虚空蔵免遺跡　30．霧島遺跡　31．蔵座村遺跡　32．銀座第１遺跡　33．八幡遺跡
34．東平下遺跡　35．立野第５遺跡　36．尾立第３遺跡　37．朝草原遺跡

第１図　周辺遺跡位置図（Ｓ＝1/50,000）

第Ⅱ章　調査の方法と経過

第１節　確認調査の概要

平成13年９月12日～11月22日にかけて確認調査が行われた。調査区を便宜上、Ａ区～Ｃ区に分け、トレンチ（Ｔ１～Ｔ３）を設定し、総計約2,154㎡を掘削した。（第２図Ｂ区南端は、未契約であったため、トレンチが設定されていない。）

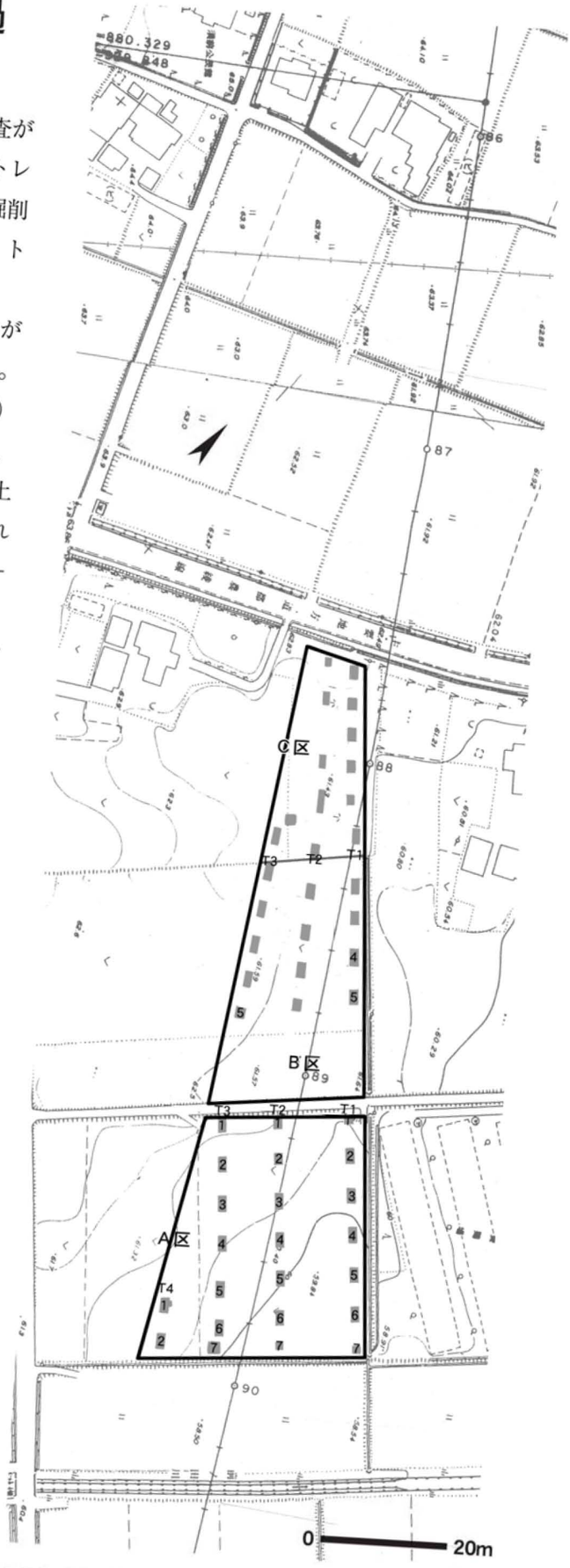
結果、Ａ区Ｔ１－４・５、Ｔ２－３より土師器片が出土し、Ｔ２－２～５において竪穴住居跡を検出した。アカホヤ下面においては、小林軽石を含む層（Ⅳｂ層）を中心にＴ１－２～７、Ｔ２－１～７、Ｔ３－２～６、Ｔ４－１・２にてナイフ形石器、剥片、石核等が出土した。遺物出土の密度は、調査区南側に偏りが見られた。遺構についてはＴ１－３　Ｔ３－３・４　Ｔ２－４にて、不正形なシミ状の遺構やピットが検出された。

Ｂ区においては、Ｔ１－１・４・５、Ｔ３－５トレンチより剥片尖頭器、角錐状石器、剥片を出土した。遺物出土の密度は調査区南側に偏る。

一方、Ｃ区では他区と土層の堆積状況が異なり、アカホヤ層下の２層（Ⅱｂ層・Ⅲ層）のみの堆積であった。これらの層からは遺構・遺物は確認されなかったため、本調査からは除外となった。

これらの結果をふまえて、本調査はＡ・Ｂ区を対象に行った。

確認調査出土の近・現代遺物



第２図　確認調査トレンチ配置図（Ｓ＝1/1000）

第２節　本調査の経過

本調査は、Ａ・Ｂ区の計6,045㎡を対象に平成17年５月16日から11月30日まで行った。調査区に隣接して、ブロイラー鶏舎が３棟建ち並び、ヒヨコへの振動、騒音の影響が懸念されたため、ヒヨコ入荷日程を考慮しながら調査が行われた。

調査は、Ⅰ層（アカホヤ）上面から下面にわたって行われた。Ⅰ層上面にて遺構の検出を行った結果、古墳時代初頭の竪穴住居跡を３軒検出した。

Ⅰ層下面の調査は、調査区北半においては遺構・遺物の広がりが見られなかったため、Ⅰ層、Ⅱａ・ｂ層を重機で剥ぎ、Ⅲ層上面にて遺構の検出を行った。その結果、シミ状の遺構を検出した。一方、調査区南半では、Ⅱｂ層において縄文時代草創期から早期の遺物と、集石遺構が検出されたため、人力でⅡｂ層の掘削を行った。Ⅲ層上面にて遺構の検出を行った結果、シミ状遺構が多数検出された。遺物の出土はⅢ～Ⅳｂ層を中心に見られ、Ⅶａ層まで続いた。また、Ⅴａ層の堆積が見られる場所においてはトレンチを設定し、下層での遺構・遺物の有無を確認した上で掘削した。

調査の結果、アカホヤ上面において、古墳時代初頭、アカホヤ下面においては、縄文時代草創期～早期、後期旧石器時代４時期にわたる遺物を確認した。出土した遺物の総点数は約1900点で、後期旧石器時代の遺物が９割を占める。

整理作業は平成18年５月１日から７月30日まで行った。作業内容としては、水洗い・注記・土器及び石器の接合を行った。また、礫については水洗い・注記・計測作業を行った。遺物の実測は、土器と礫塊石器を埋蔵文化財センター内で、その他の石器については委託によって行った。そして、平成19年２月に原稿執筆を終了させた。

また、平成18年７月29日に県立図書館で開催された「ひむかの歴史」にて他遺跡と合同で、報告会が行われた。

【本調査日誌】

平成17年

5／16～20	重機にて駐車場・調査区の整備。表土除去。
6／6	作業員を入れての調査を開始。
6／7～9	アカホヤ上面での遺構検出作業。SA1・２を検出。
7／1	確認調査では検出されなかった集石遺構を検出。調査区東側にサブトレンチを入れ、土層堆積状況を確認。
7／25	隣接する鶏舎の鶏が出荷された。
7／27	重機にてアカホヤ～Ⅱｂ層を除去。Ⅲ層上面でそろえる。
8／2	Ａ調査区南側にて礫群、北側谷部にてピット群を検出。
8／8	土坑群Ｂを検出。
8／11	予定より早く鶏舎へヒヨコが搬入された。
9／5	台風14号により現場が水没する。水中ポンプにより、排水を行う。
9／15	空撮
9／21	Ｂ区表土剥ぎ。
9／28	Ｂ区Ⅲ層上面にて遺構検出。炉穴を検出。
10／13	東九州自動車道発掘調査指導委員による調査指導（１回目）
10／18	Ｂ区の北半の表土剥ぎ。
11／1	Ａ区埋め戻し。Ｂ区南半表土剥ぎ。
11／9	東九州自動車道発掘調査指導委員による調査指導（２回目）
11／22～	埋め戻し。

整理作業風景

第Ⅲ章　本調査の記録

第１節　調査の概要

本遺跡では、後期旧石器時代４時期、縄文時代草創期～早期、弥生時代後期～古墳時代の計６つの時期にわたる文化層を確認した。遺跡の地形は、浅い谷を介して微高地が２箇所に認められる。遺構・遺物の分布は時期により異なり、後期旧石器時代・縄文時代は低地への落ち際付近、古墳時代は標高の高い場所に位置する傾向がある。

後期旧石器時代（１～４期）

それぞれの時期で主体となる石器と、主な出土層位は次の通りである。

１期：剥片尖頭器（Ⅶa層）

２期：角錐状石器・横長剥片・縦長剥片素材のナイフ形石器・石核・剥片（瀬戸内技法系）(Ⅳa～Ⅴ層)

３期：終末期ナイフ形石器（Ⅱb～Ⅲ層）

４期：細石刃（Ⅱb～Ⅲ層）

遺物・遺構の平面分布は１期と２～４期では異なっており、１期の遺物はＢ区でのみ、２～４期は大半がＡ区にて出土している。遺構は１～３期にて礫群が検出されている。

縄文時代草創期～早期

集石遺構がＡ区南側の、低地への落ち際付近にて５基、Ｂ区東側拡張箇所にて１基が検出されている。その他Ｂ区では炉穴１基、Ａ区ではピット状の掘り込みを持つ土坑・ピットが多数検出されている。遺物は、無文土器・隆帯文土器、石鏃や磨石が出土している。

弥生時代終末～古墳時代初頭

竪穴住居跡がＡ区にて３軒検出されており、２軒は焼失住居である。Ｂ区から遺構の検出は見られなかったが、弥生土器が撹乱土中から出土している。

その他の時代

近世の陶磁器片が１点出土している。その他、明治～大正期のものと思われる型紙刷絵の陶磁器片が数点出土している。いずれも、表土からの出土である。

第２節　遺跡の環境

本遺跡は、大字大内を扇頂とする扇状地（十文字扇状地）の端部付近に立地する。そして赤坂遺跡や国光原遺跡が立地する南側の国光原段丘面と、中ノ迫第１～４遺跡が広がる唐瀬原段丘面に挟まれた、標高約60ｍの比較的低い場所に位置する。遺跡近くに広がる国光原段丘面との比高差は約20ｍである。段丘面の傾斜は、土地分類基本調査によると、15°以上30°未満の範囲内に収まる。段丘面と遺跡との間には平田川の支流である綿打川が流れ、その氾濫原は現在、田として利用されている。遺跡周辺は地元の方の話によると、区画整備が行われる以前は湧水点が点在し、降雨後には水が溢れかえる状態にあったという。

調査区内には、２つの谷が埋没しており、旧地形はこれらの谷を挟んで舌状の微高地が東に向かい延びていたことが想定される（第４図）。また本遺跡北側には県道を挟み、前ノ田村上第１遺跡が広がる。そこでの地形は、報告書に詳細な記述が無いため不明であるが、旧石器時代の遺物出土レベルから鑑みるに、本遺跡Ｂ区北側からＣ区にかけて見られる谷部を介して広がる微高地上に位置しており、本遺跡と類似した地形であることが想定される。つまり東へ向け八ツ手状にのびる微高地地形が広がっており、すなわちそれが扇状地端部付近での状況であると考えられる。

また、第Ⅳ章で詳しく述べているが、調査で検出された土坑の掘り込み面を探るべく、土壌の珪酸体分析を行った。得られた結果からは、この遺跡において人の活動が見られ始めるＡＴ層上面（Ⅶb層）～小林軽石が混じる層（Ⅳb層）にかけてササが豊富に見られる環境にあった。そしてⅡb～Ⅲ層にかけての時期には、ササを主体としたイネ科植物にススキが混じる環境にあったという。また、湿地的な場所に繁茂するヨシ属も見られ、当時の景観は、湿地が取り巻き、微高地上にササやススキが繁茂する環境が想定される。

第３節　基本層序と土層堆積について

前ノ田村上第２遺跡での土層堆積は第３図の通りである。しかしながら、調査区内は微地形が入り組んでおり、土層の堆積状況は一様ではない（第４・５図）。

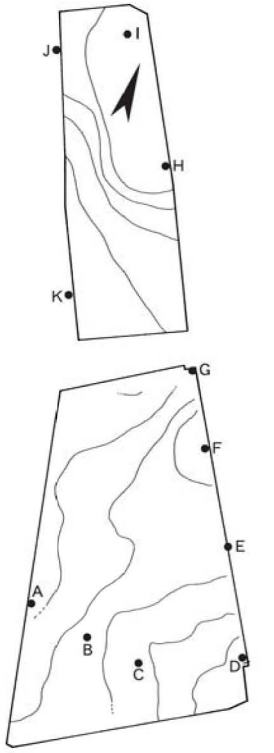
Ａ区南側の調査区外へ地形が下がる付近と、Ｂ区では谷部分にかけての斜面に、Ⅳa層（通称クロコバと呼ばれる黒色味の強い小林軽石を含む土層）の堆積が見られる。またＡＴ以下の土層については、Ｂ区南側からＡ区北側でブラックバンドの堆積が確認されたのみで、その他の場所では、ＡＴ下位は礫層となっている。隣接する前ノ田村上第１遺跡においても同様である。

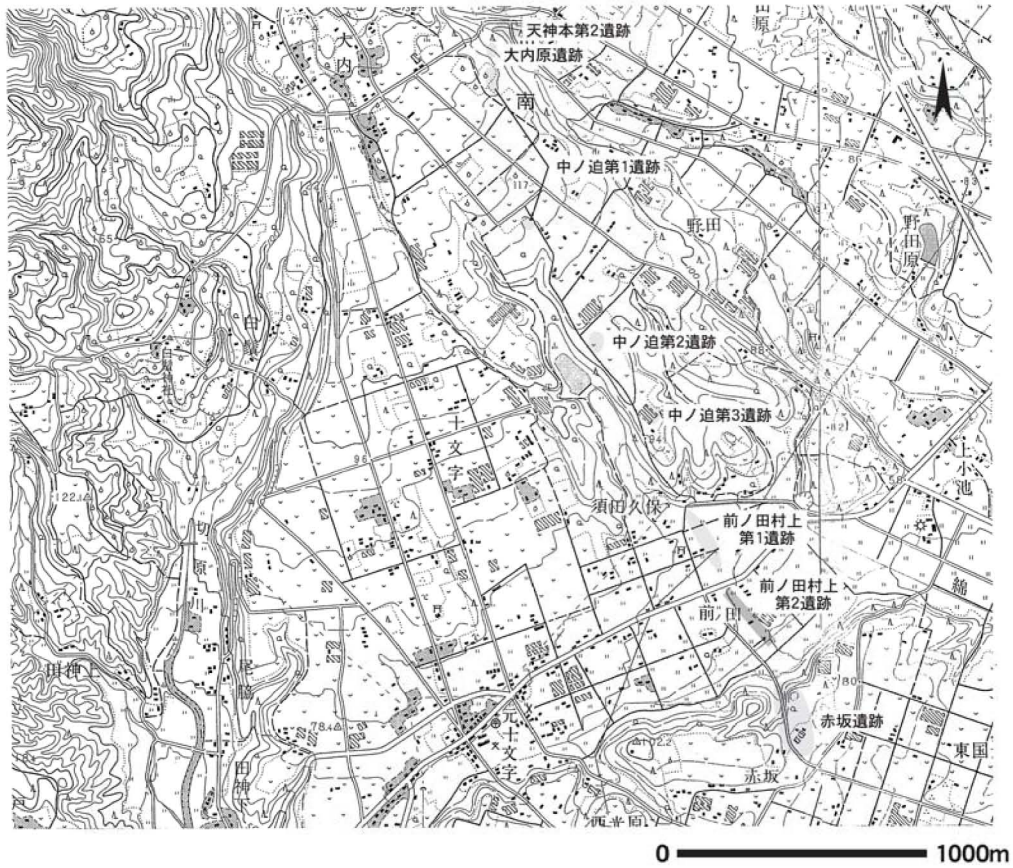
礫層を構成している礫は、尾鈴山酸性岩類であり、礫の大きさは、Ａ区南側低地の落ち際付近や、Ｂ区北側の谷部においては、10～20㎝程の小ぶりの礫が主体を占めているのに対し、Ａ区北側部分やＢ区南側においては人頭大の礫が多く見られた。

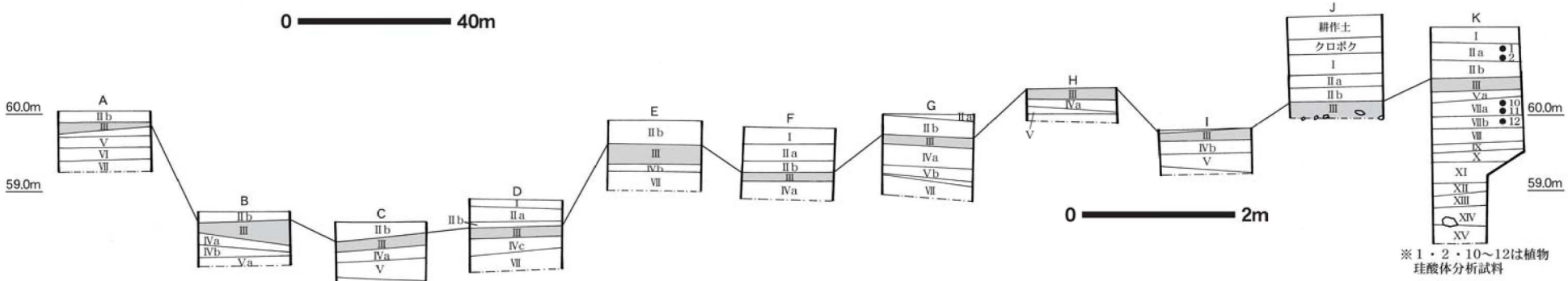
グリッド配置は、10m間隔で東西方向にアルファベットで南から北に算用数字を配した（第５図）。

層　名	Ａ　区	Ｂ　区	所　　見
耕　作　土		耕 作 土 クロボク	
Ⅰ層	黄褐色土層（K−Ah）		10YR5/6　よく締まり、粘性無し。
Ⅱ層－a	黒褐色土層 （MB0相当）	黒褐色土層 （MB0相当）	10YR2/3　よく締まり、粘性ややあり。
－b	暗褐色土層 （ML1相当）	暗褐色土層 （ML1相当）	10YR3/3　よく締まり、粘性ややあり。
Ⅲ層	明暗褐色土層 （ML1相当）	明暗褐色土層 （ML1相当）	10YR3/3　よく締まり、粘性ややあり。
Ⅳ層－a	黒褐色土層	黒褐色土層	非常に硬く締まり、粘性ややあり。谷部への落ち際付近にのみに堆積。通称クロコバ。
－b	明暗褐色土層 （小林軽石を含む）	明暗褐色土層 （小林軽石を含む）	10YR3/4　締まりは普通で粘性あり。小林軽石を含む１㎝程のブロックが少量混じる。
－c	明暗褐色土層	－	Ⅳ-b層と同様であるが、小林軽石ブロックを含まない。Ａ区南側で見られる。
Ⅴ層－a	暗褐色土層	暗褐色土層	10YR3/4　非常に締まりの強い黒褐色ブロック(1~2㎝)を少量含む。A区南側には黒褐色土が面的に広がる。
－b	黒褐色土層	－	10YR2/3　粘性があり、水分を多く含む。暗褐土が斑状に混じる。谷部分にのみに堆積。
Ⅵ層	褐色土層 （AT二次堆積層）	－	硬く締まり、粘性無し。暗褐色土の球形状のシミが見られる。
Ⅶ層－a	暗褐色土層	暗褐色土層	10YR3/4　締まりは悪く、ＡＴ粒子を多く含む。
－b	ＡＴ	ＡＴ	10YR4/4　非常に硬く締まる。
Ⅷ層	黒褐色土層 （MB2相当）	黒褐色土層	10YR2/2　非常に硬く締まり、粘性ややあり。白色粒子を含まない。
Ⅸ層	－	褐色土層	10YR4/6　しまりは弱く、粘性ややあり。１㎜以下の白色粒子が少量混じる。
Ⅹ層		褐色土層	7.5YR4/4　Ⅸ層に比して、褐色味が強く、粘性がある。1㎜以下の白色粒子が少量混じる。
Ⅺ層		褐色土層	10YR4/6　しまりは普通で、粘性あり。１㎜以下の白色粒子が少量混じる。
Ⅻ層		褐色土層	7.5YR4/4　しまり良く、粘性あり。シャリシャリとした感触があり、1㎜以下の白色粒子が少量混じる。
XIII層		黄褐色土層	10YR5/6　しまり良い。３～５㎜の小石を僅かに含む。
XIV層		黄褐色土層	10YR5/6　硬く締まり、粘性ややあり。小石は含まない。
XV層	礫層	礫層	尾鈴山酸性岩類

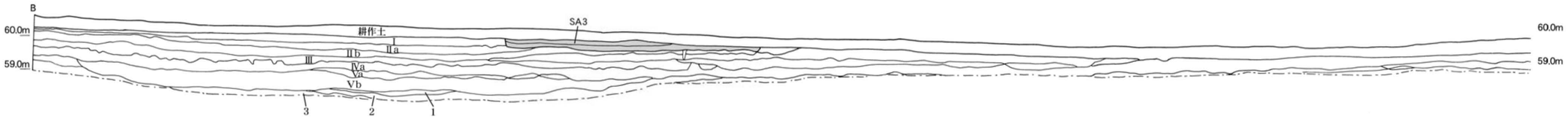
第３図　基本土層図



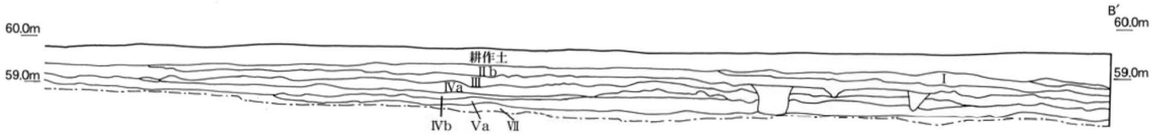


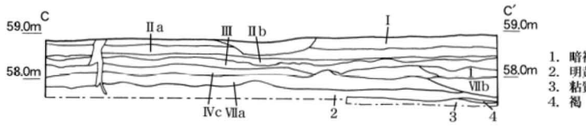


第４図　旧地形復元図および周辺遺跡図

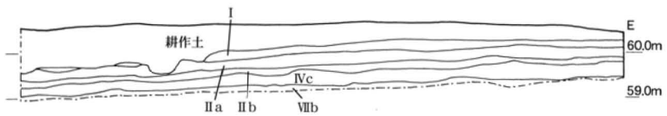


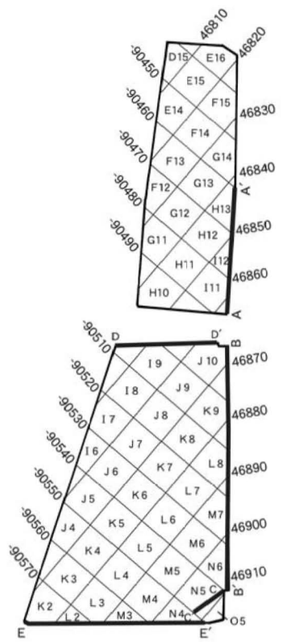
1. 暗褐10YR3/3　しまり弱く粘性あり。1cm大の小石、砂利を少量含む。
2. 暗褐10YR3/4　しまり弱く粘性あり。砂利を多く含み、1～2cmの小石が混じる。
3. 暗褐10YR3/3　しまり弱く粘性あり。2層に比して砂利を多く含む。

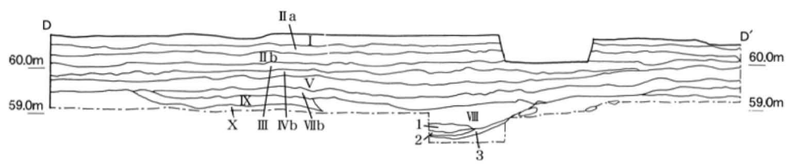




1. 暗褐（10YR6/4）0.5～1cm大の暗褐色ブロックを確かに含む。
2. 明黄褐10YR6/6　AT。締まりは普通で、粘性無し。シャリシャリ。
3. 粘質土。
4. 褐（7.5YR4/6）締まりが強く、粘性無し。鉄分を含む。







1. 黄褐（10YR5/6）よく締まり、粘性無し。ATに似る。
2. 暗褐（10YR3/4）よく締まり、粘性あり。シルト状の土。
3. 褐　（10YR4/4）締まり悪く、粘性あり。

0 ―――― 2m

第５図　土層断面図およびグリッド配置図　※１グリッドは10m

第４節　後期旧石器時代の調査

１．時期の設定

後期旧石器時代の遺物は、Ⅱb層～Ⅶa層にかけて出土しているが、同一層内に様々な時期の遺物が混在している状況にあった。Ａ区では、Ⅱb層～Ⅲ層にかけて縄文時代の遺物と細石刃、終末期ナイフ形石器、横長剥片素材のナイフ形石器が混在、Ⅳb層～Ⅴ層では終末期ナイフ形石器を含みながら、角錐状石器、縦長・横長剥片素材のナイフ形石器が出土している。これらの出土状況や異なる層位間また、平面的にも離れた地点間での接合が見られることから、少なからず遺物は水平・垂直方向への移動があることが想定される。また土層の堆積状況が悪い場所もあることから、出土層位をそのまま文化層にあてはめることは困難な状況にあった。

一方、Ｂ区においてはⅤa層から角錐状石器、Ⅶa層からは剥片尖頭器が出土しており、比較的出土層位と遺物を対応させて捉えやすい状態にあった。

そこで今回報告するにあたっては、出土層位、遺物の特徴、平面分布、検出された遺構等を総合的にとらえ、前ノ田村上第２遺跡の後期旧石器時代を１～４期に分けて捉えることにした。

２．石器に関する石材分類

これらの分類は肉眼による分類によるものであり一つの石材類型が同一母岩を表しているものではない。

石材Ａ：黒色～茶色の緻密な石材。中には、白斑が混じるものもある。触感は滑らか。周辺遺跡にて、頁岩またはホルンフェルスと分類されている。

石材Ｂ：茶褐色の石材であり、周辺遺跡で、頁岩またはホルンフェルスと分類されている。

石材Ｃ：灰白色の緻密な石材で、白い筋や白斑が入るものがある。頁岩またはホルンフェルスと分類されている石材。

石材Ｄ：黄褐色に風化したもので、粉を吹いているものも多い。周辺遺跡ではホルンフェルスと分類されている。

石材Ｅ：触感がざらつく灰～灰白色の石材で、周辺遺跡ではホルンフェルスと分類されているものを一括した。灰白色・暗灰色の筋が入るもの等が含まれ、その外見は様々である。

石材Ｆ：風化により白色を呈し、触感はざらつく。流紋岩と分類されているもの。

石材Ｇ：白色の石材で、非常に脆く風化が激しい。流紋岩と分類されている。

石材Ｈ：白色で、滑らかな石材で緻密

石材Ｉ：その他の流紋岩類を一括した。縞・ラミナ模様が入るものが含まれる。

石材Ｐ：チャート

石材Ｓ：砂岩

石材Ｏ：尾鈴山酸性岩類

黒耀石Ａ：黒色・アメ色を呈し、時に縞模様が入る。非常に透明度が高い。桑ノ木津留産と想定される。

黒耀石Ｂ：透明度が低い黒色のもの。腰岳産が想定される。

黒耀石Ｃ：黒色で不純物を多く含むもの。日東産が想定される。

３．前ノ田１期

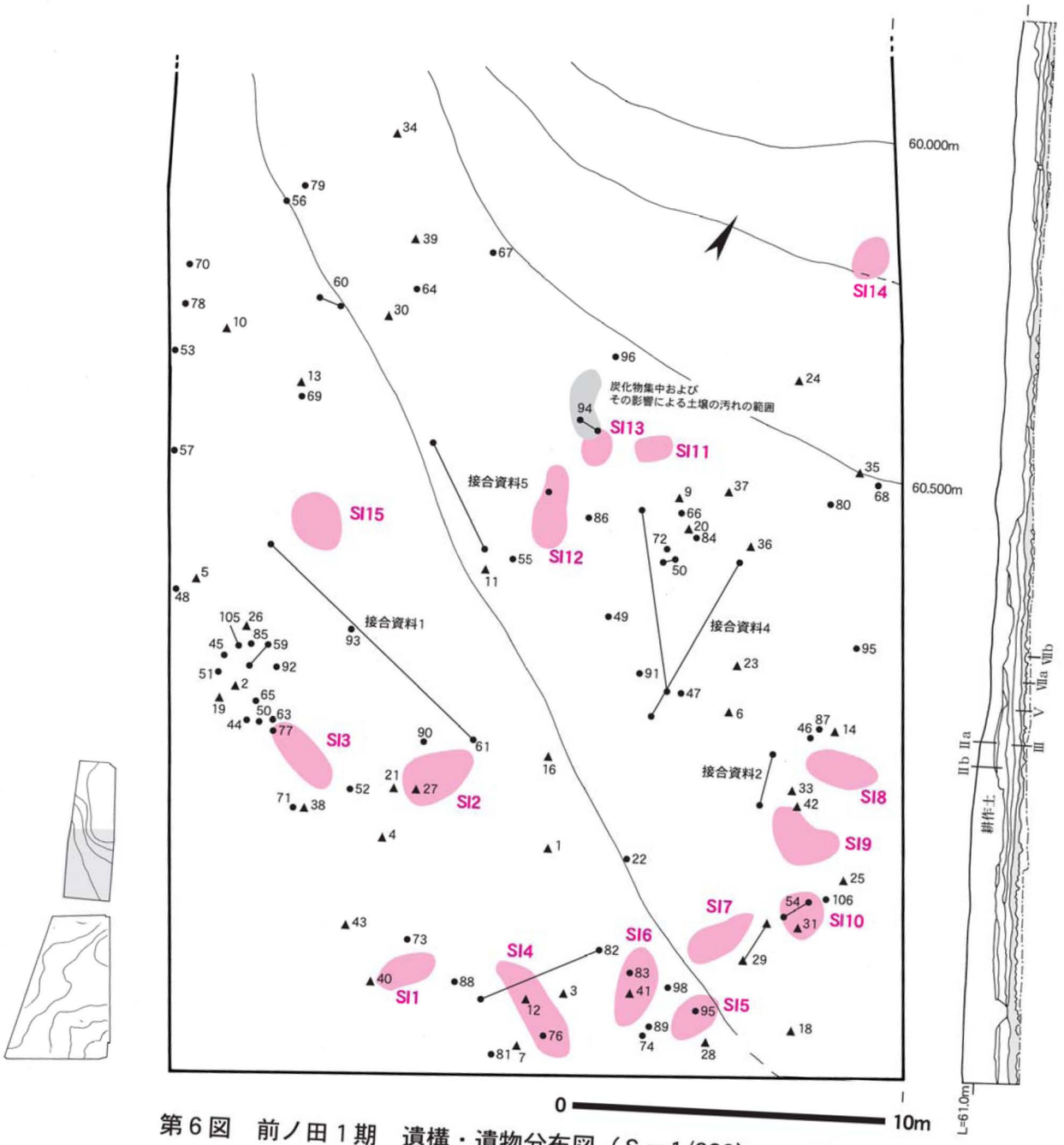
Ⅶa層を中心に剥片尖頭器・ナイフ形石器・削器・縦長剥片・石核が出土しているが、剥片尖頭器・縦長剥片（石刃）が多く出土しているのが特徴である。遺構は15基の礫群を検出している。

【遺構】（第11・12図）

Ｂ区南半にて15基の礫群を検出している（第11・12図）。礫の密度は、SI1のみが密集しており、その他は散漫に分布している。構成礫の半数以上は完形に近い礫が占めており、赤化礫も半数以上を占める。またタールの付着が顕著な礫も一定量含まれる（第２表）。

【遺物出土状況】（第６・９・10図）

石器は遺構と同様、Ｂ区南半を中心に出土している（第６図）が、中央では散漫な傾向にある。出土遺物の石材別出土状況（第９図）は石材Ａ～Ｃ・Ｄ・Ｅと、石材Ｆ～Ｉでは分布が異なる。石材Ｆ～Ｉなど流紋岩系の石材は、同一母岩と思われる石材が狭い範囲にまとまり、石核と剥片、調整剥片を伴いブロックを形成している。一方で、石材Ａ・Ｄ・Ｅは、接合する資料が僅かに見られるものの、剥片尖頭器、縦長剥片（石



第６図　前ノ田１期　遺構・遺物分布図（Ｓ＝1/200）　▲…剥片尖頭器
※コンターラインはⅢ層上面

刃）が散漫に分布している状況がみられた。これらの石材から同一母岩を見出すことは困難であった。

また、炭化物集中箇所で得られた炭化物の樹種同定を古環境研究所に委託したところ、コナラ属アカガシ亜属という結果を得た（詳細は第Ⅳ章）。

【出土遺物】（第13図～第22図）

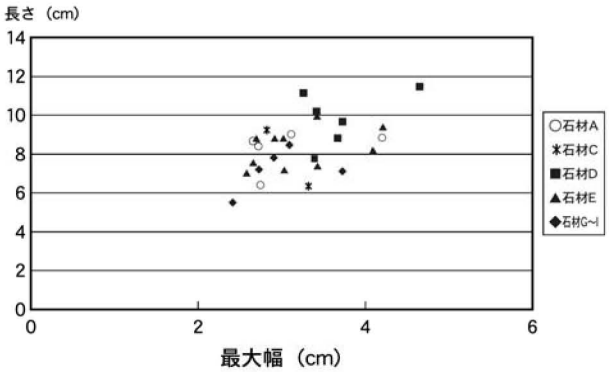
1～39は剥片尖頭器で、縦長剥片（石刃）を素材としている。素材剥片の形状を生かしながら基部加工を施し、一側縁のみ入念な剥離調整を施したもの（Ⅰ類）、基部加工のみのもの（Ⅱ類）が見られ、それらには、さらに側縁の先端部、下方部に加工を施すものが見られる。

剥離調整は裏面側から施され、打面を残すものが大半を占める。また、作業面調整が施された石刃を素材としているものが多く、基部に稜を残すものは少ない。また、破損後、欠損面に剥離調整を行っているもの（36・38・39）、通常の側縁部調整の後、さらに剥離調整を行っているもの（33）が認められ、再利用品の可能性が指摘される。これらの石器に使用されている石材は、石材A・C・Fなどの緻密なものが占めている。

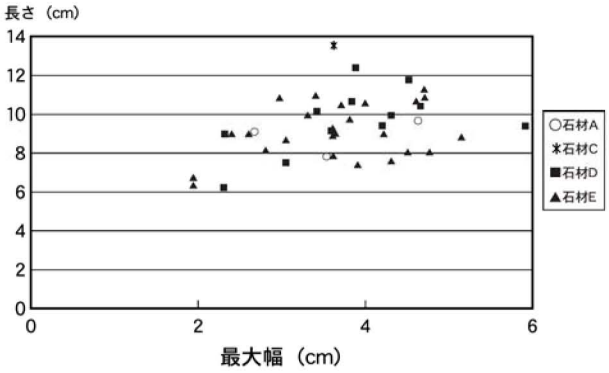
40～42は黒耀石素材のナイフ形石器である。打面を基部側縁に利用しているのが特徴である。44～52は削器であり、その中でも44～49は剥片尖頭器と同様に縦長剥片（石刃）を素材とし、一側縁に刃部加工を施すいわゆる石清水型削器である。53～81は縦長剥片（石刃）である。剥片尖頭器の長幅比と見合わせると、縦長剥片（石刃）は製品に比して一回り大きいものが多くを占める（第7・8図）。また、石刃の接合資料として、接合資料1が挙げられる。非常に精美な縦長剥片（石刃）であり、底面には礫面を残す。接合する62の上部は折れており、側面には裏面側からの二次加工が施されている。その他の縦長剥片（石刃）の中には、53～60のように二次的な調整を施しているものが見られ、未製品が含まれている可能性もある。また、作業面調整が顕著に見られる小型の剥片類（81～93）が出土しているが、これらはⅤ層下面で出土しているものが多く、2期の石器群に伴う可能性も考えられる。

石核は、製品や剥片類の出土数に比して少ない。接合資料2は礫の平坦面を打面とし、調整を施したうえで小型の縦長剥片を剥離している。左側縁には二次加工が見られる。接合資料3は打面を転移させながら、小型の不定形剥片を剥離している。接合資料4は、片側に礫面を残す。102は裏面側から剥離調整が施されており削器の可能性もある。105、106は半截礫の分割面側からの剥離が見られる。

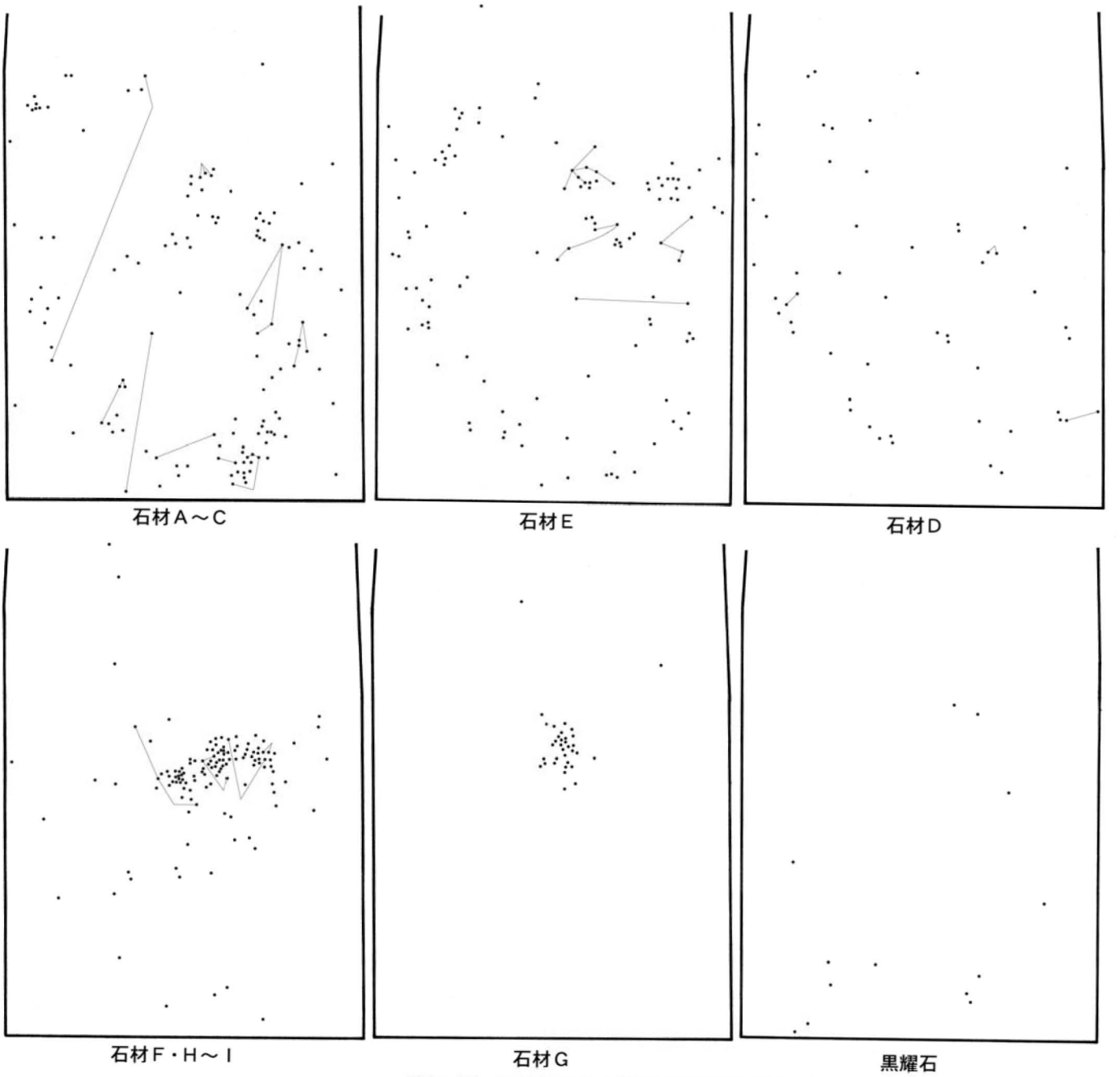
これらの石核の剥片剥離状況からみて、多量に出土している縦長剥片（石刃）を剥いだと思われる石核は出土していない。



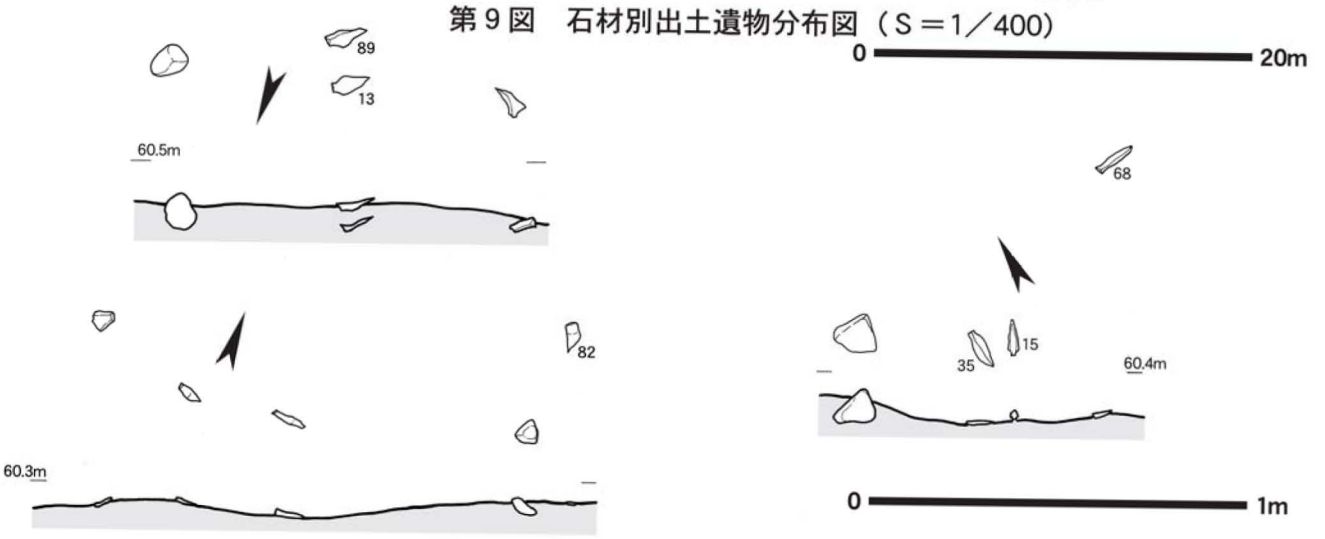
第7図　剥片尖頭器長幅比



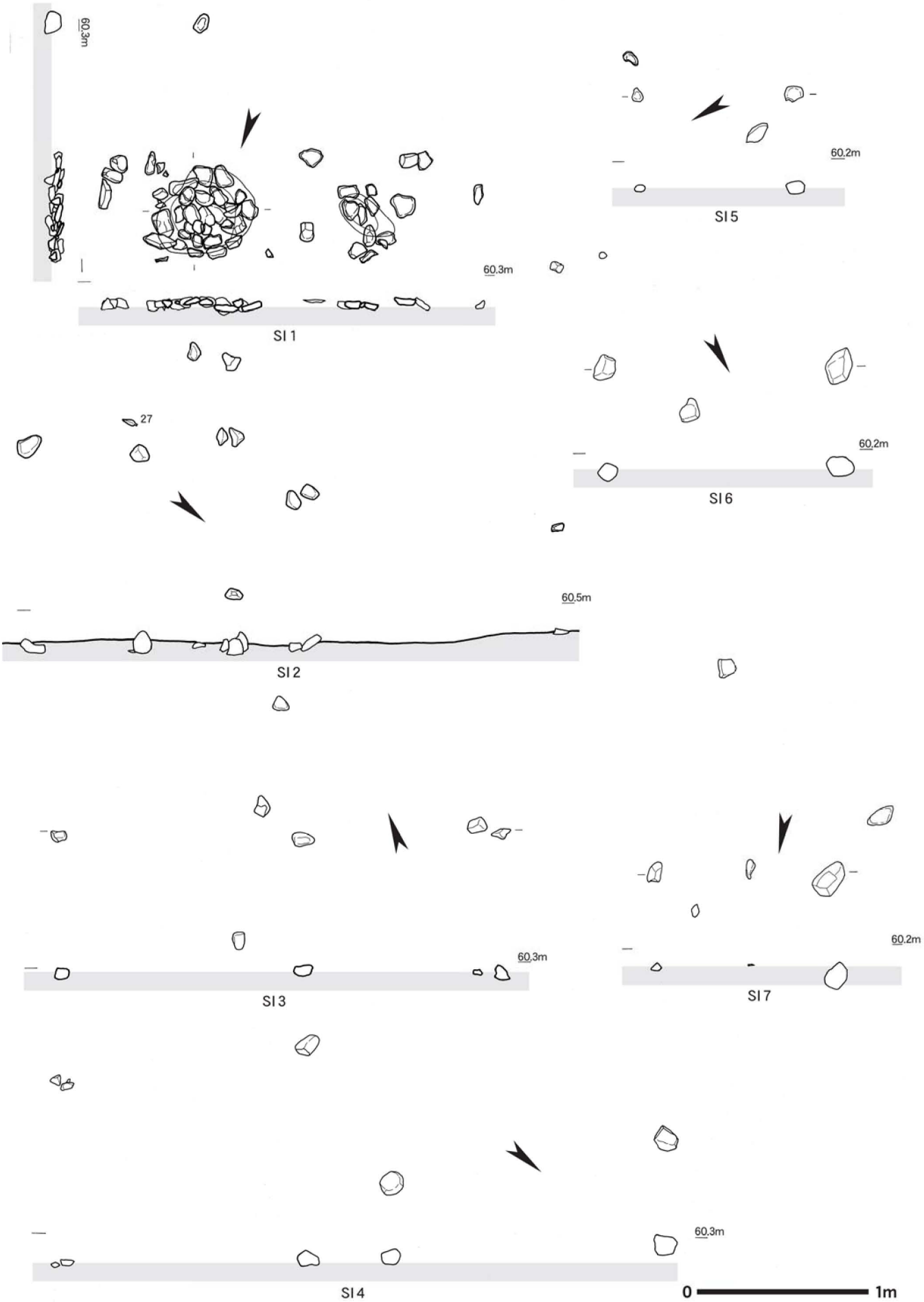
第8図　石刃長幅比



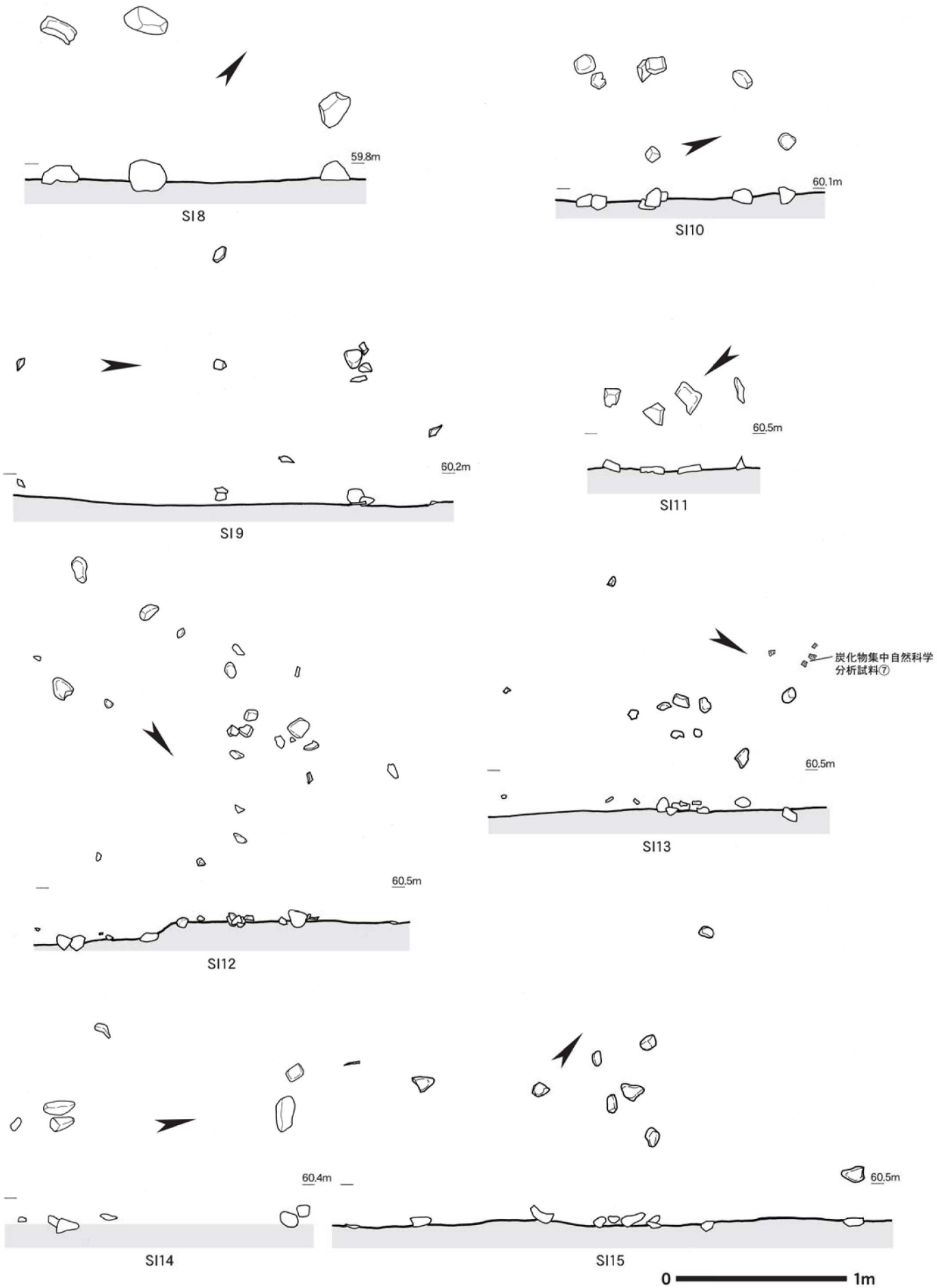
第９図　石材別出土遺物分布図（S＝1／400）



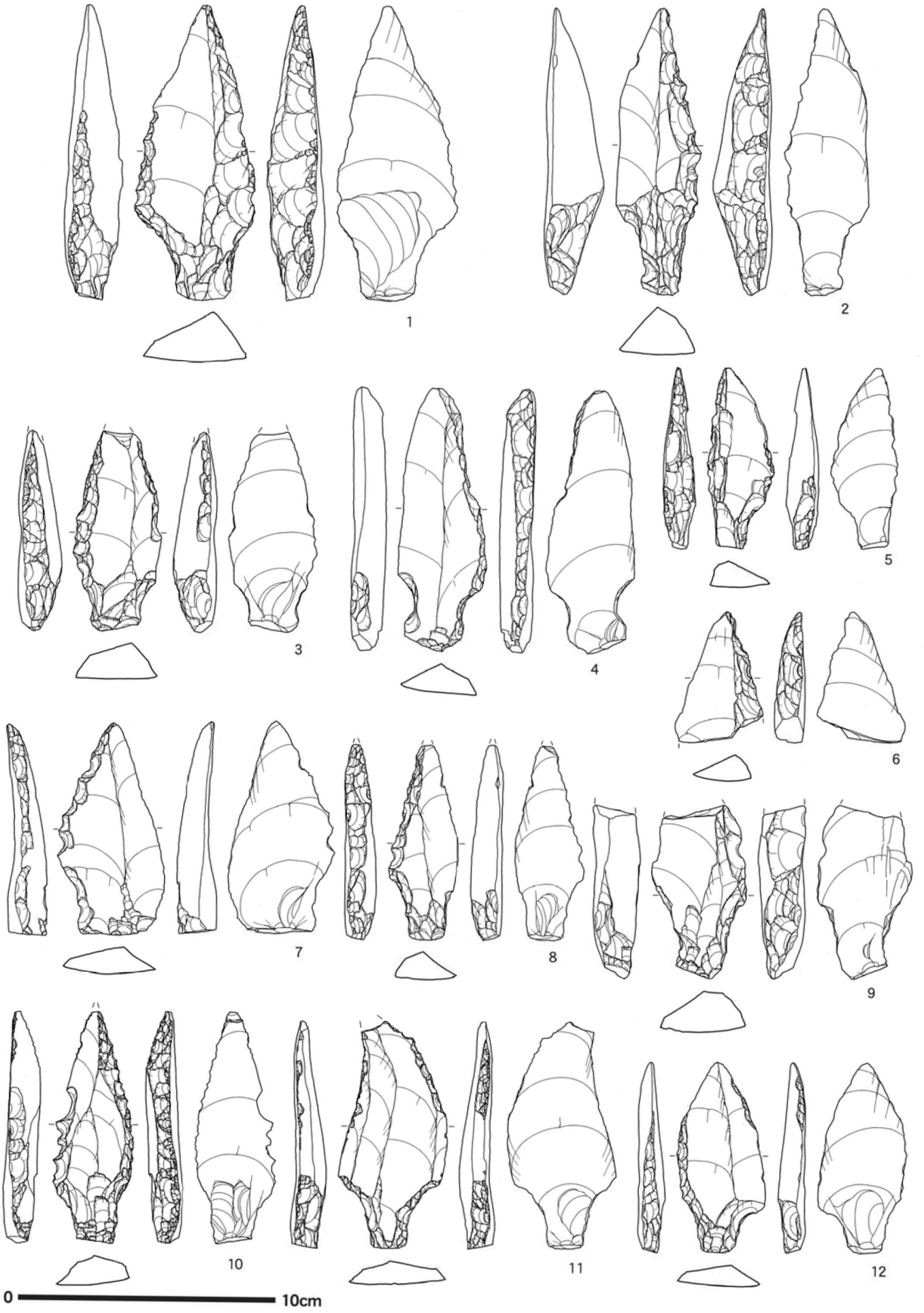
第10図　前ノ田１期　石器出土状況実測図（S＝1／20）



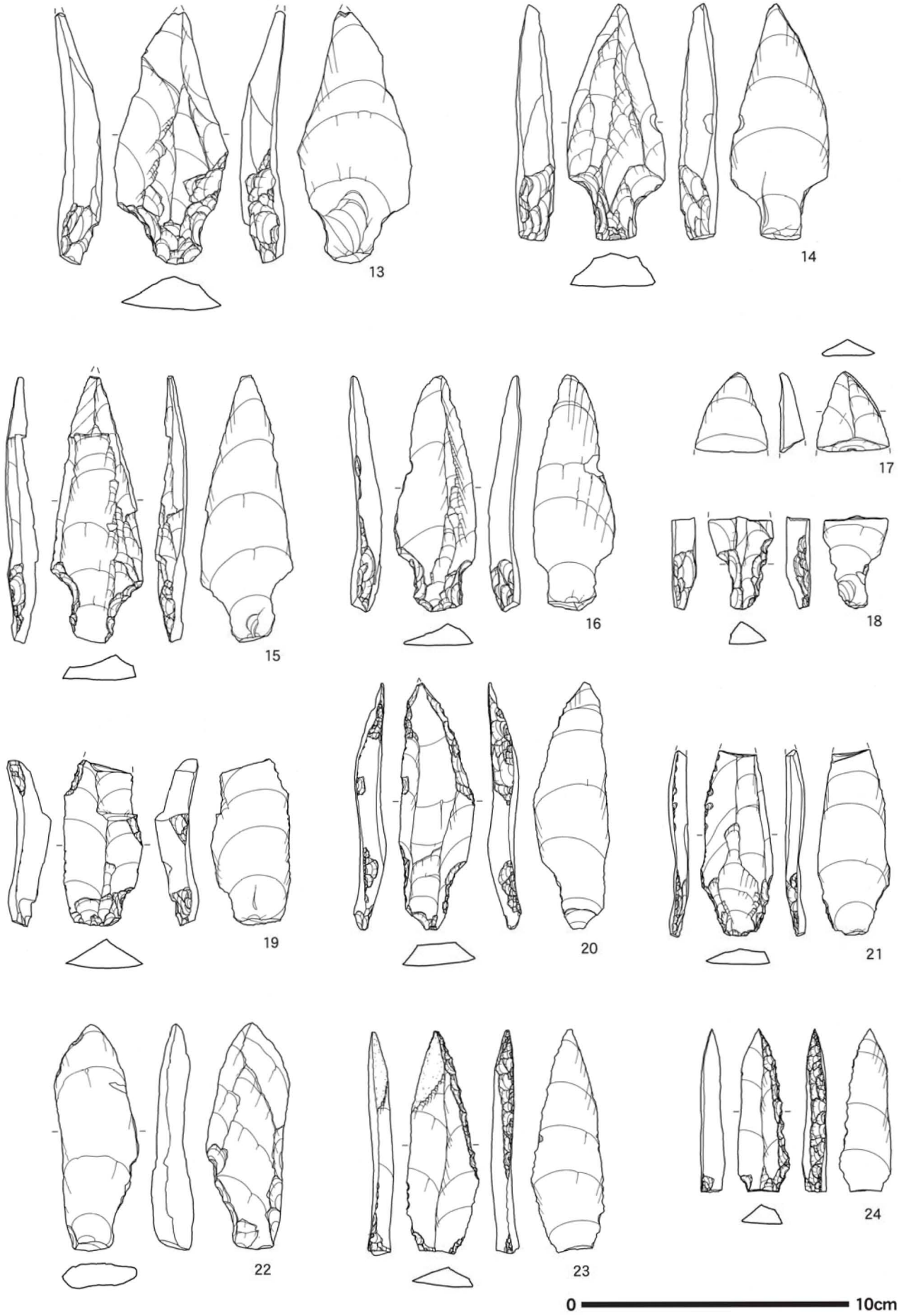
第11図　前ノ田１期　礫群実測図１（S＝1／30）



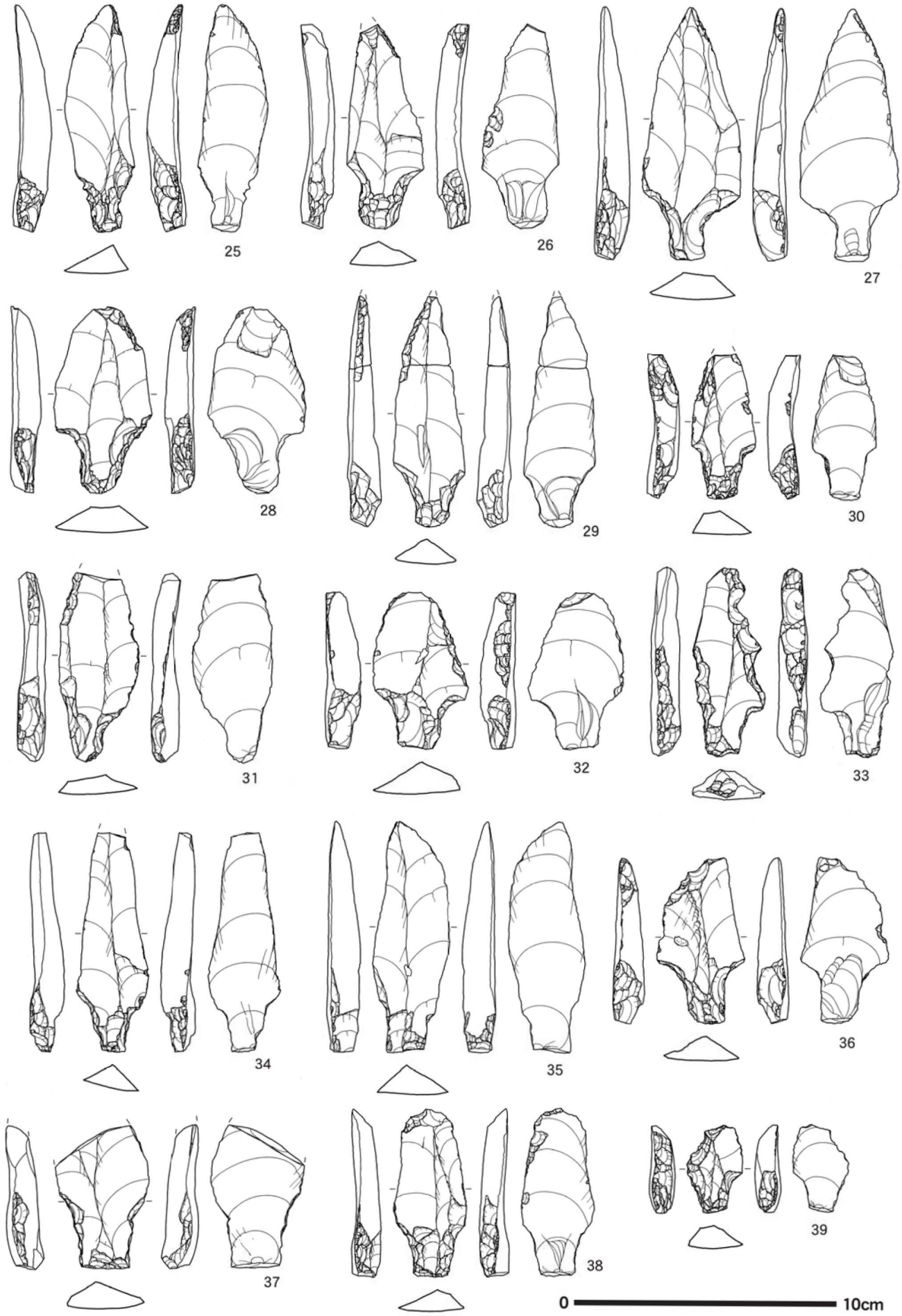
第12図　前ノ田１期　礫群実測図２（S＝1／30）



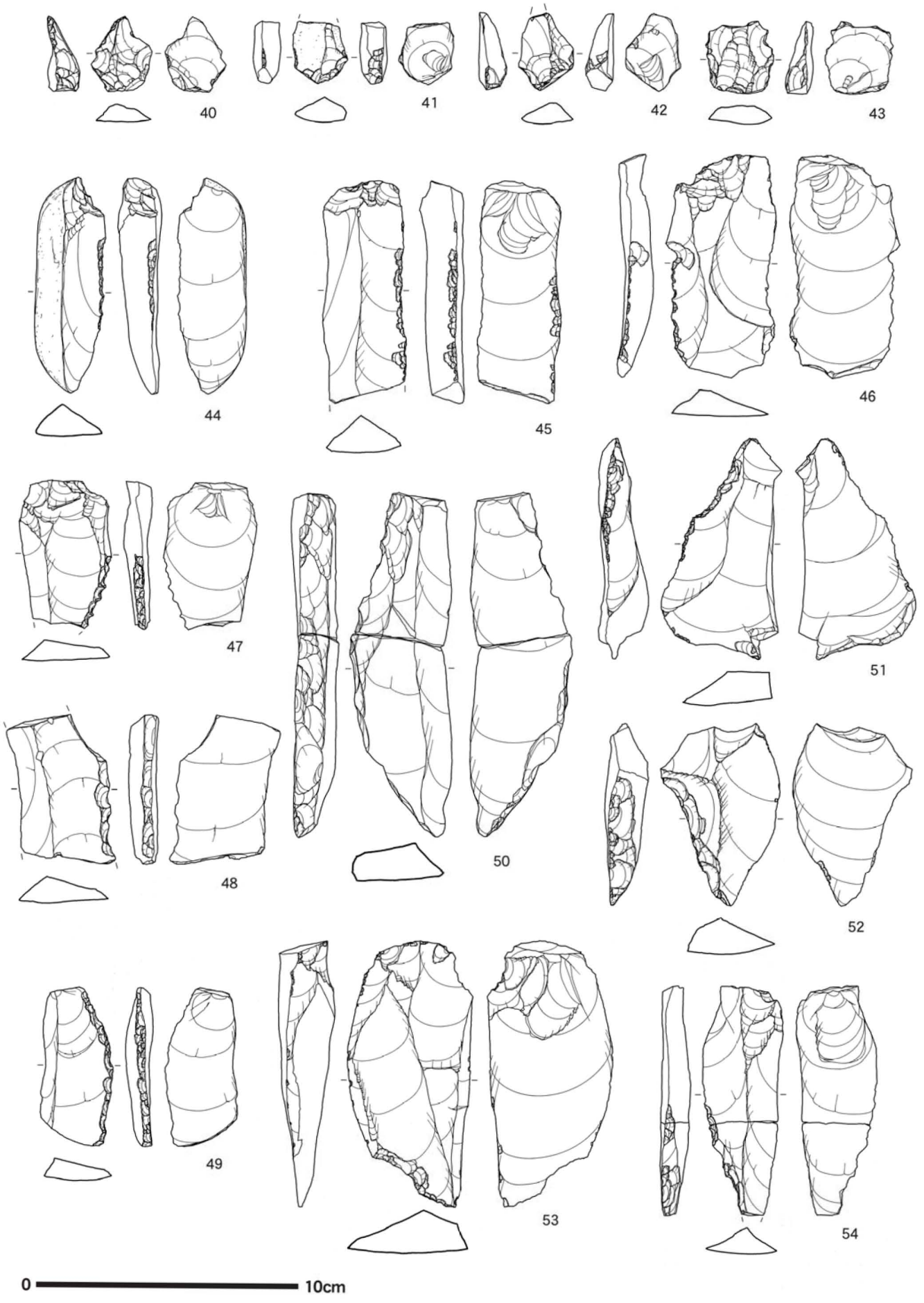
第13図　前ノ田１期　遺物実測図１（S＝1／2）



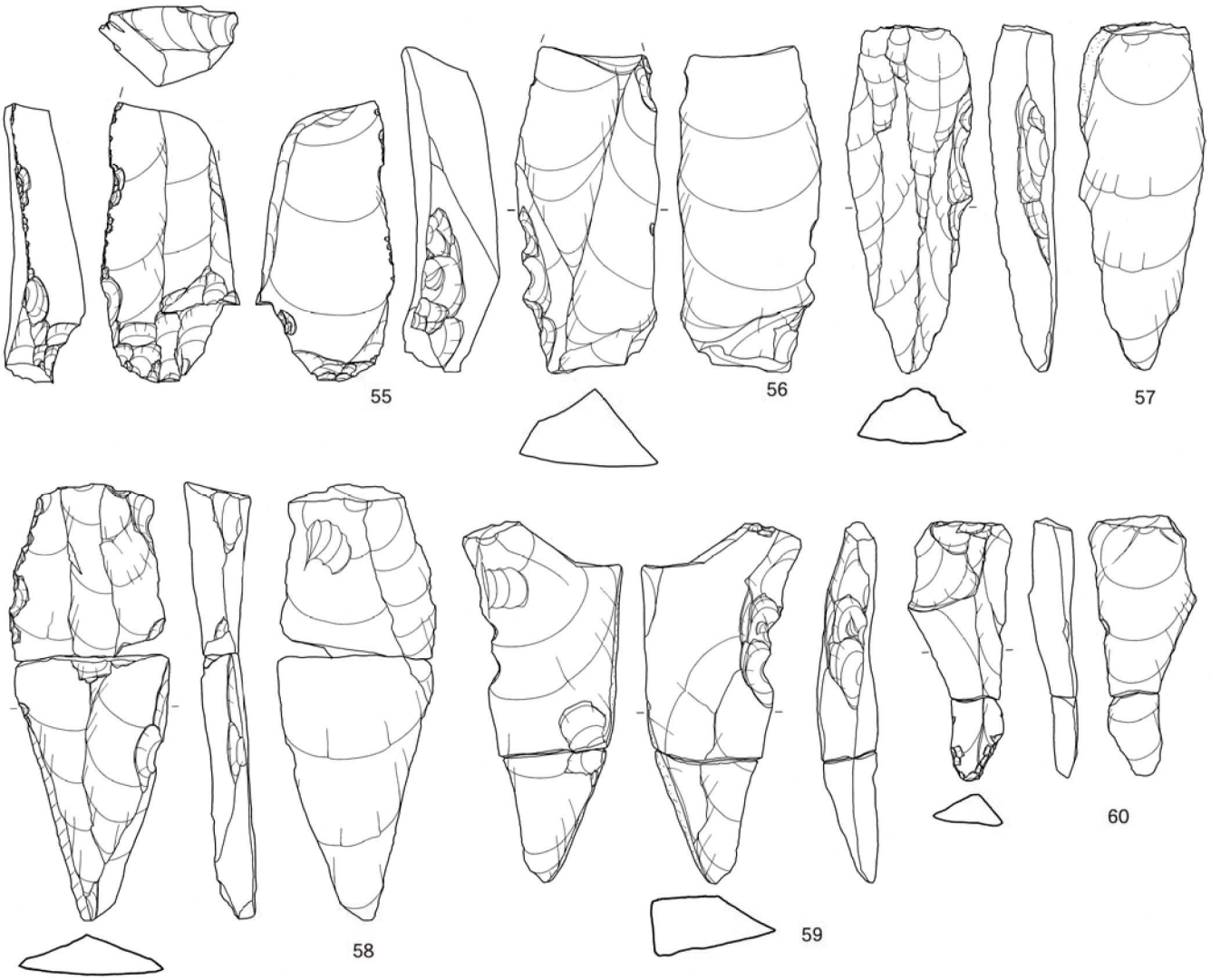
第14図　前ノ田１期　遺物実測図２（S＝1／2）

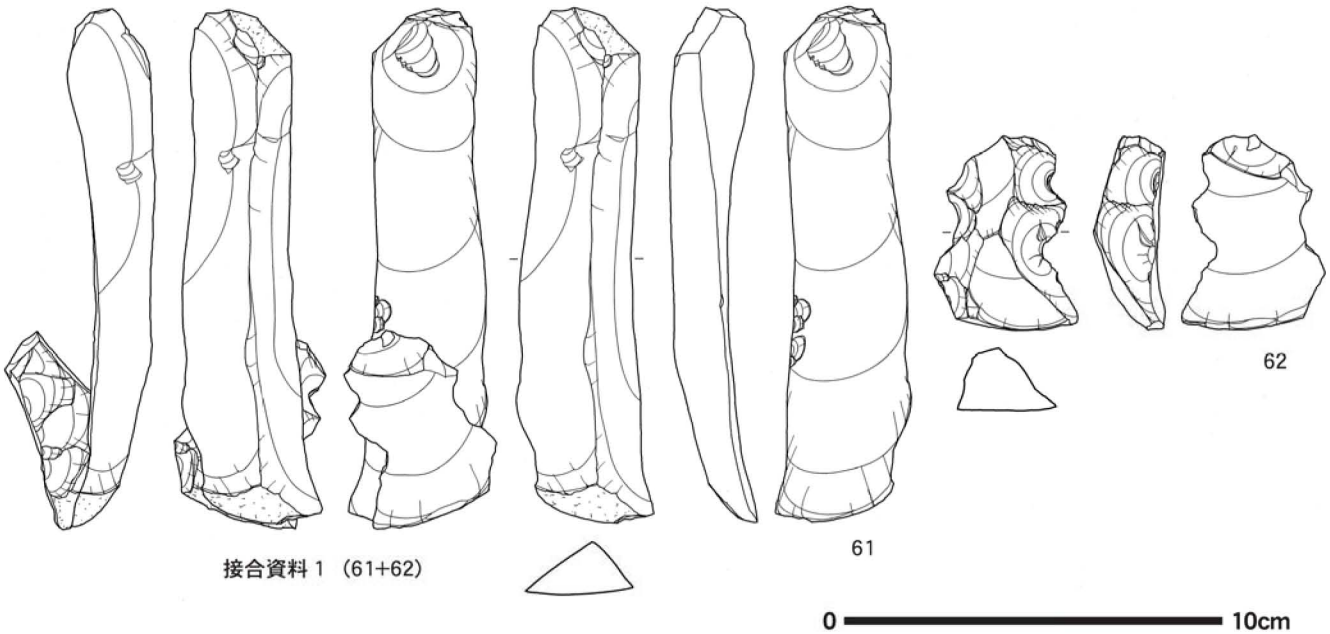


第15図　前ノ田１期　遺物実測図３（S＝1／2）

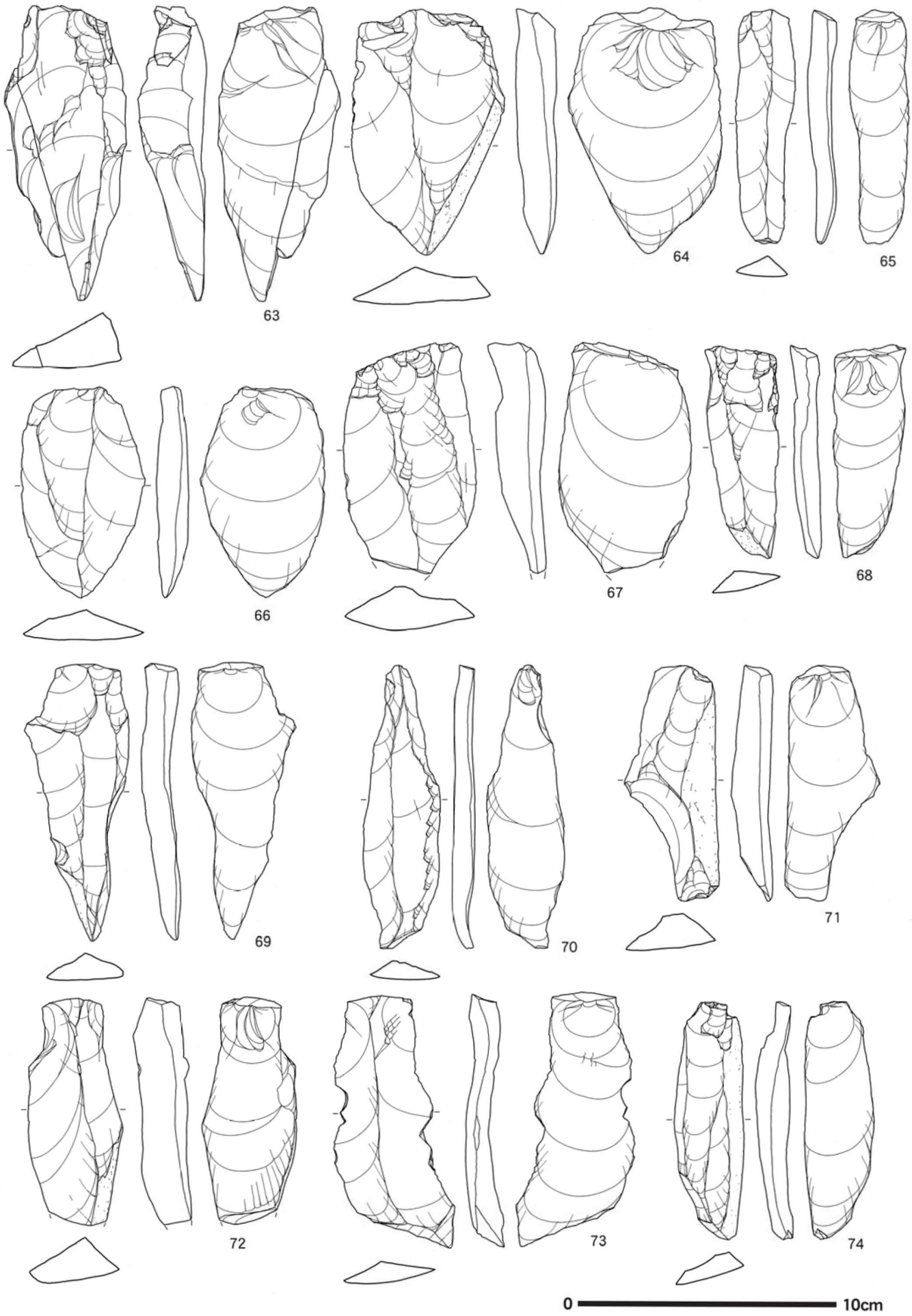


第16図　前ノ田１期　遺物実測図４（S＝1／2）

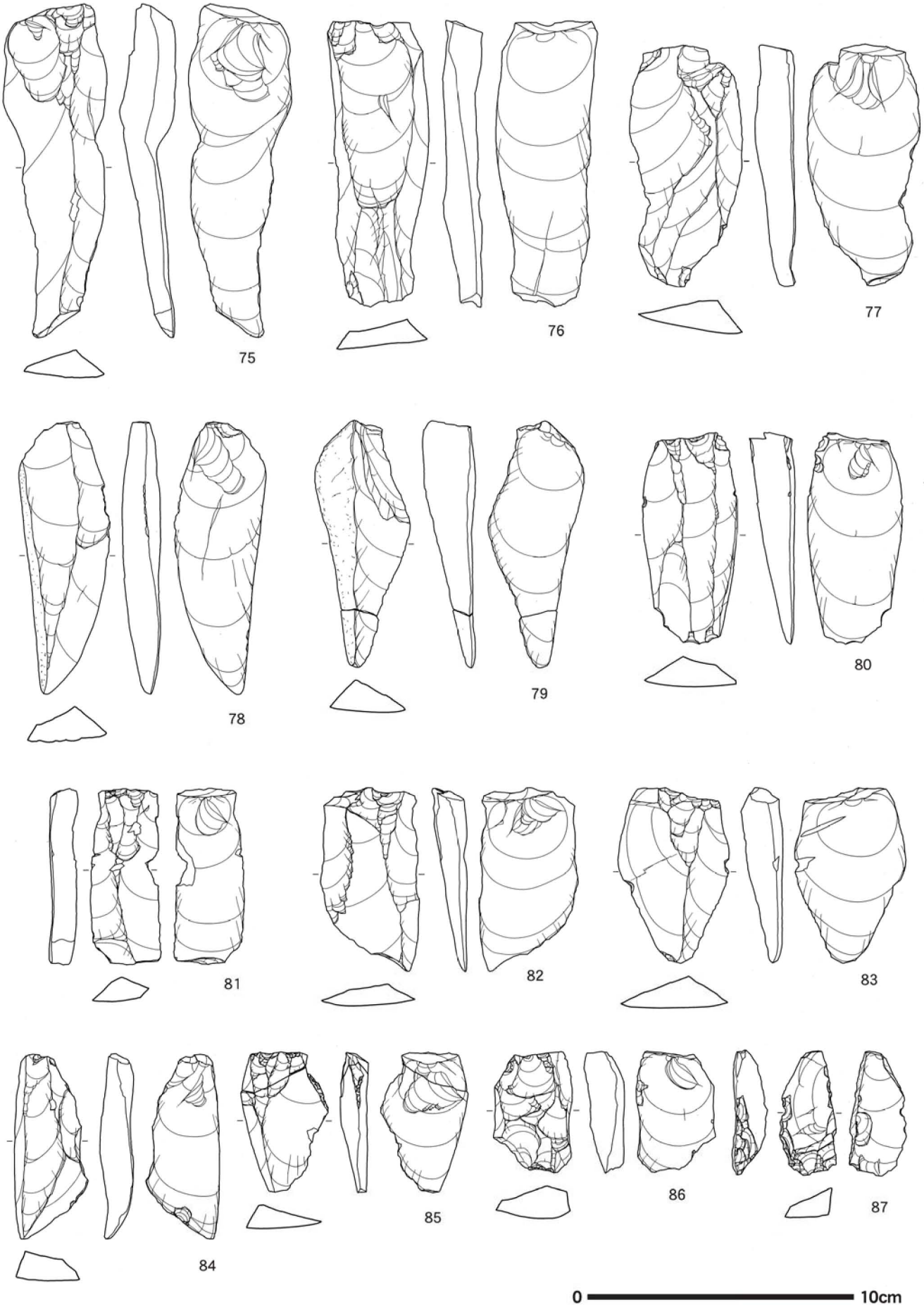




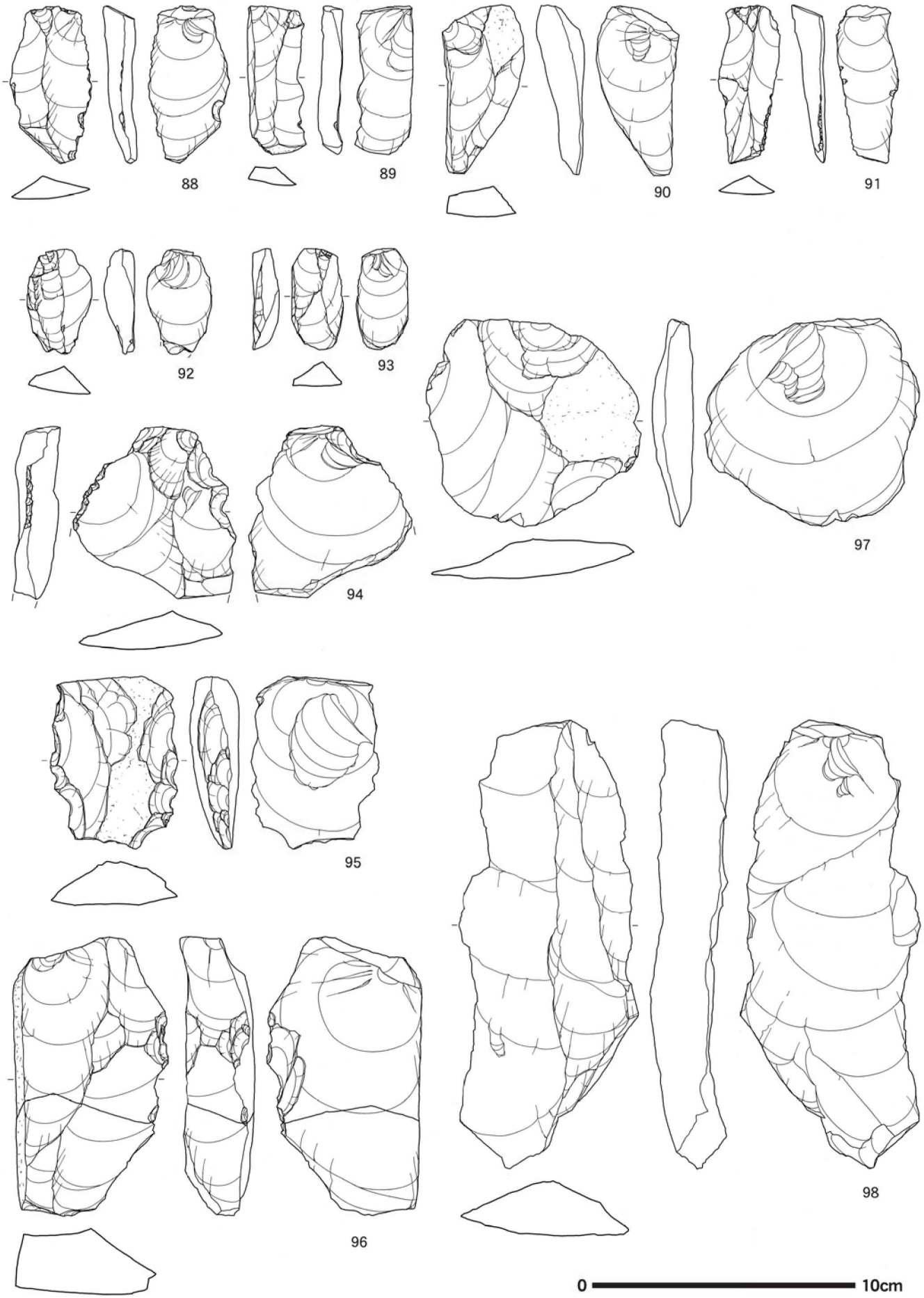
第17図　前ノ田１期　遺物実測図５（Ｓ＝1／2）



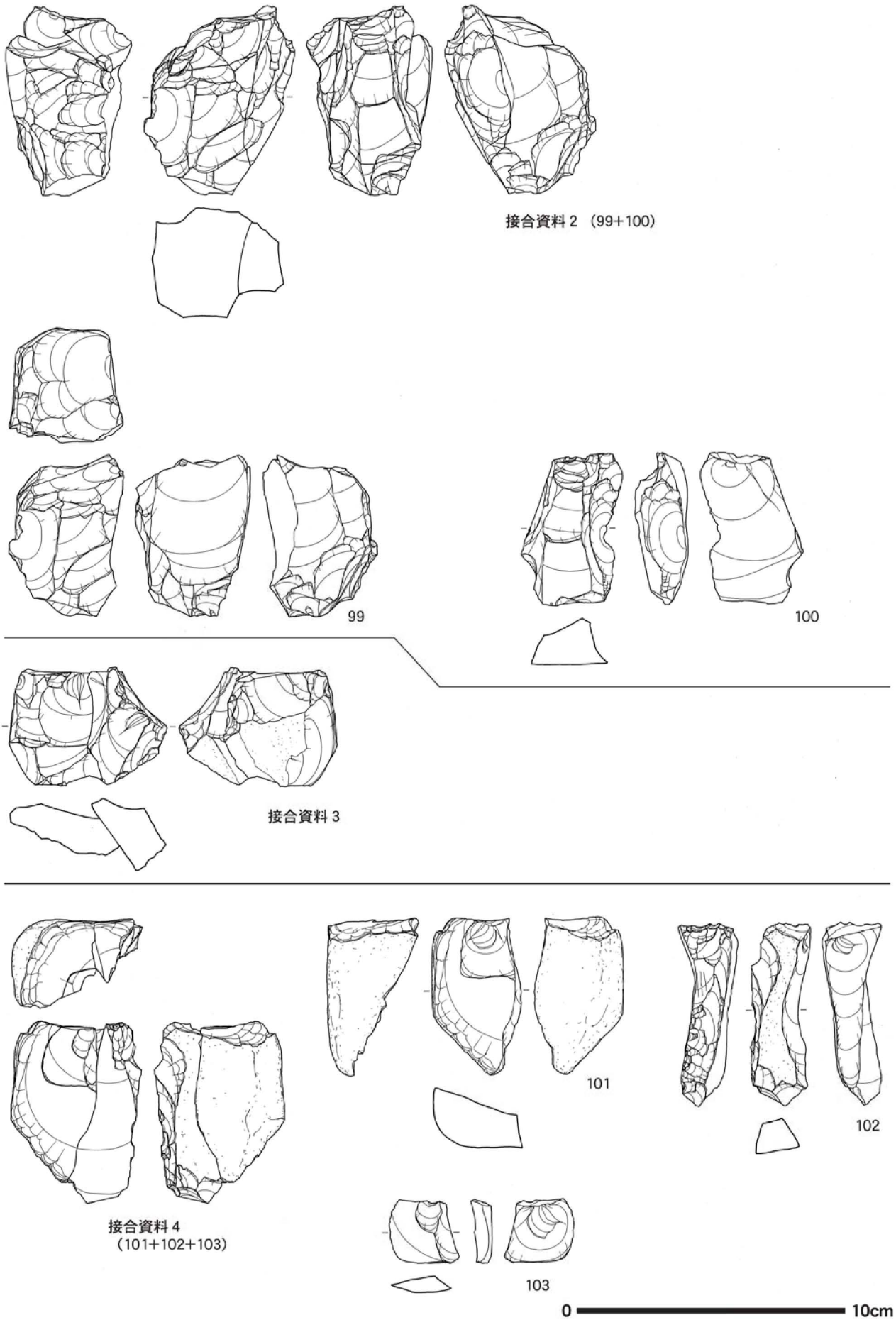
第18図　前ノ田１期　遺物実測図６（S＝1／2）



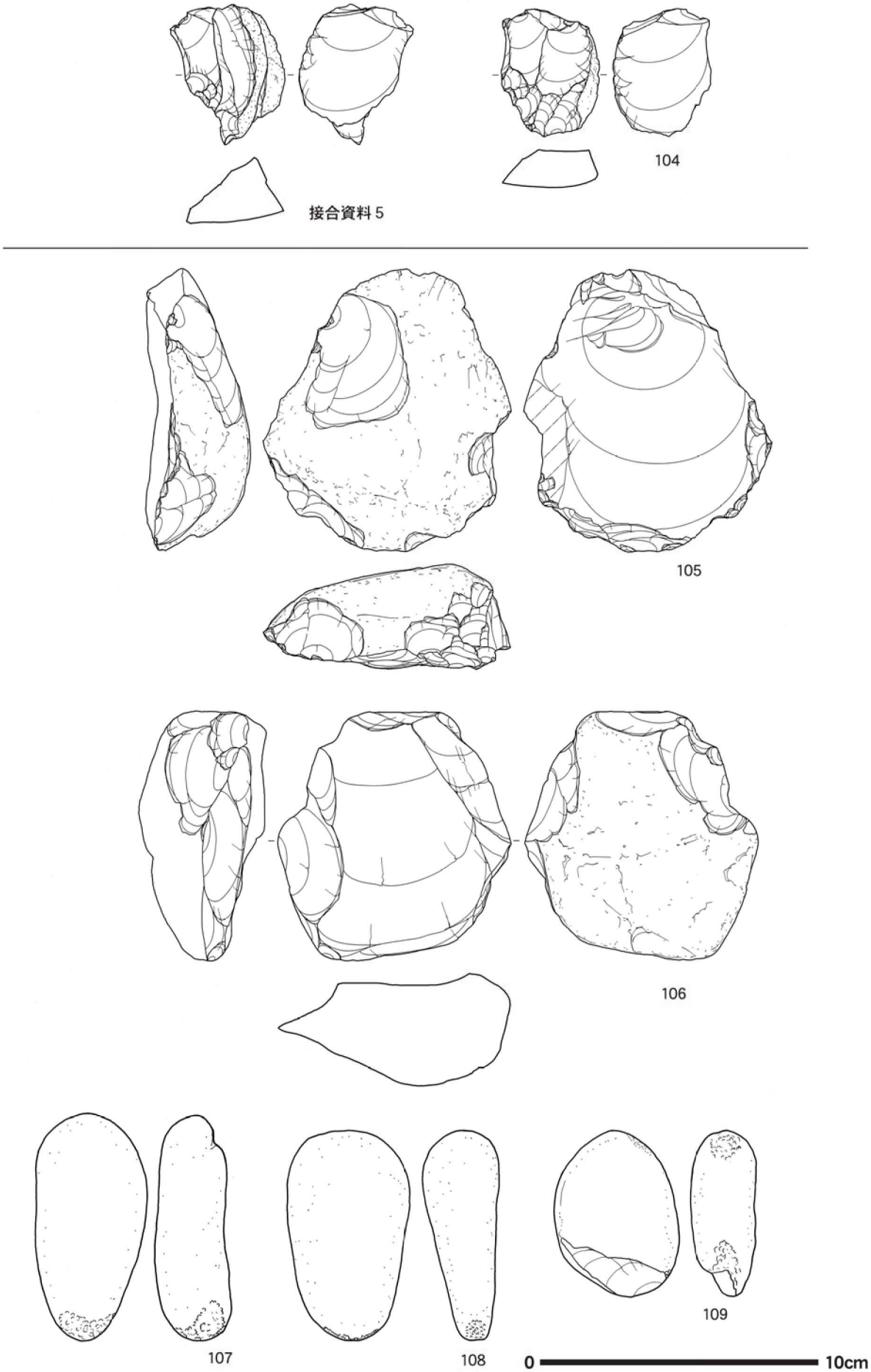
第19図　前ノ田１期　遺物実測図７（Ｓ＝1／2）



第20図　前ノ田１期　遺物実測図８（Ｓ＝1／2）



第21図　前ノ田１期　遺物実測図９（Ｓ＝1／2）



第22図　前ノ田１期　遺物実測図10（Ｓ＝1／2）

4．前ノ田２期

Ⅳ層～Ⅴ層を中心に角錐状石器、横長剥片素材・縦長剥片素材のナイフ形石器、台形石器が出土している。中でも横長剥片関連の遺物が目立ち、一部ブロックを形成する。遺構は25基の礫群を検出している。

【遺構】（第26～30図）

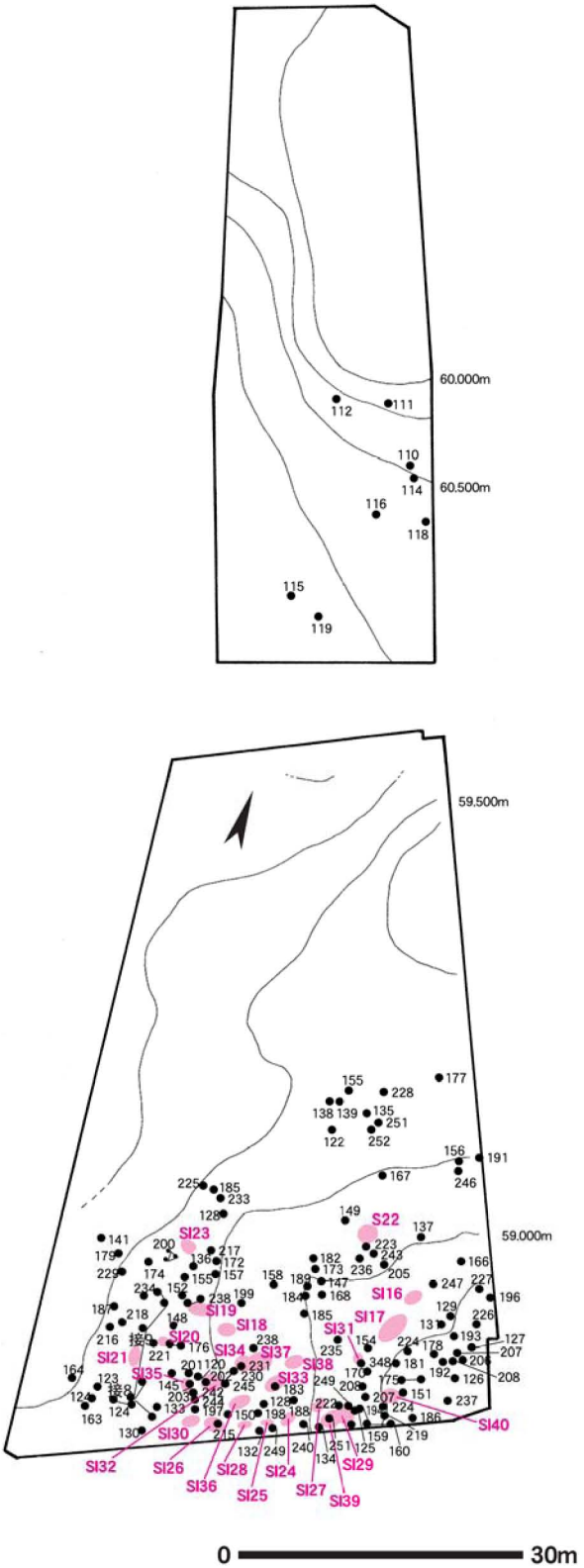
礫群は、Ａ区南側を中心に25基が検出された。礫群の分布は遺物の出土範囲と重複している。礫群を構成する礫の分布は、非常に散漫であることがあげられる。また他の時期と同様、半数以上が完形に近い礫を使用し、赤化礫も約半数を占める（第２表）。中でも大型の完形礫を含む礫群が、調査区縁辺部にて多く見られる。さらにSI16・17で見られるように大型礫が直立・斜位の状態で検出されるものも見られた。これらの状況は、検出場所が低地への落ち際付近であることや、遺物の出土状況からも、原位置を動いている可能性が高いが、礫の赤化度合が低いことも合わせてこれらの礫群の用途に関しては注意を要する。なおＢ区で遺構の検出は見られなかった。

【遺物出土状況】（第23図）

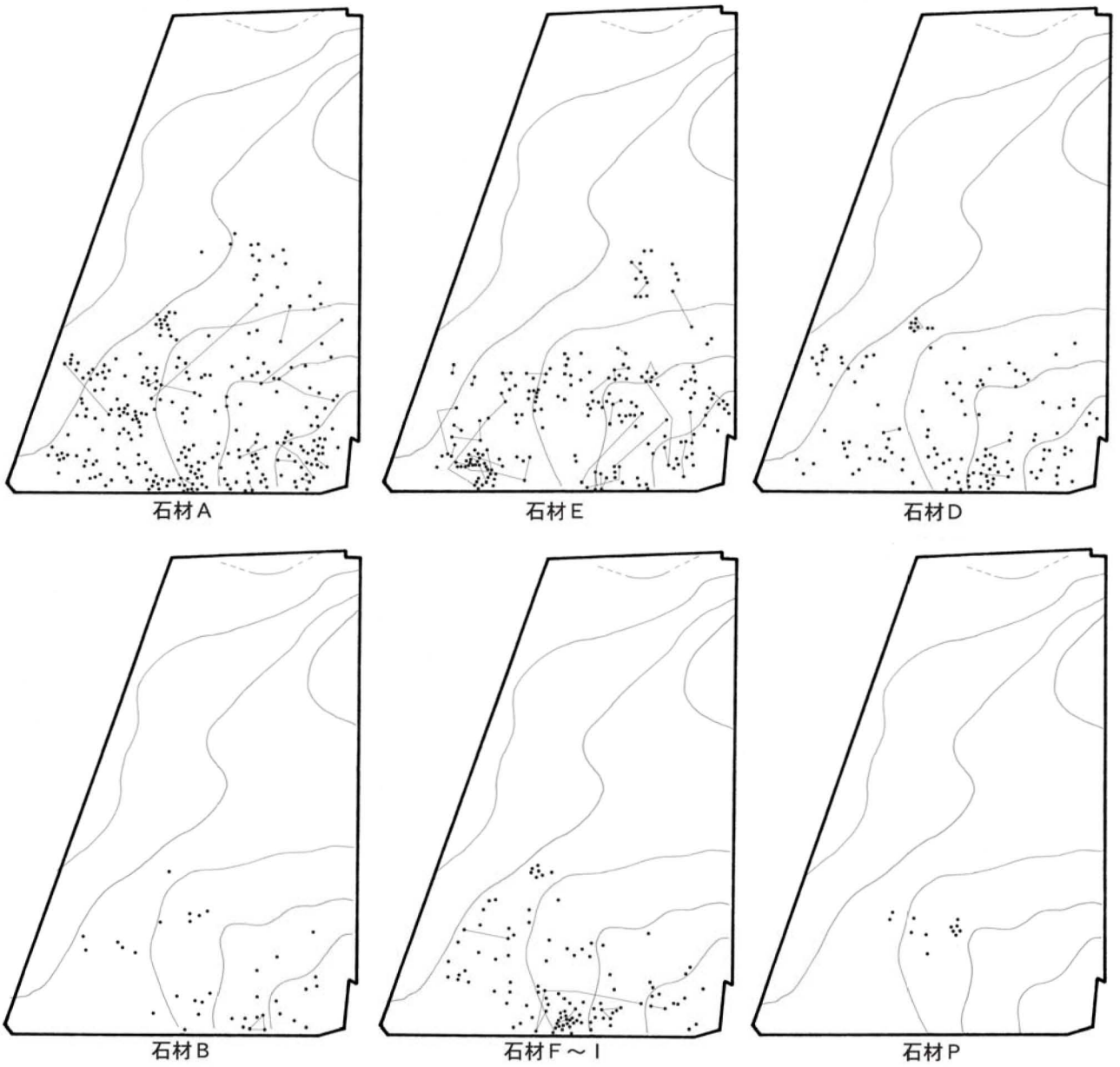
遺物はＢ区ではⅤ層中～下位を中心に大型の角錐状石器等が少量出土しているのみで、大半は浅い谷を挟み、南側に広がるＡ区に集中する（第23図）。Ａ区での出土状況はⅣｂ層からⅤａ層を中心に、３期・４期の石器と平面、垂直分布とも重複しながら、調査区南側にて散漫に分布している。

石材別に見る遺物の出土状況（第24図）からは石器製作の場を示すような状況が僅かに見られた。その一つとして石材Ｅにおける瀬戸内技法関連のブロックがあげられる（第25図）。瀬戸内技法系の石核・剥片（209・接合資料８・９）等の集中箇所があり、そこでは密な接合関係を示している。また付近からは、同一と思われる石材を用いたナイフ形石器も出土している。なお石材Ｅは、灰色のホルンフェルス系の石材を一括して分類しており、多数の母岩を含むことが想定される。その中で、この集中箇所に分布するものは、筋が入り、黄色味がかった風化気味の一群が集中しており同一母岩の可能性が高い。

その他、製品との接合関係が見られたものとしては、スクレイパー（第33図接合資料６）があげられるが、その他、石器製作の痕跡を見いだせるような分布や接合関係は見いだせなかった。



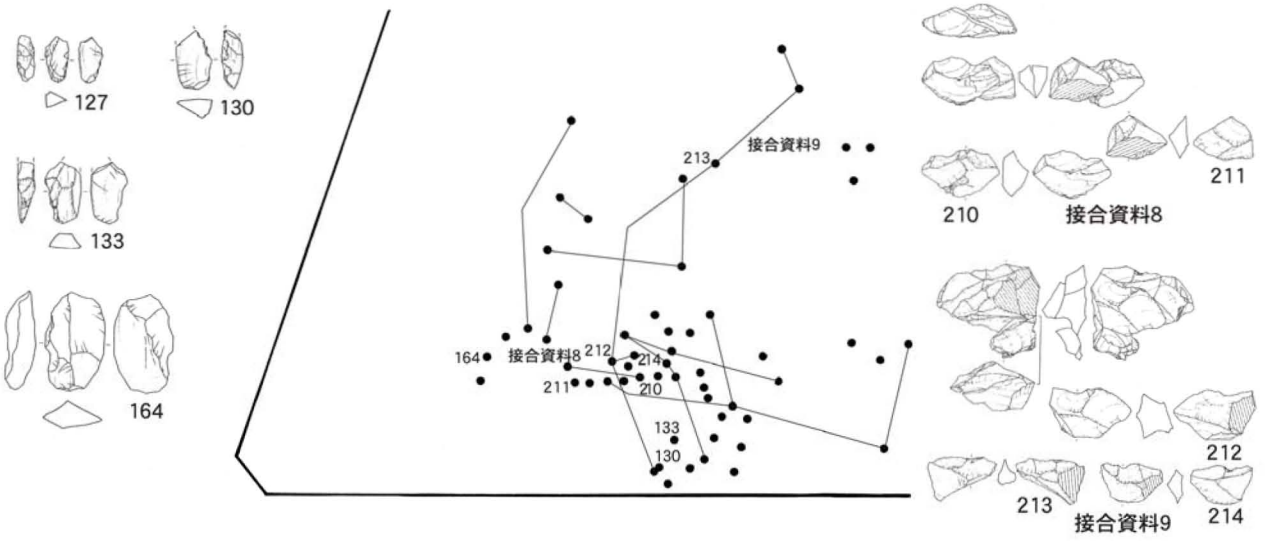
第23図　前ノ田２期遺構・遺物分布図
（Ｓ＝1／800）



第24図　前ノ田2・3期　石材別遺物分布図（S＝1／1,000）

※2期・3期の石器を詳細に分別することができなかったため、同時に表示している。

0 ―― 20m



第25図　石材E石器ブロック（S＝1／500）

【出土遺物】（第31～46図）

Ｂ区からは、角錐状石器と、剥片尖頭器が出土している。角錐状石器は大型で、厚みを持つものが占めており111～113は基部調整が顕著である。117・118は右側に顕著な基部調整を施している一側縁加工の剥片尖頭器である。

Ａ区からは、ナイフ形石器、角錐状石器、台形石器等が出土しており、中でも横長剥片を素材とした製品が多く出土しているのが特徴である。それらのナイフ形石器は一側縁加工を施し、もう片側に若干の基部加工を施すもの（120～134）が大半を占める。

135～140は縦長剥片素材のナイフ形石器である。139は基部上面に浅い抉りを持たせるような入念な調整が施されている。打面も除去している。

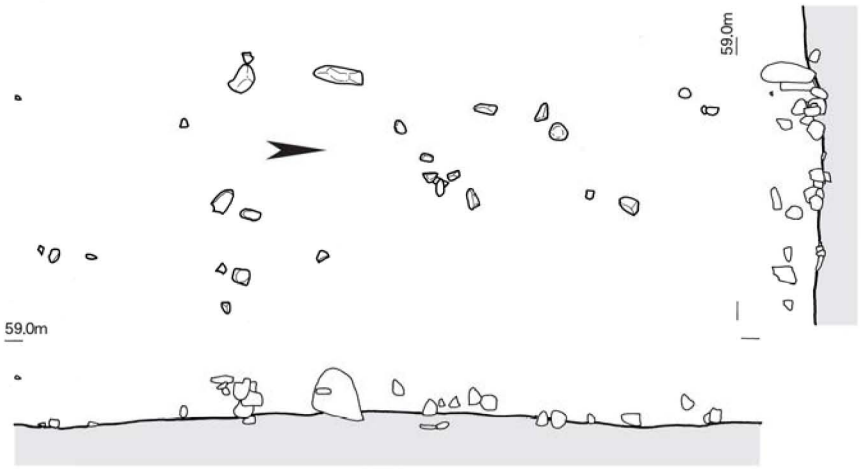
143～152は角錐状石器であり、Ａ区出土のものは大型品と小型品が混在する。大型品の石材は石材Ｅを用いているのに対して、小型品は石材Ｂ・Ｉなど緻密な石材を使用している。

155は剥片尖頭器である。右側に若干の基部調整を施し、左側先端部付近に背面側からの微細剥離を施している。

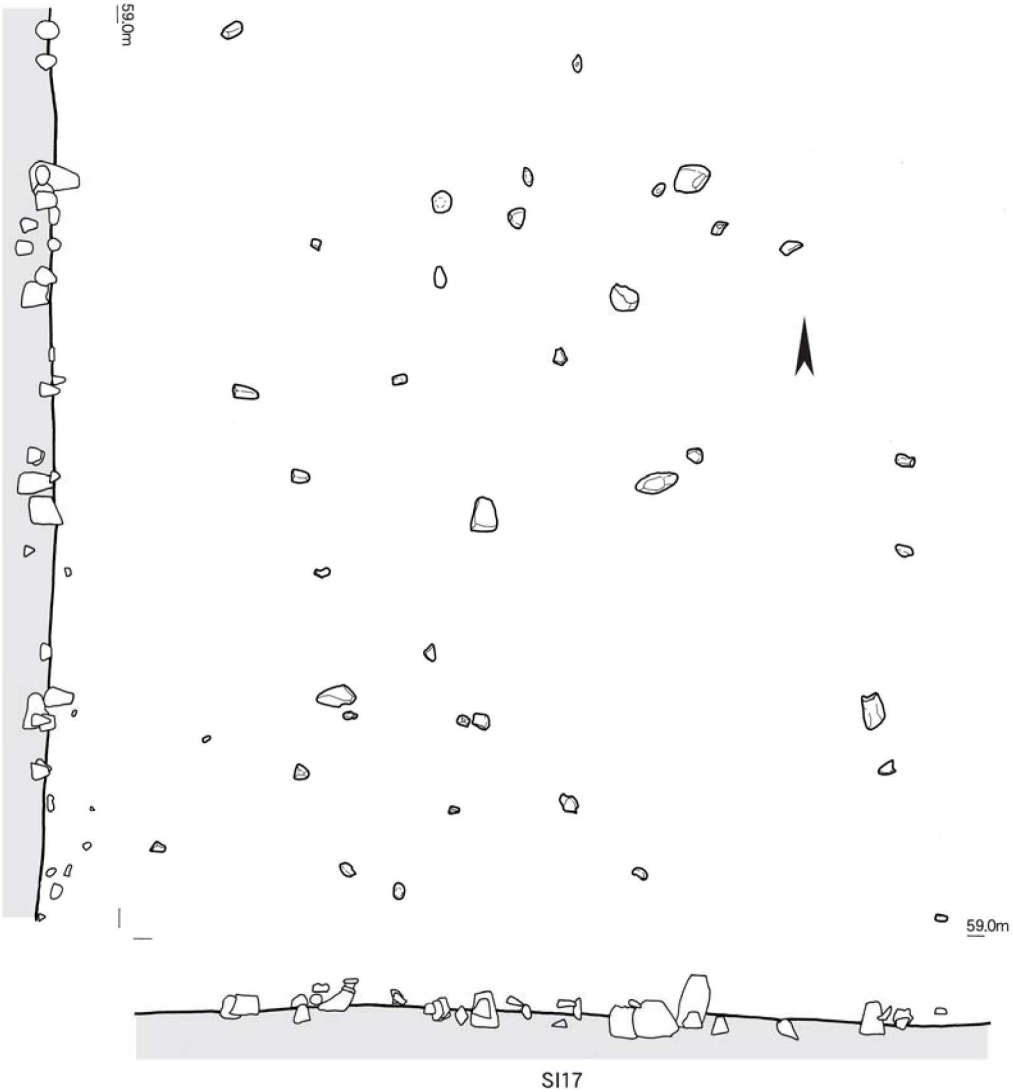
接合資料６はスクレイパーと剥片が接合しており、159は下方を打面として剥離し、その後打面を上方に変え、160を剥離している。裏面側から刃部調整を施している。161～166は横長の剥片であり、二次的に加工を施しているもの（161～164）がみられる。流紋岩系の石材を多く使用している。

167～199は縦長剥片であり188～195は寸詰まり気味である。接合資料７は縦長剥片の接合資料である。同一方向の打面から剥片剥離を行い、側縁加工時に破損したと思われる。製品には縦長剥片を素材としたものが少ないにもかかわらず、縦長剥片が多数出土している。205～208は礫面を剥離し打面を設け、幅広、不定形の剥片を剥離している。206～208は石材Ａを使用している。209、接合資料８・９は横長剥片、幅広の剥片を剥離した石核である。これらは瀬戸内技法系の石核であり、図化していないが、その他にも同様の石核が出土している。これらは調整剥片等を含みブロックを形成している。215・216は打面転移が顕著な小型の石核であり、作業面調整も顕著である。218～220は分割面を打面とし、218は礫面に沿って寸詰まり気味の剥片を、219・220は剥離面を打面とし、分割面を作業面に置き換え剥片を剥離している。221は石核全体を作業面とし、打面・作業面を入れ替えながら寸詰まりの剥片を剥離している。

222～224は打面を変えながら剥片剥離し、222は寸詰まりの剥片（注記No1191）と接合が見られる。224は礫面、節理面を打面として小型の剥片を剥離している。226・227は礫面除去することにより打面を作り出し、幅広の剥片を剥離している。 230～232は半截礫の分割面を主な作業面として、幅広の剥片を剥離している。233は分割面を打面とし、礫面に沿って縦長の剥片を剥離している。238は礫面を大きく残し、幅広、不定形剥片を交互剥離している。239は礫器である。



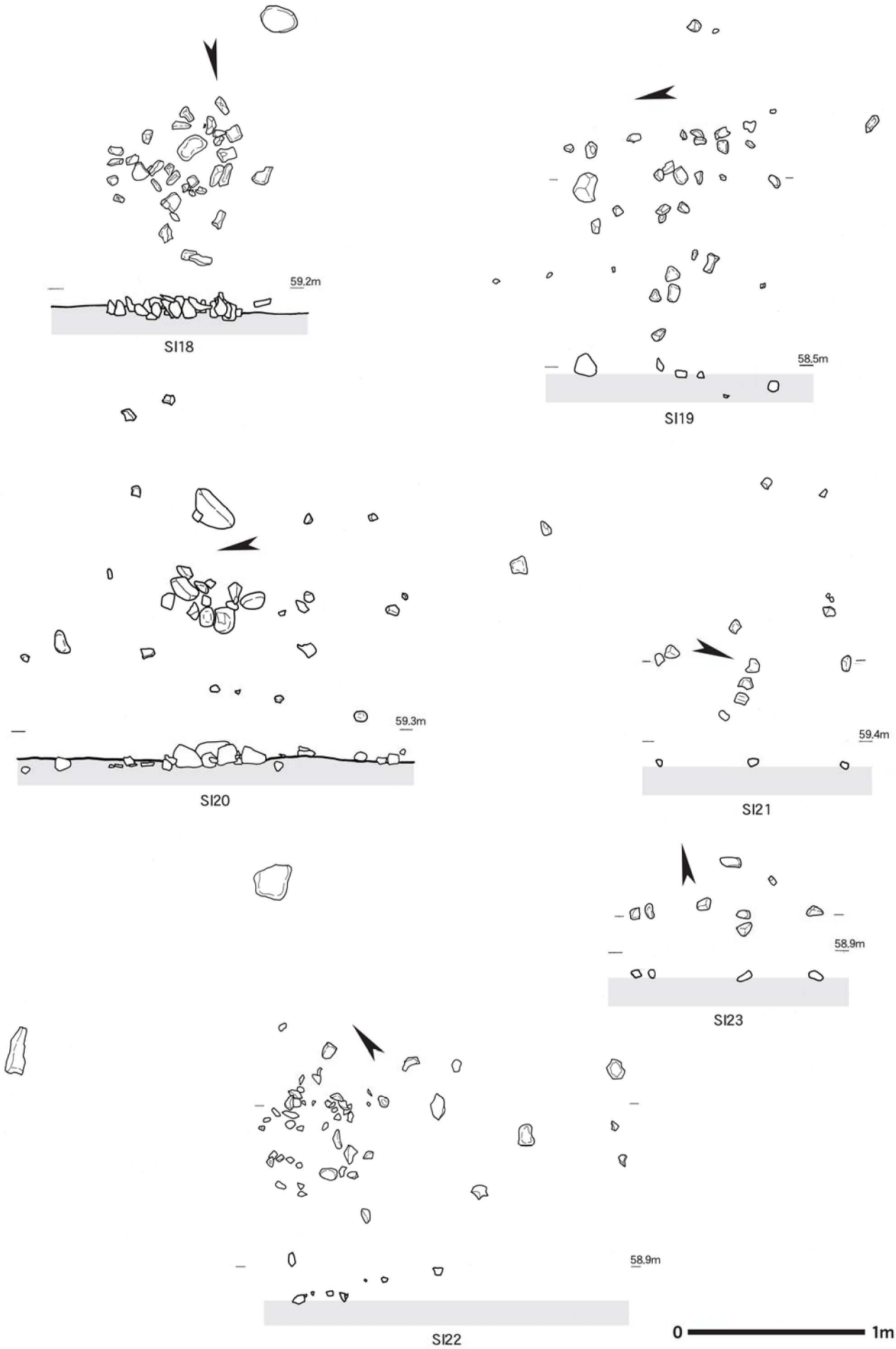
SI16



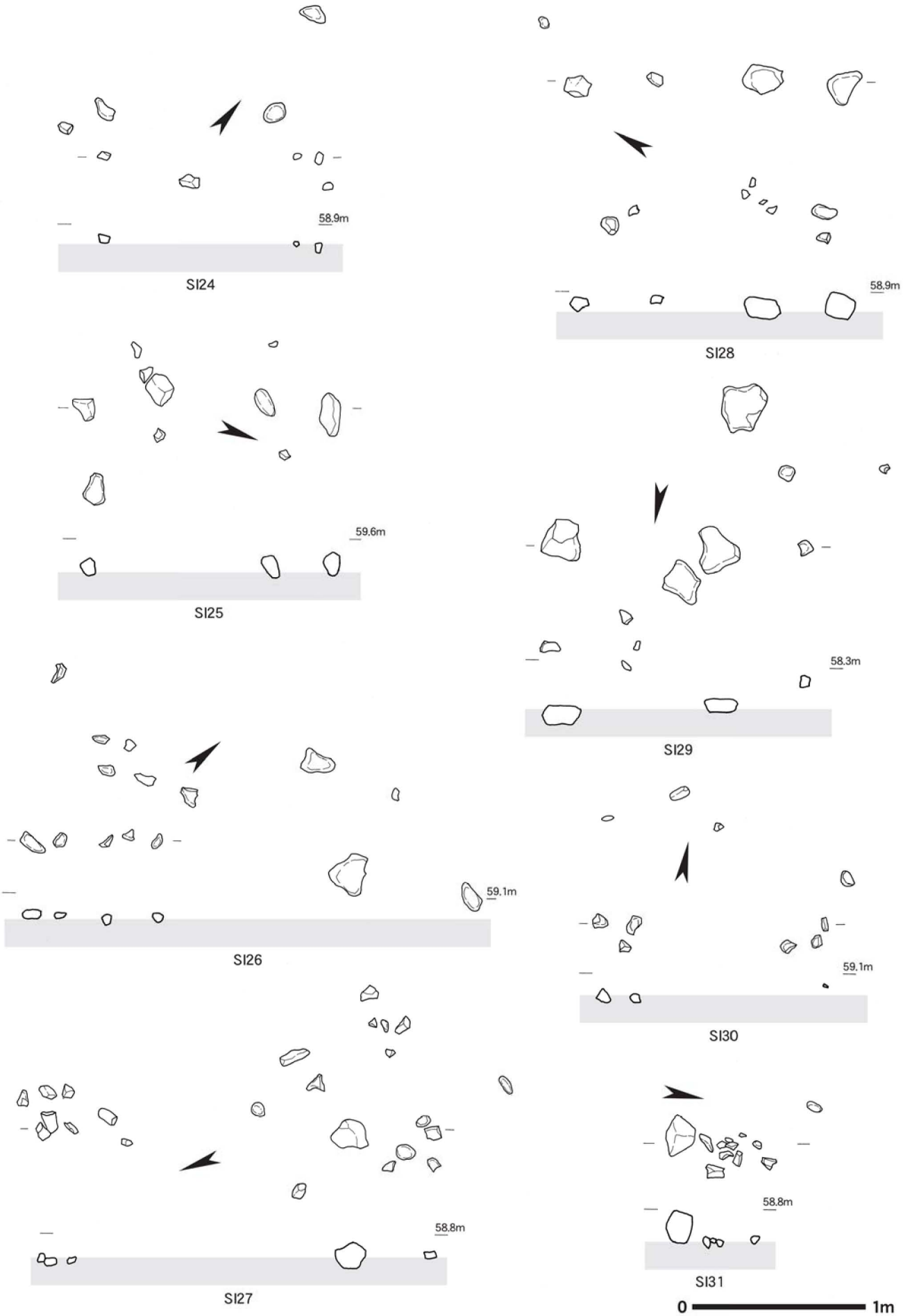
SI17

0 2m

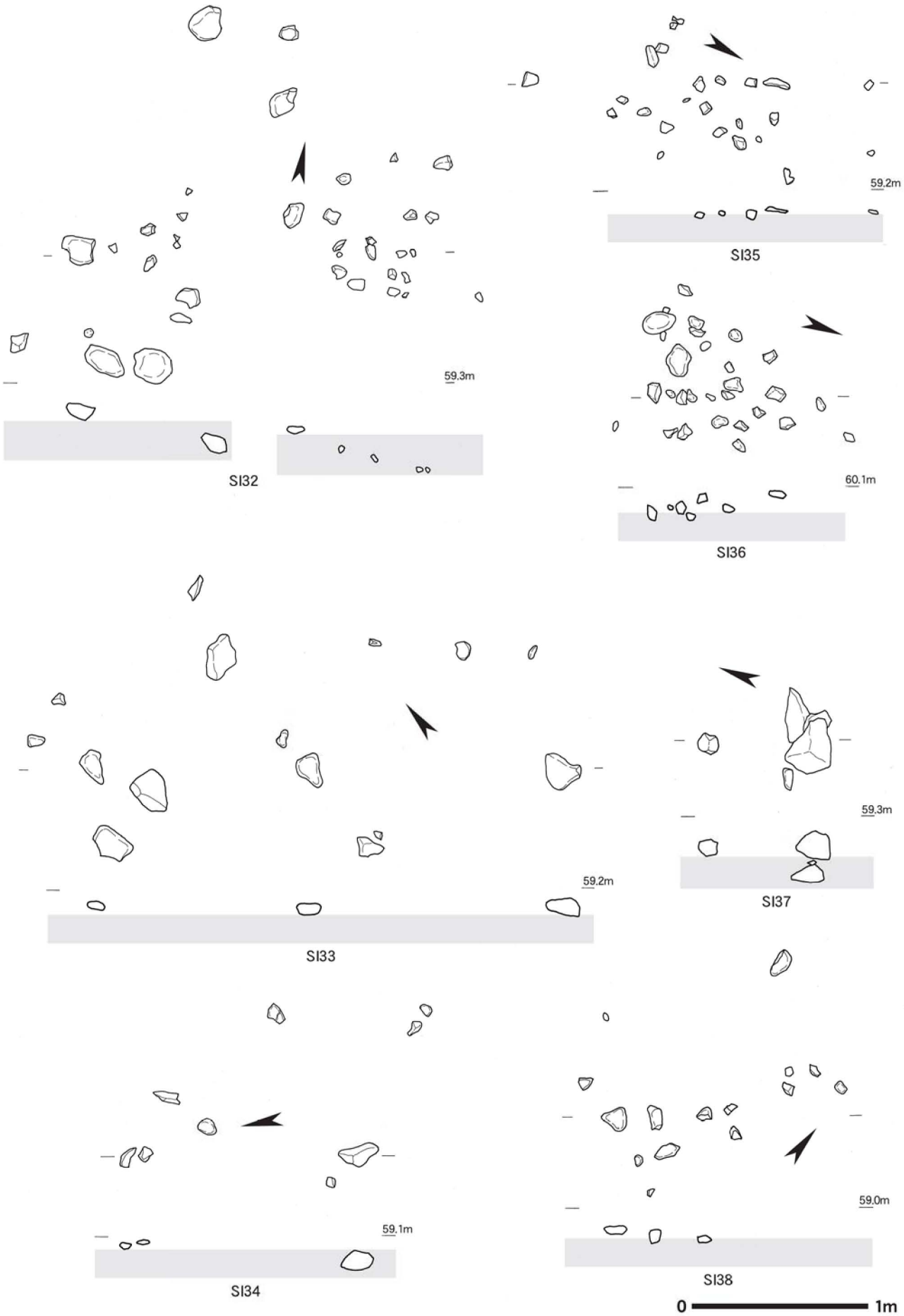
第26図　前ノ田２期　礫群実測図１（Ｓ＝1／40）



第27図　前ノ田２期　礫群実測図２（S＝1／30）

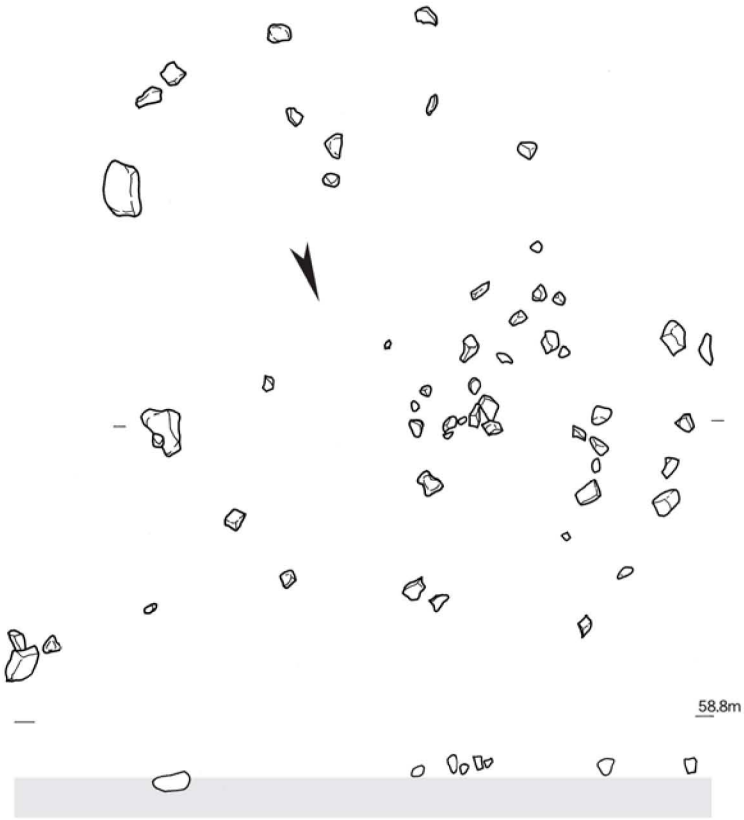


第28図　前ノ田２期　礫群実測図３（S＝1／30）



第29図　前ノ田２期　礫群実測図４（S＝1／30）

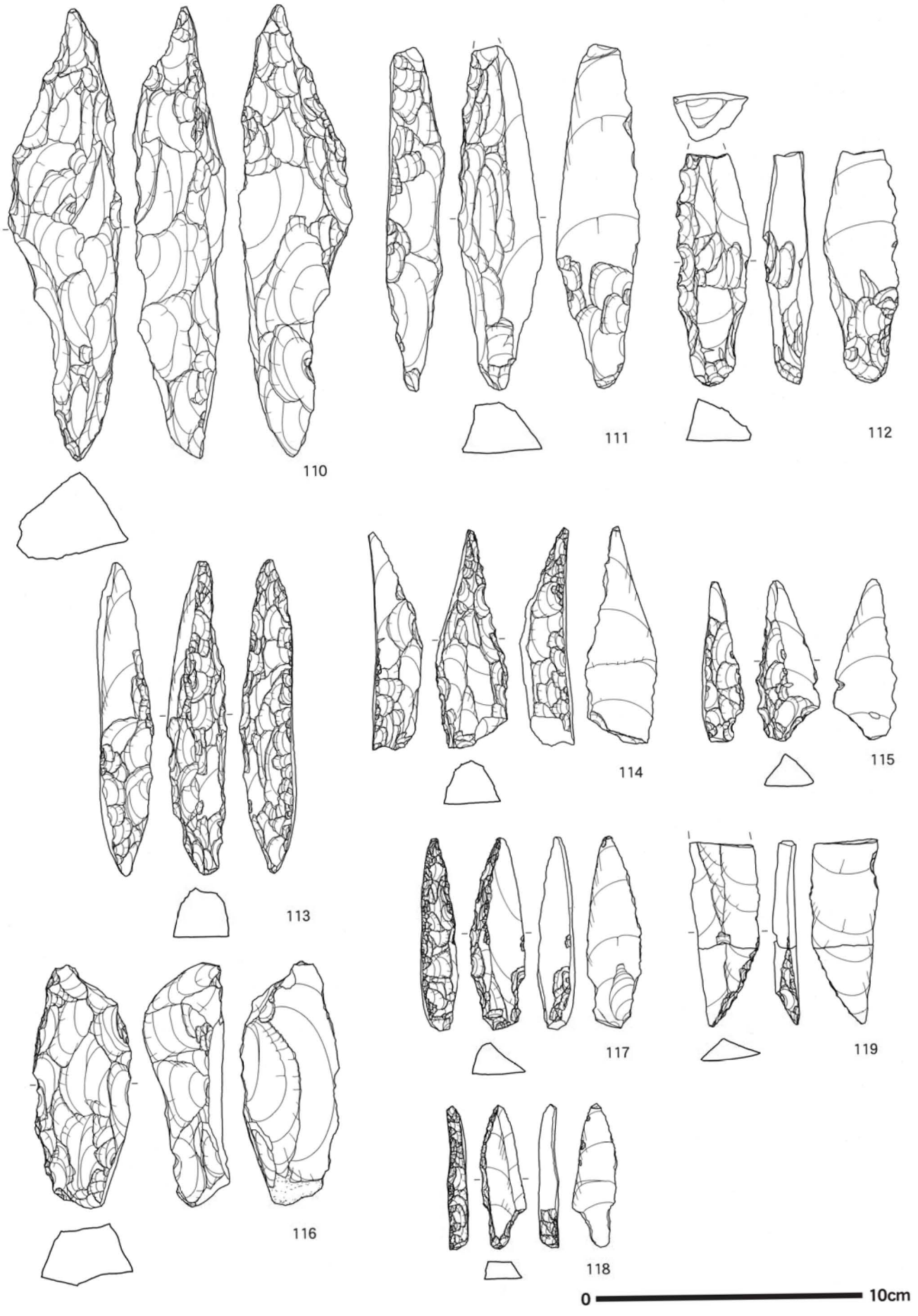
SI39



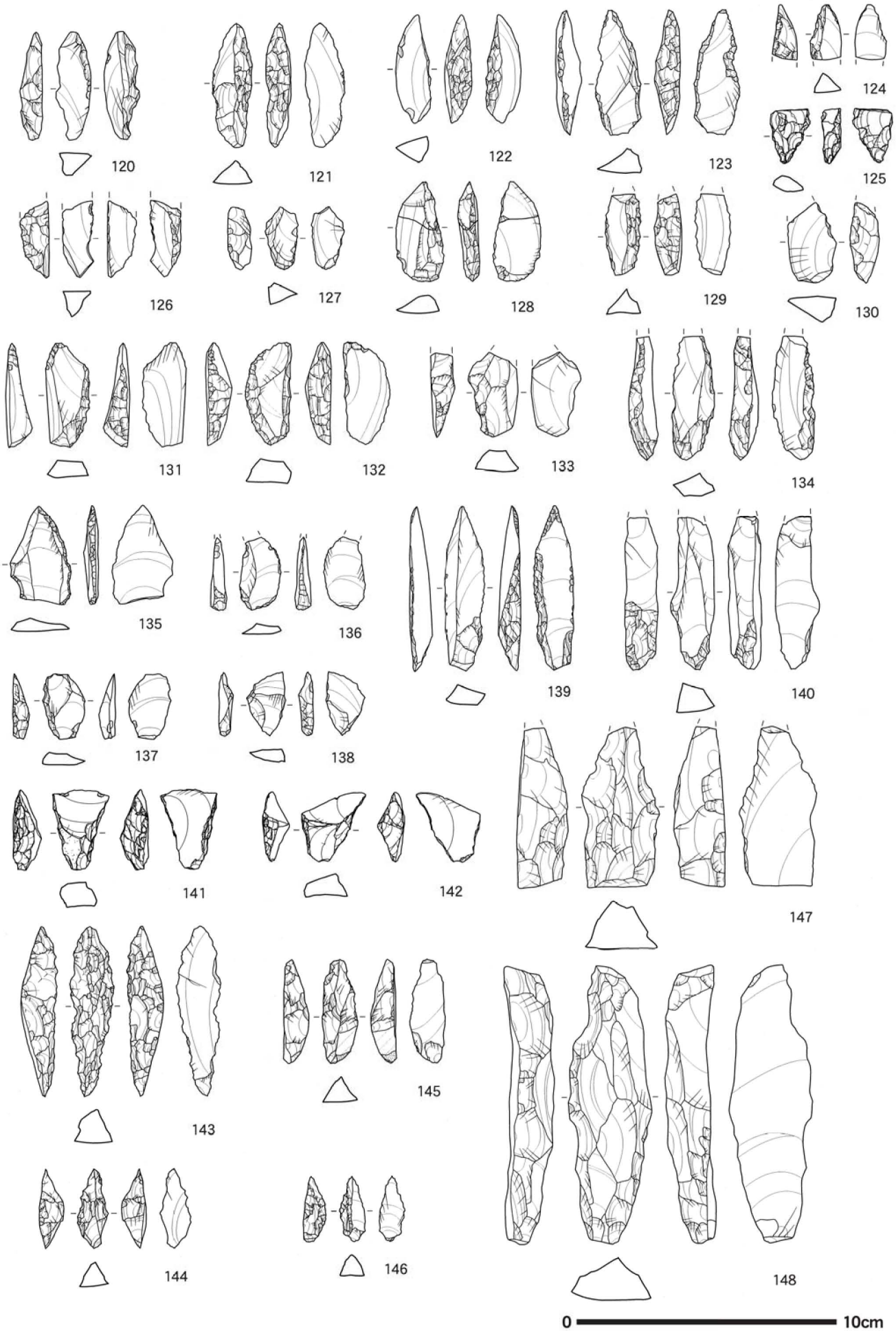
SI40

0 1m

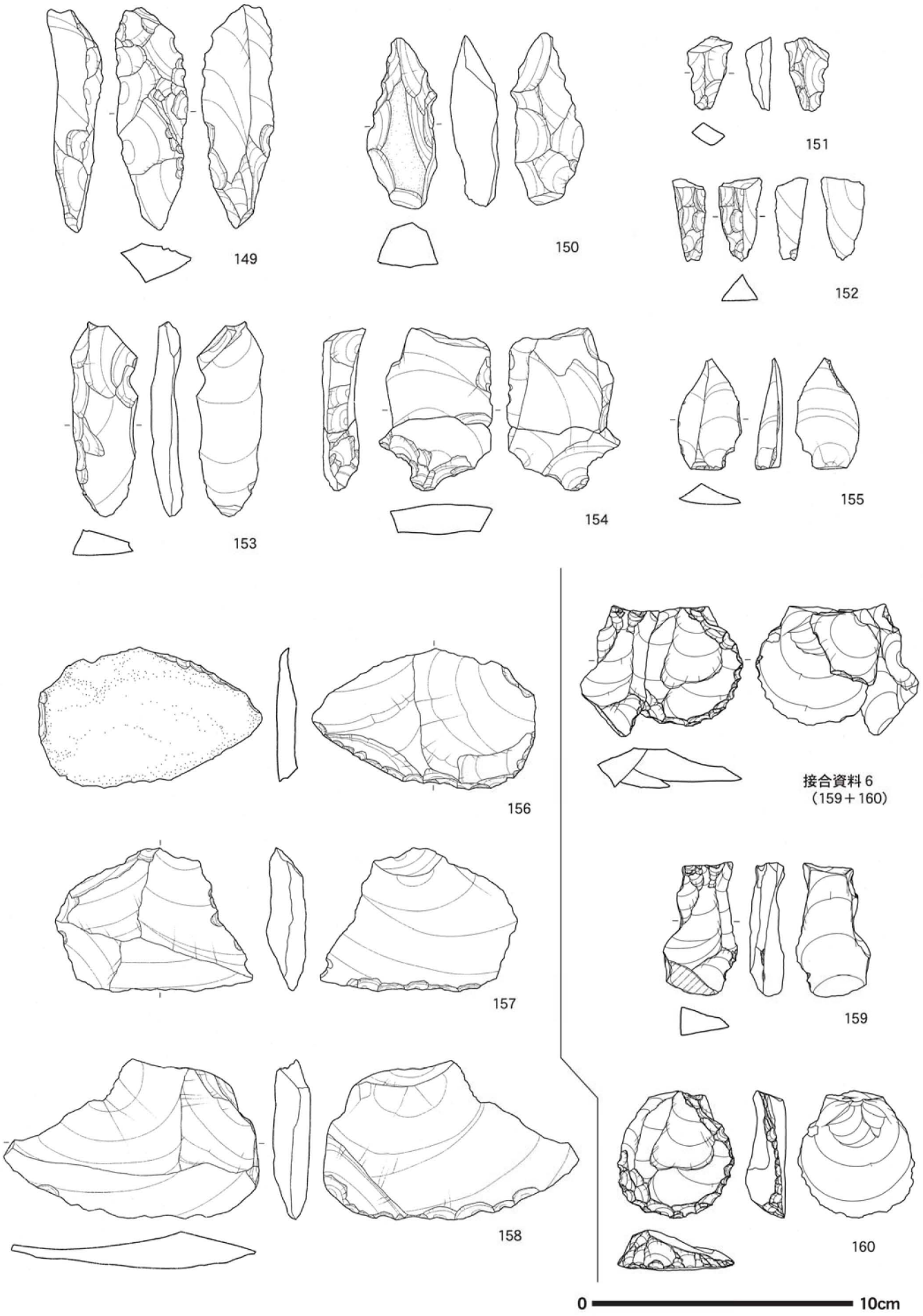
第30図　前ノ田２期　礫群実測図５（Ｓ＝1／30）



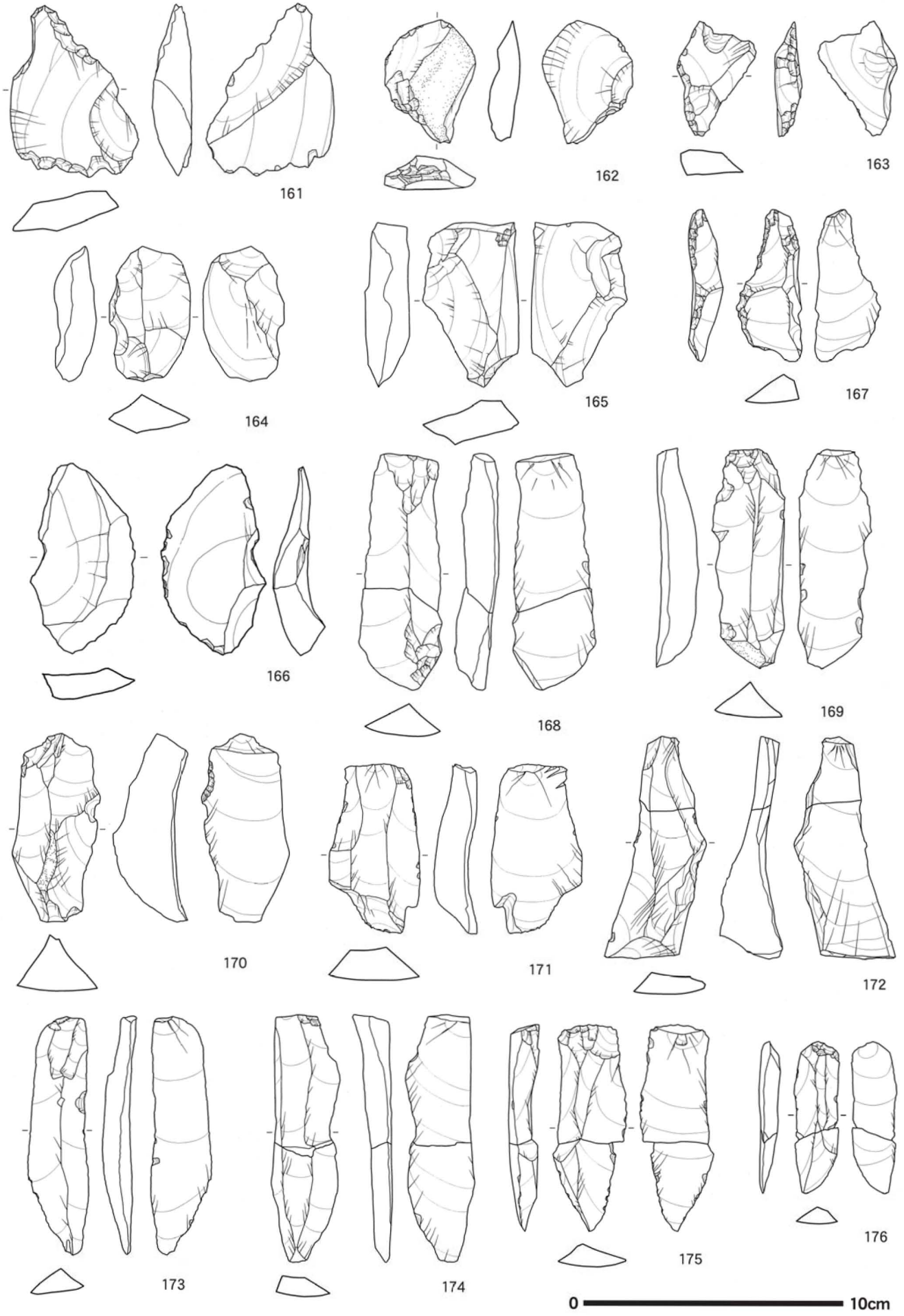
第31図　前ノ田２期　遺物実測図１（S＝1／2）



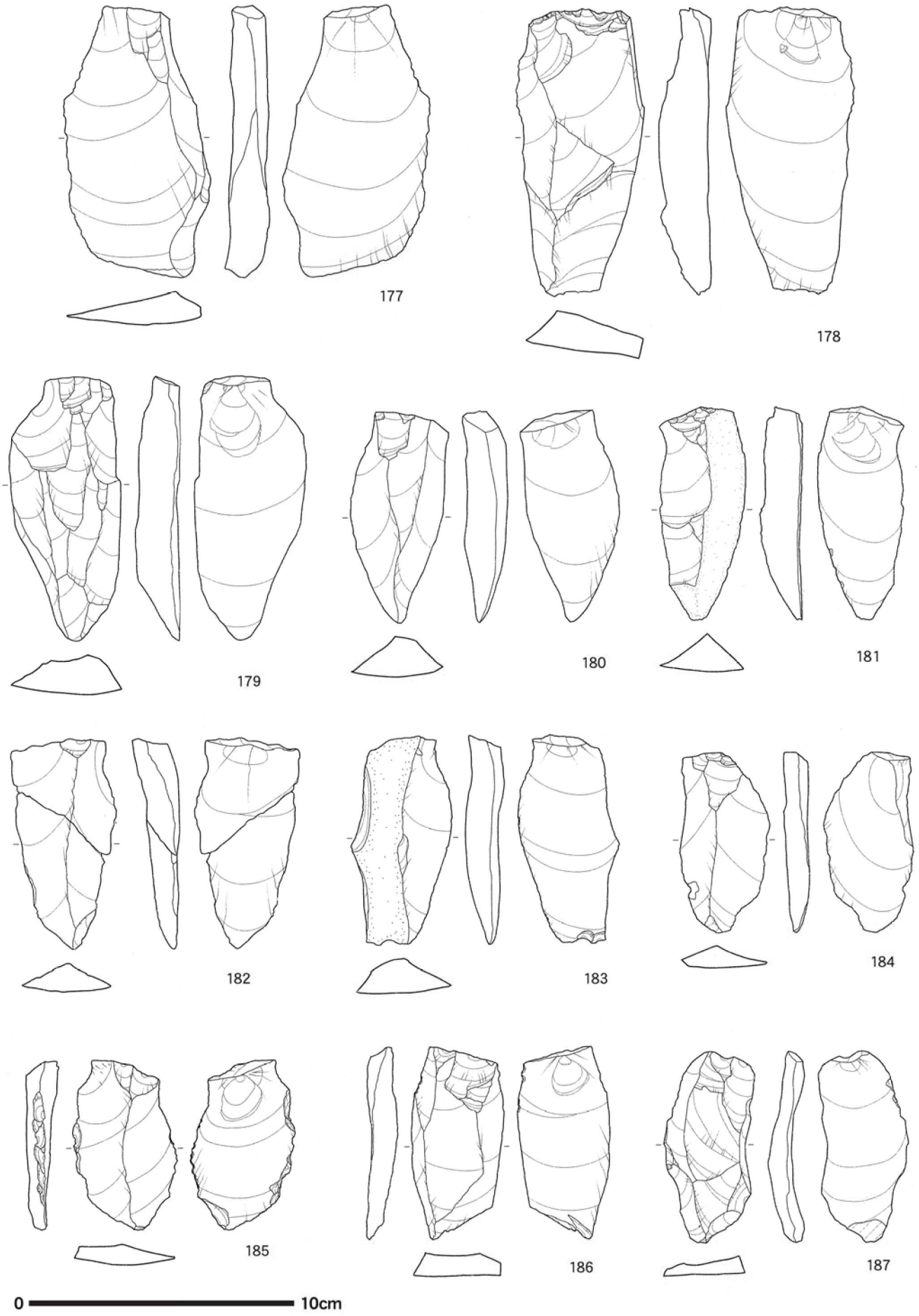
第32図　前ノ田２期　遺物実測図２（Ｓ＝1／2）



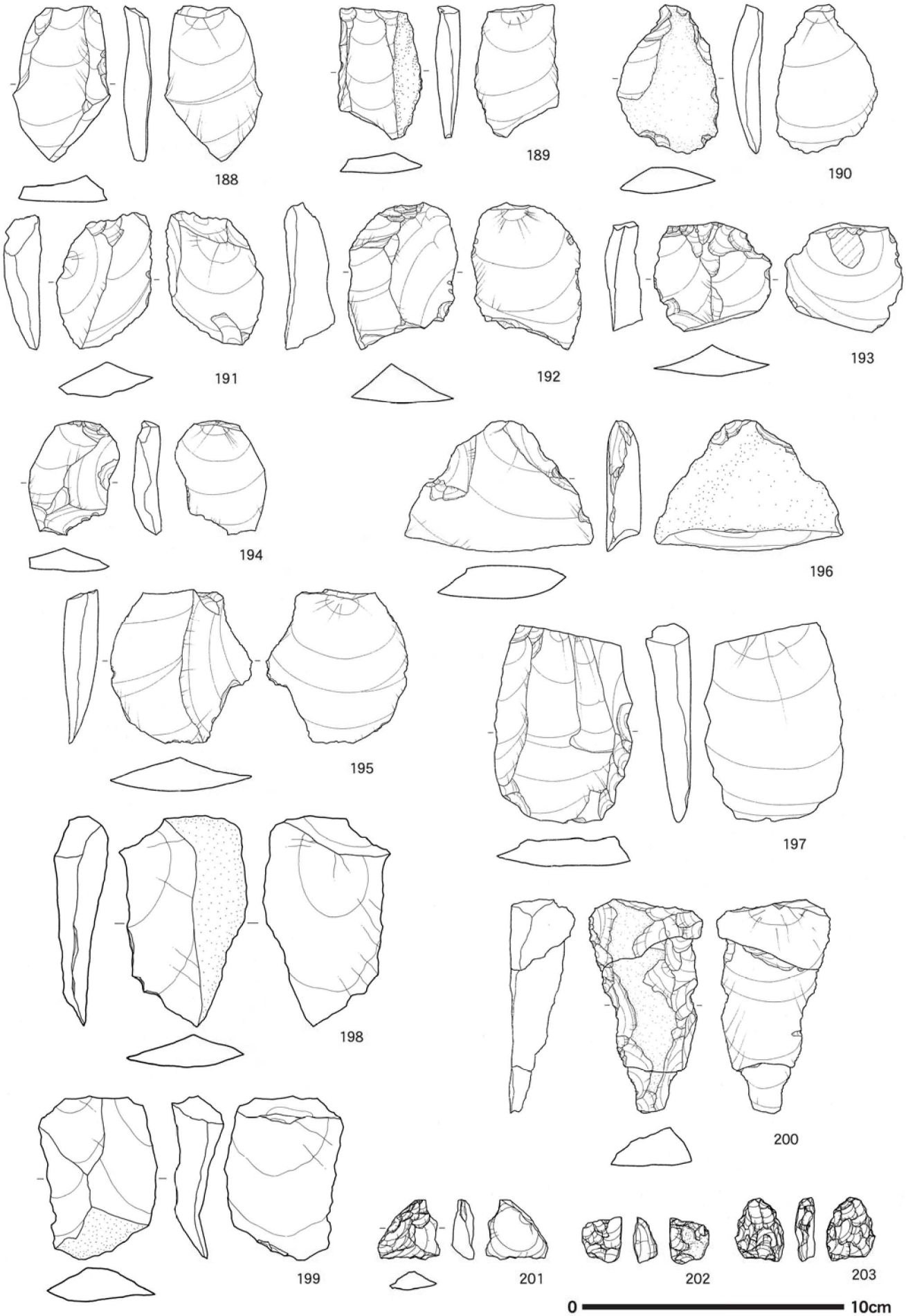
第33図　前ノ田２期　遺物実測図３（Ｓ＝1／2）



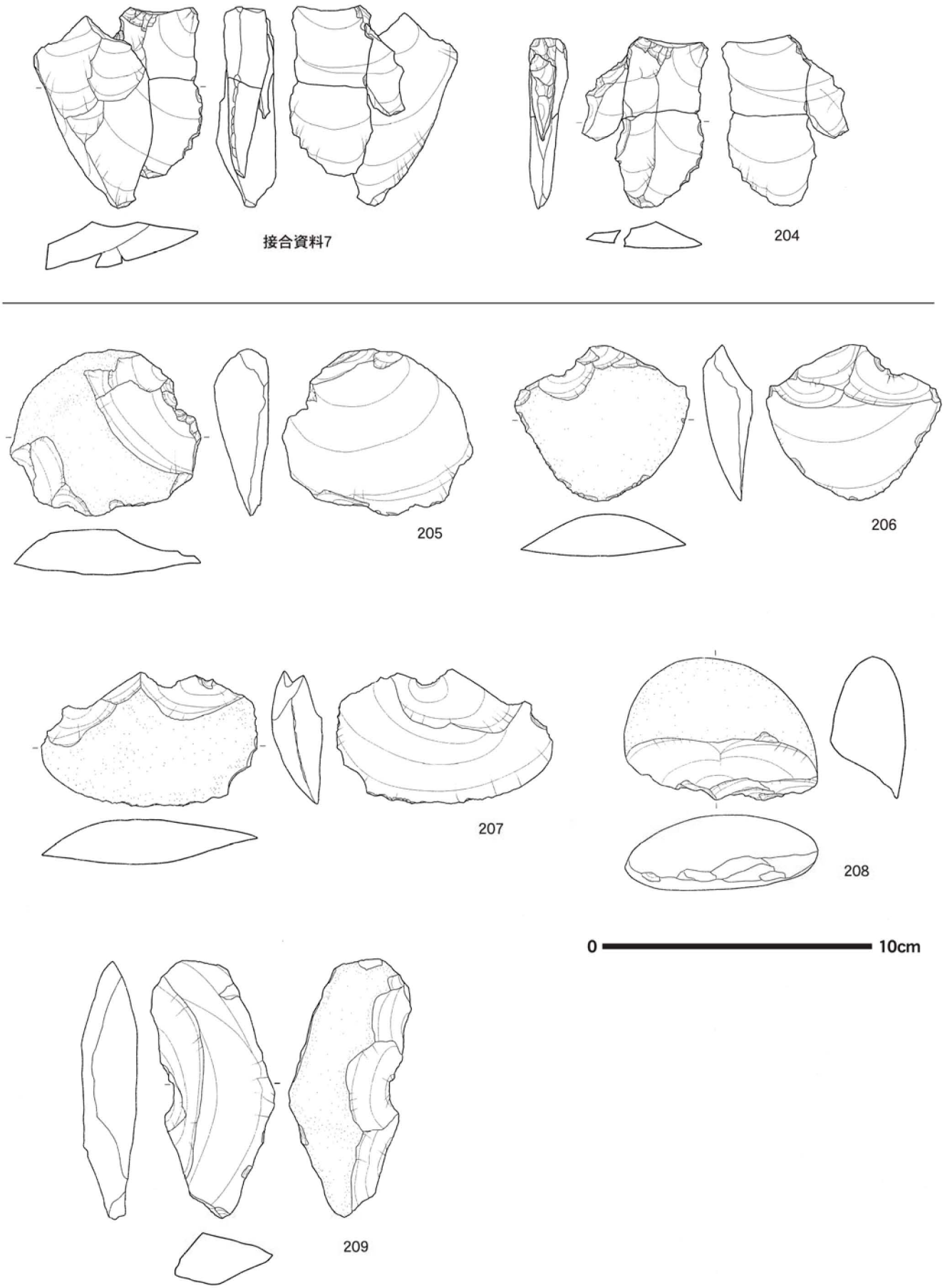
第34図　前ノ田２期　遺物実測図４（Ｓ＝1／2）



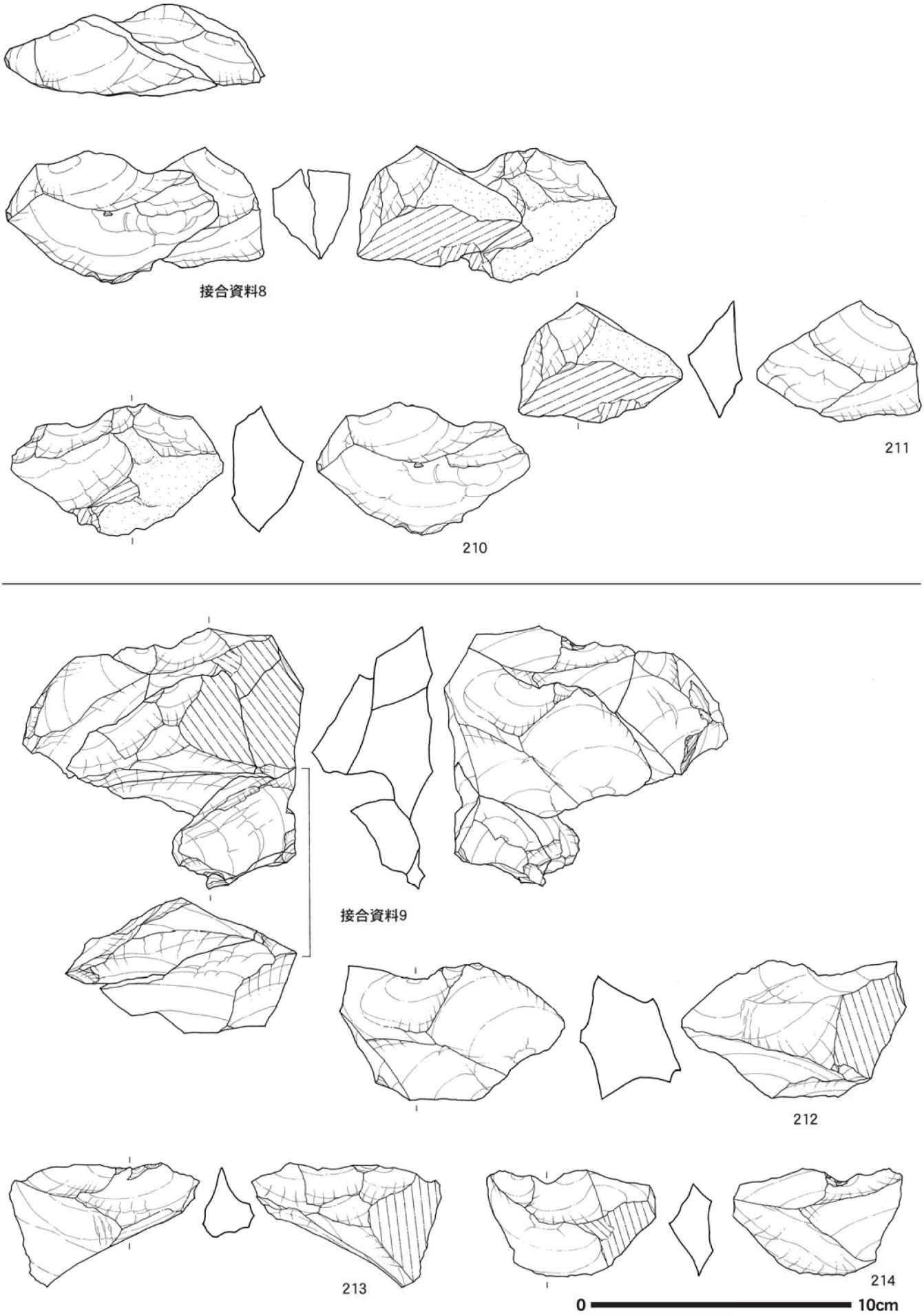
第35図　前ノ田２期　遺物実測図５（Ｓ＝1／2）



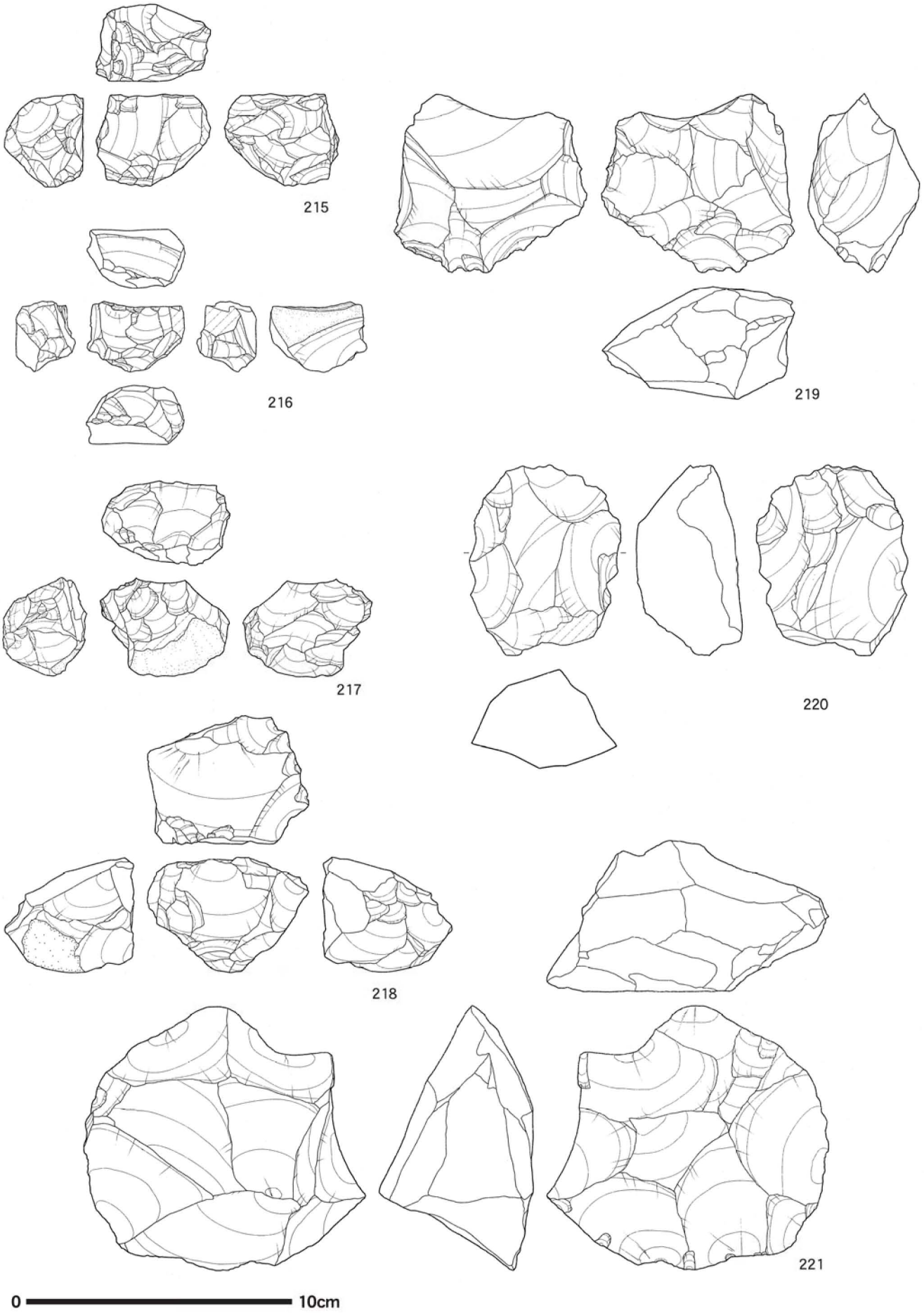
第36図　前ノ田２期　遺物実測図６（Ｓ＝1／2）



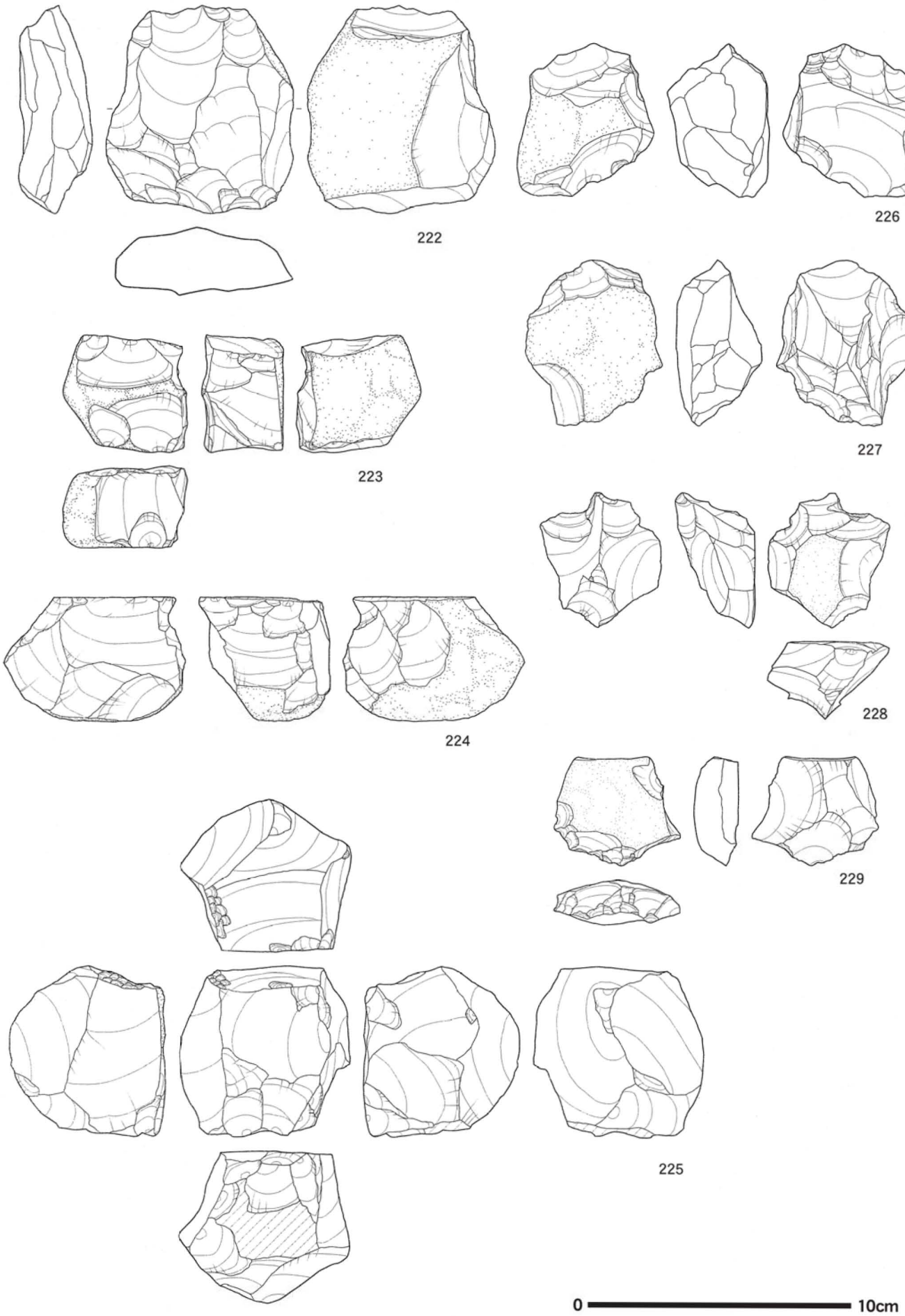
第37図　前ノ田２期　遺物実測図７（Ｓ＝1／2）



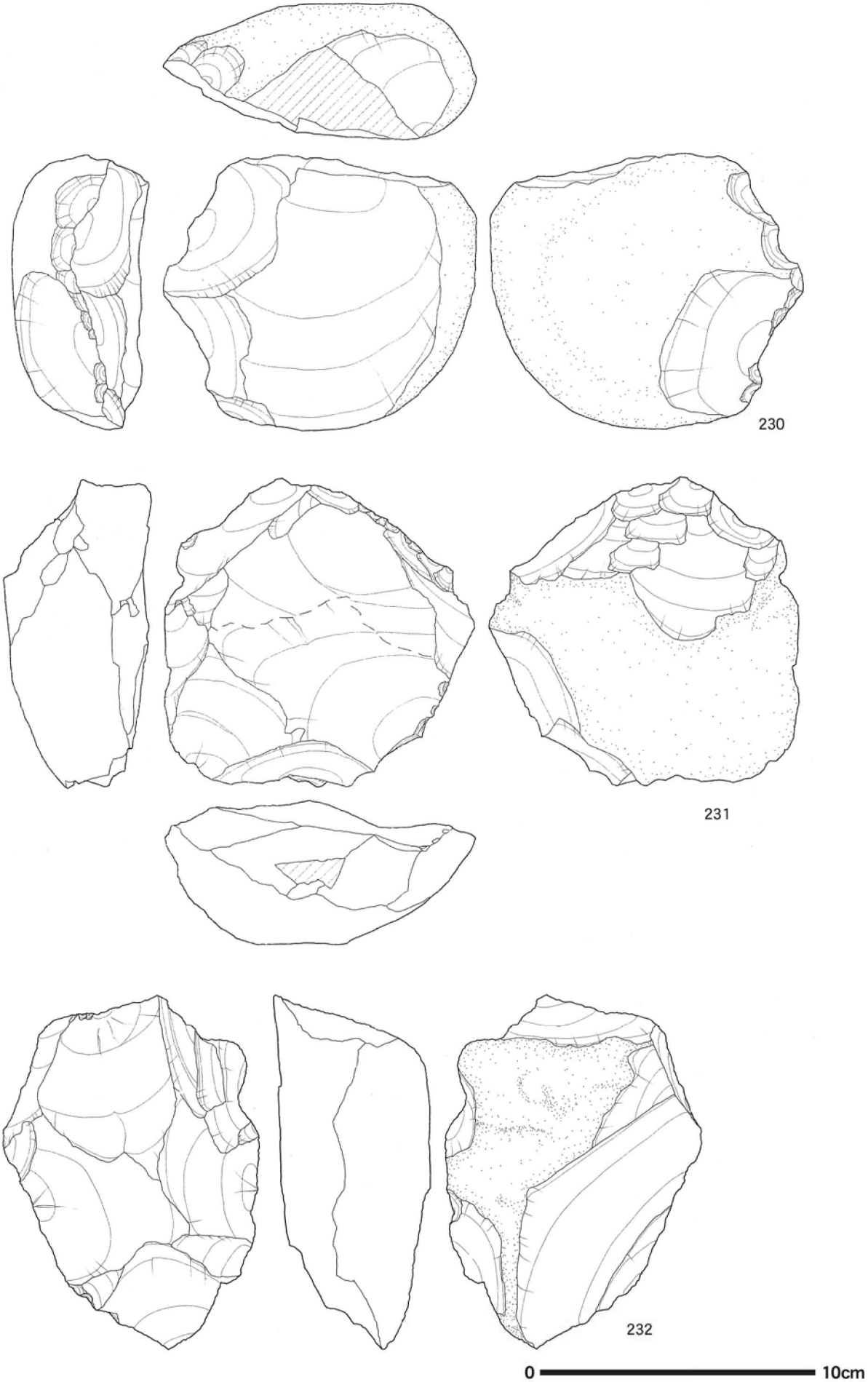
第38図　前ノ田２期　遺物実測図８（Ｓ＝1／2）



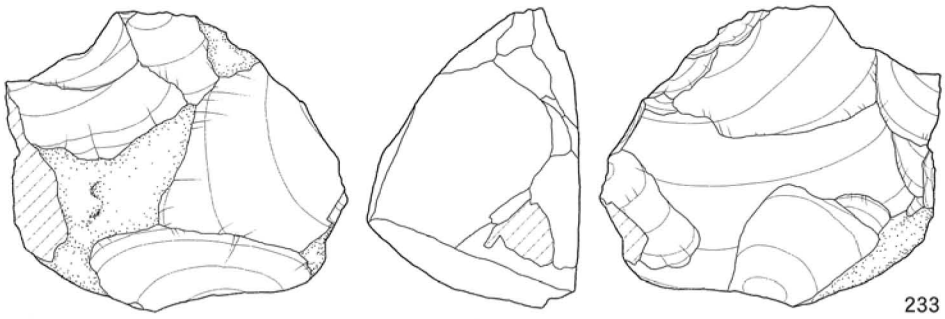
第39図　前ノ田２期　遺物実測図９（Ｓ＝1／2）

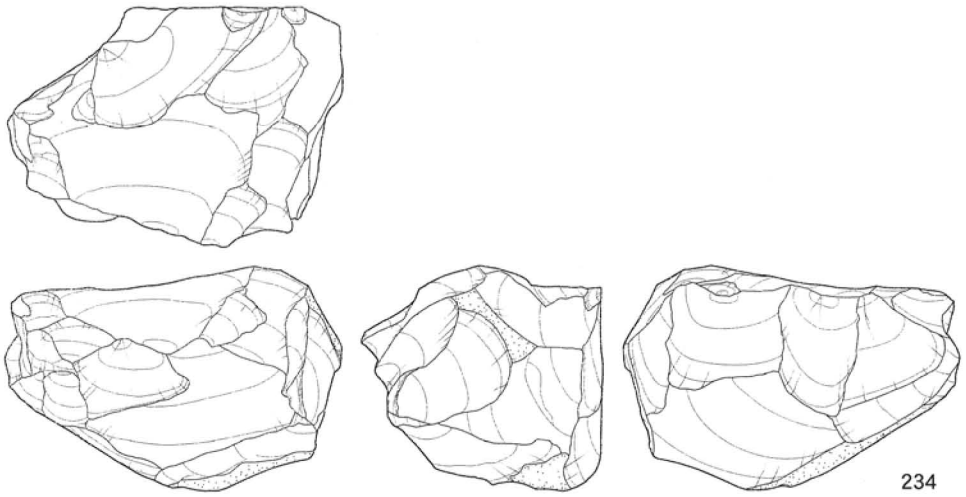


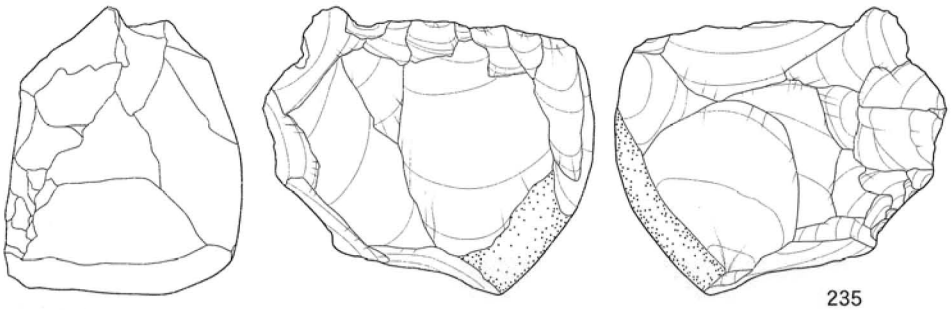
第40図　前ノ田２期　遺物実測図10（S＝1／2）

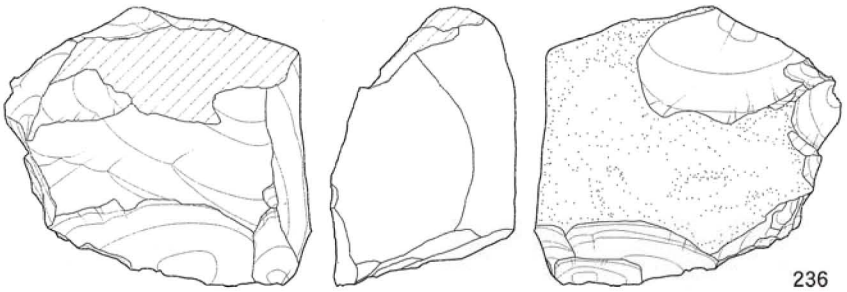


第41図　前ノ田２期　遺物実測図11（Ｓ＝1／2）



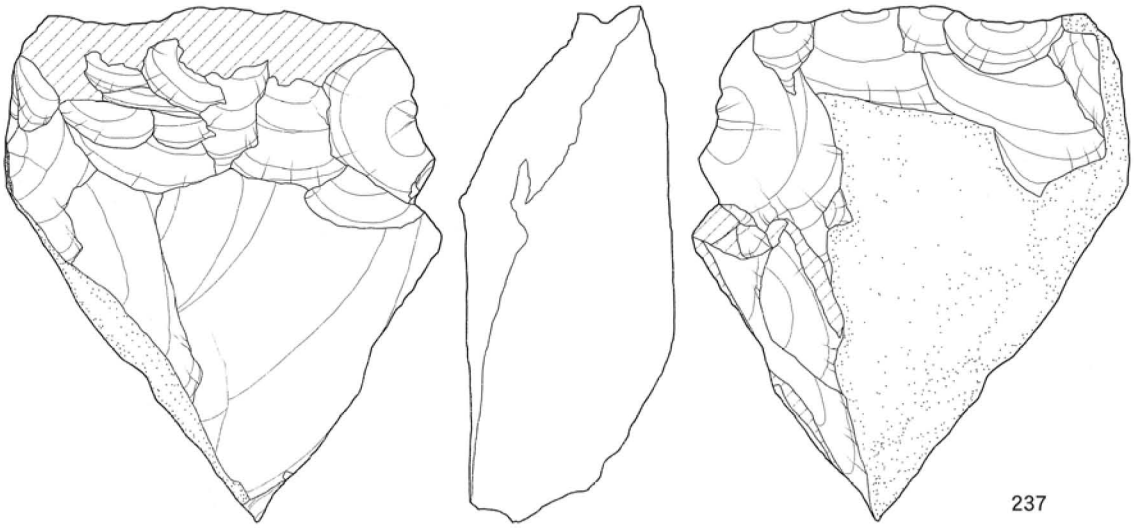


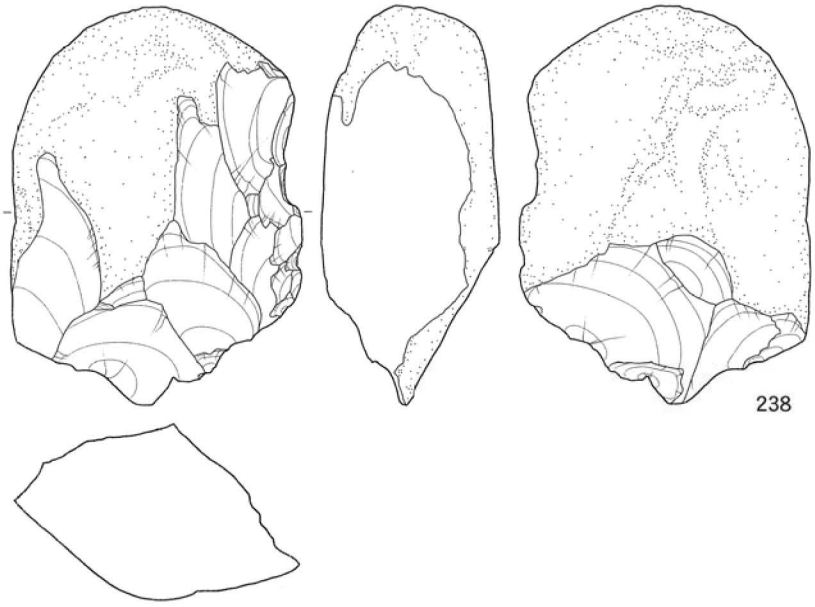


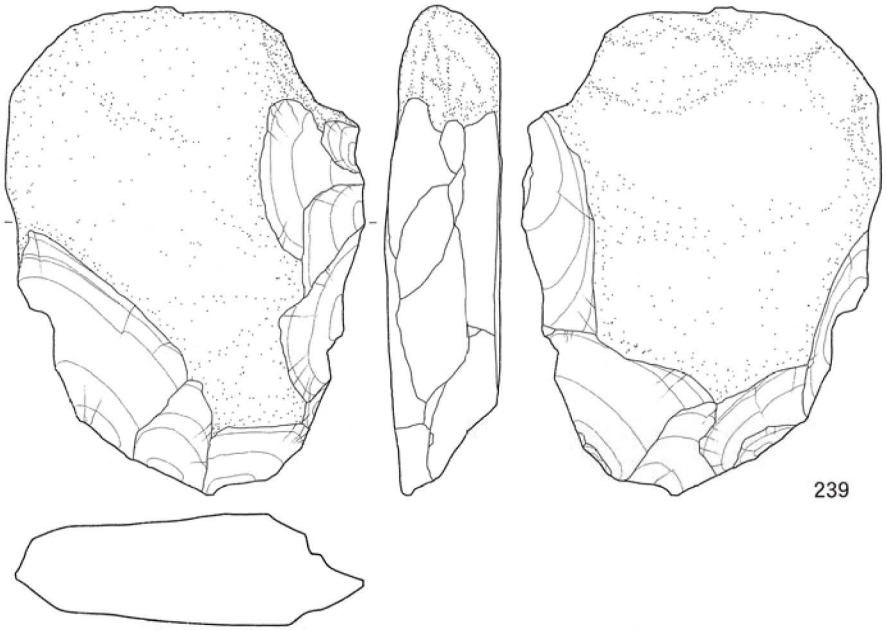


0 10cm

第42図　前ノ田２期　遺物実測図12（Ｓ＝1／2）

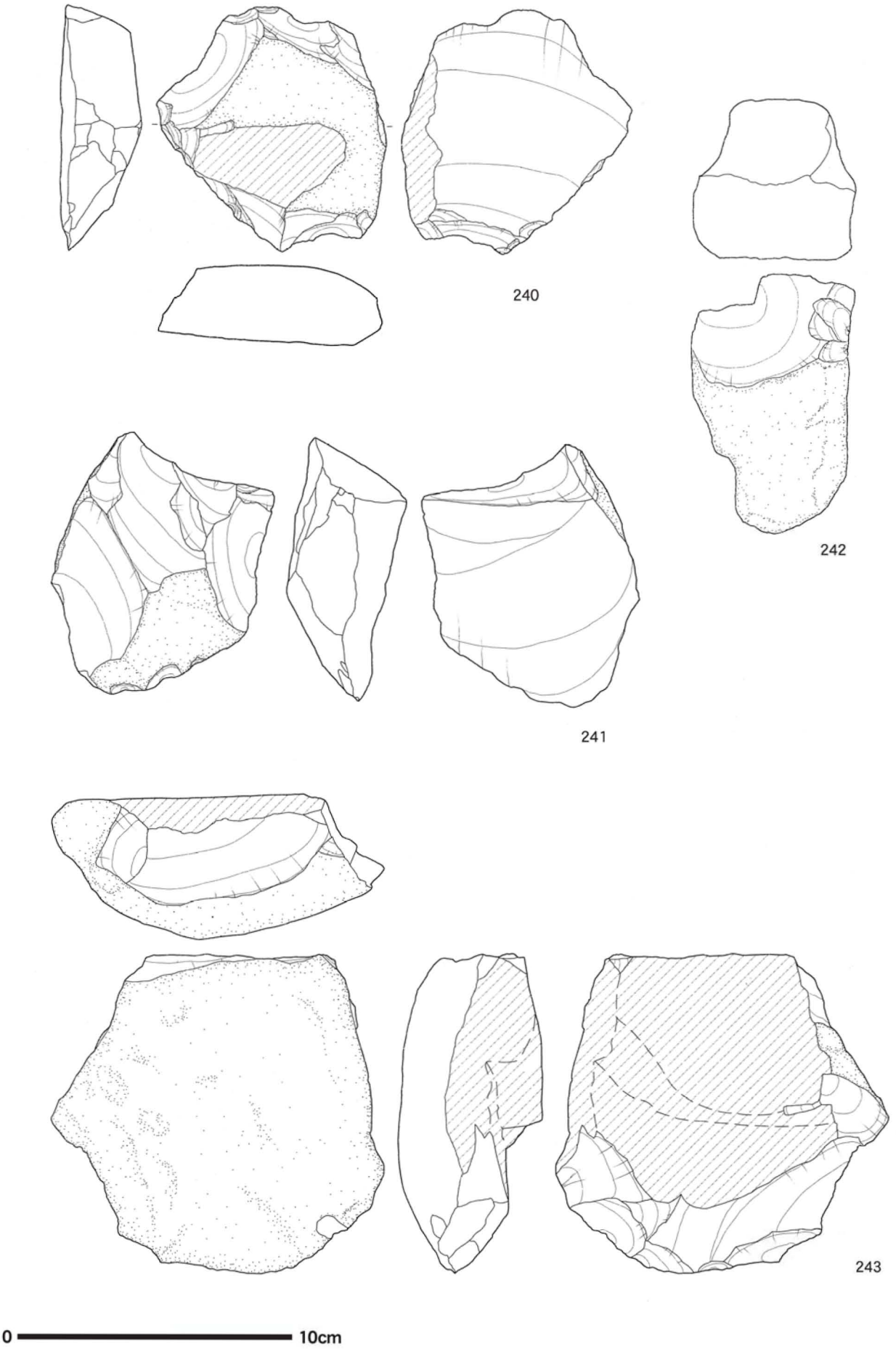




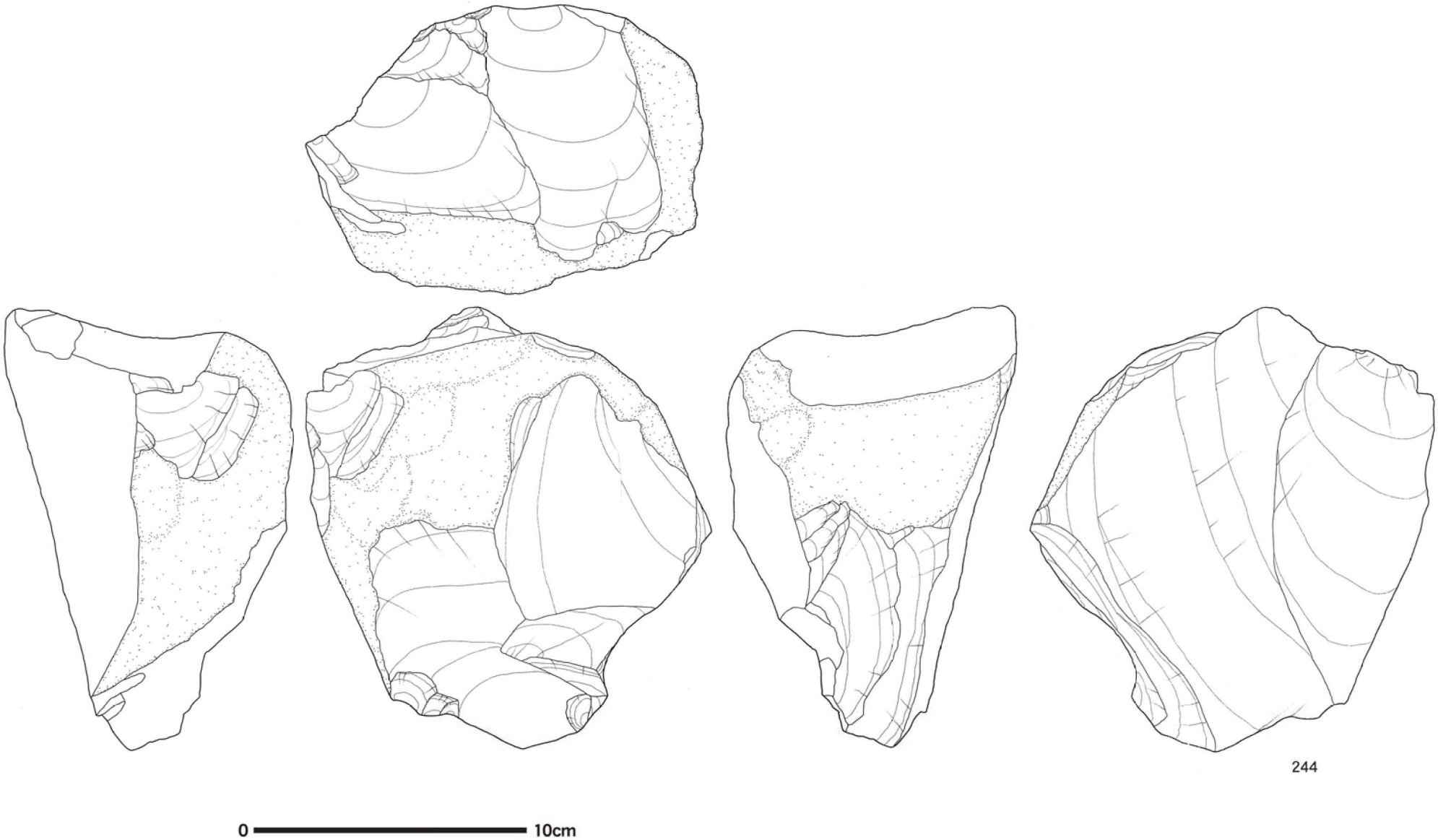


0 10cm

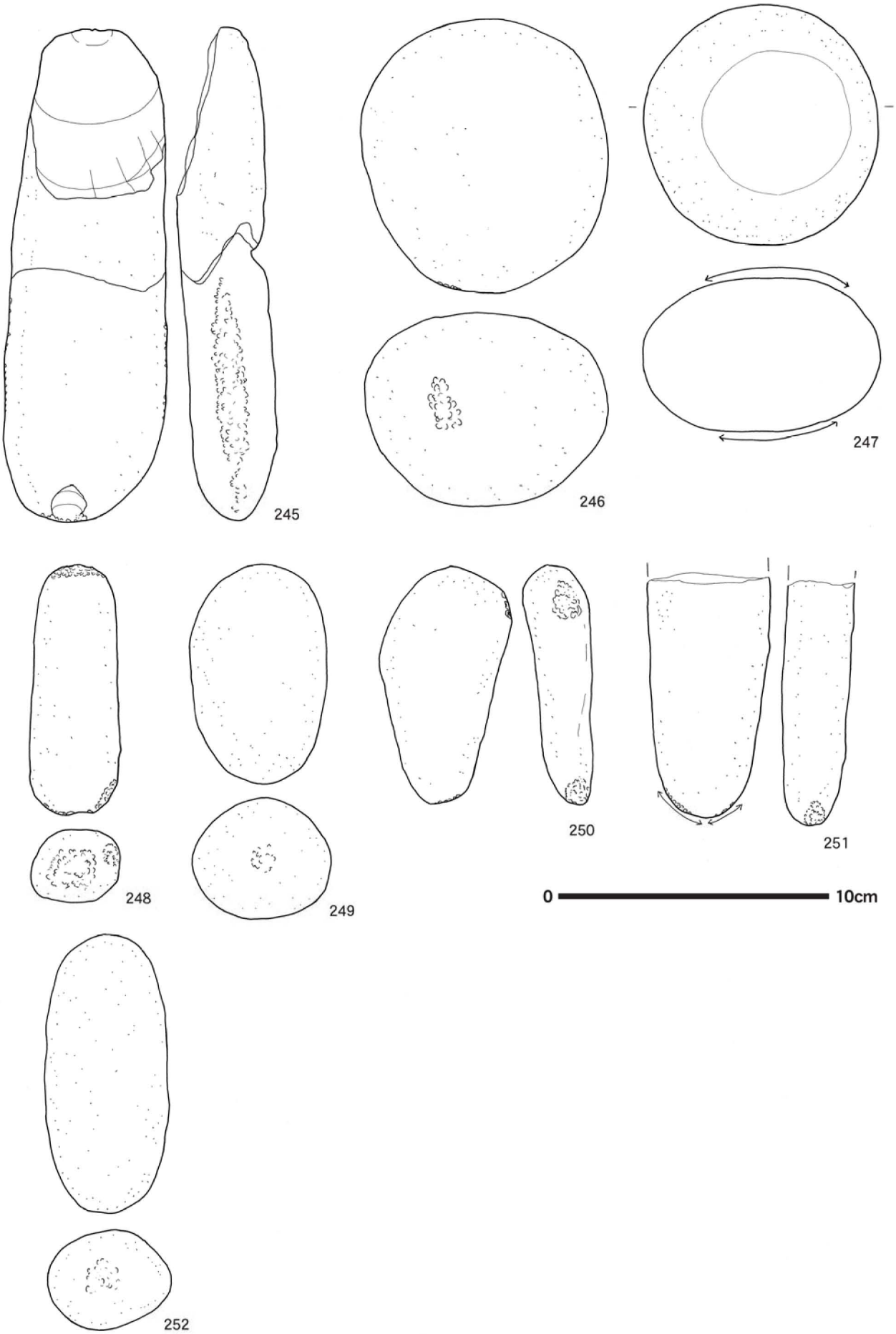
第43図　前ノ田２期　遺物実測図13（Ｓ＝1／2）



第44図　前ノ田２期　遺物実測図14（S＝1／2）



第45図　前ノ田２期　遺物実測図15（S＝1／2）



第46図　前ノ田２期　遺物実測図16（Ｓ＝1／2）

5．前ノ田３期

Ａ区Ⅱｂ層～Ⅲ層を中心にいわゆる終末期のナイフ形石器とその素材剥片が出土している。遺構は礫群を７基検出している。

【遺構】（第48図）

礫群はⅢ層中～下面にて７基検出している。特徴としては、他時期のものに比して小ぶりな礫を使用し、礫の密集度合いが高いもの（SI41・42・44）が目立つ。構成礫は他の時期と同様、半数以上が完形に近い礫であり、また赤化しているものが約半数を占める。

【遺物出土状況】（第47図）

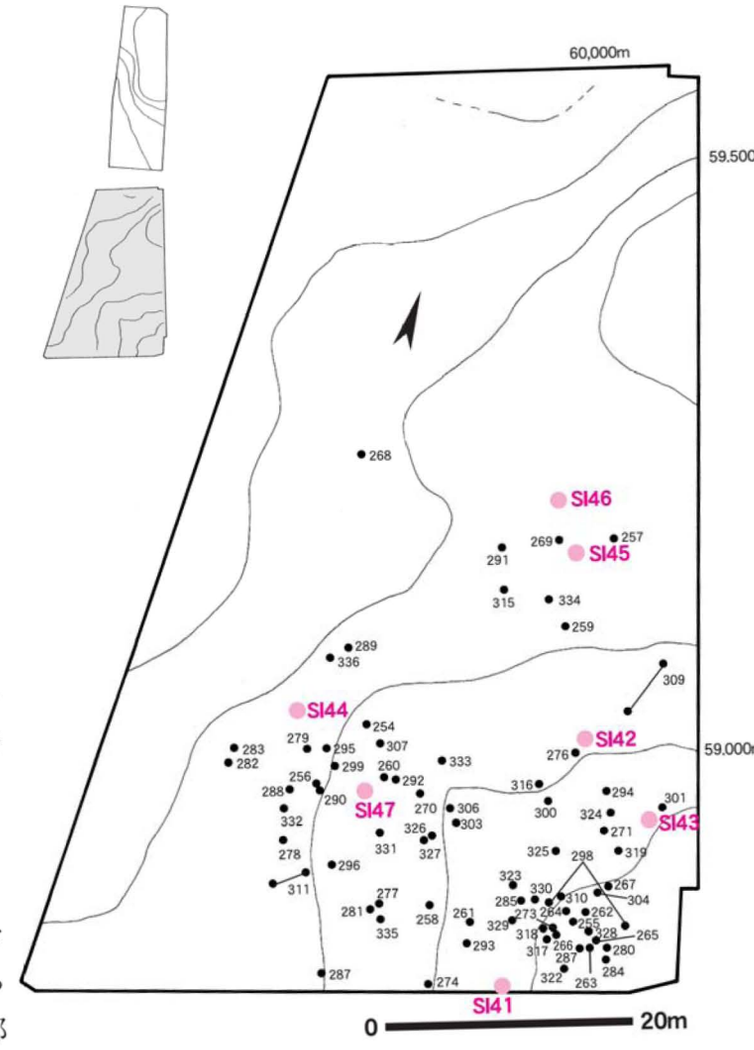
主な出土遺物は、いわゆる終末期ナイフ形石器である。Ⅱb～Ⅲ層を中心に出土しているが、これらの層からは、先にも述べたが、横長剥片素材のナイフ形石器、細石刃核、石鏃等の多期にわたる遺物が、混在した状態で出土している。また平面分布においても、２期の石器の分布と重なり、若干の集中区を持つものの、概して散漫である。また、石器製作の痕跡を示すブロックは見られず、ごく僅かに接合資料が見られるのみである。

【出土遺物】（第49～52図）

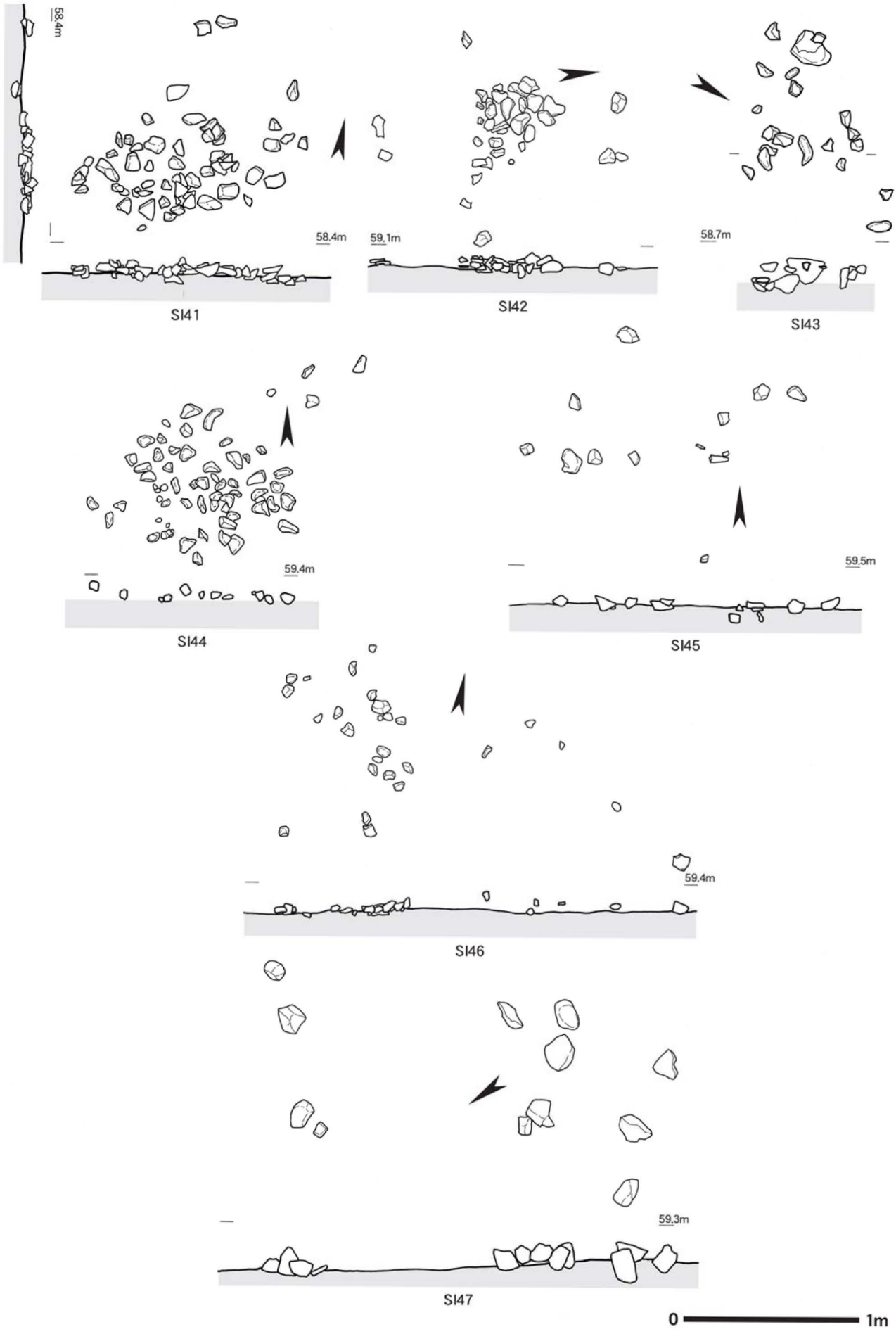
出土しているナイフ形石器は、小型の縦長剥片を素材とし、裏面側から基部加工を施し、表面側から加工を施しているものも見られる。側縁部、先端部に加工を施し、打面は除去して残さないものが大半を占める。形態的な特徴としては、大きく３つに分かれる。Ａ：柳葉状（253～278）Ｂ：先端部を尖らせＡに比して長大なもの（277～282）Ｃ：非常に小型で僅かな基部調整を施すもの（290～294）である。

剥片は①基部から刃部へ向けやや幅が広がるもの（295～298）②小型で先細り、厚みを持つもの（299・300）③縦長で端部に向け細くなり、ねじれが見られるもの（304～308）④その他の小型のもの⑤他の剥片に比べて打面を広く持ち幅広な剥片で（325～335）、端部は先細りまたは幅広のものに分かれる。また⑤類の剥片の表面には小型の縦長剥片を剥離した痕跡が認められるものも含まれる。

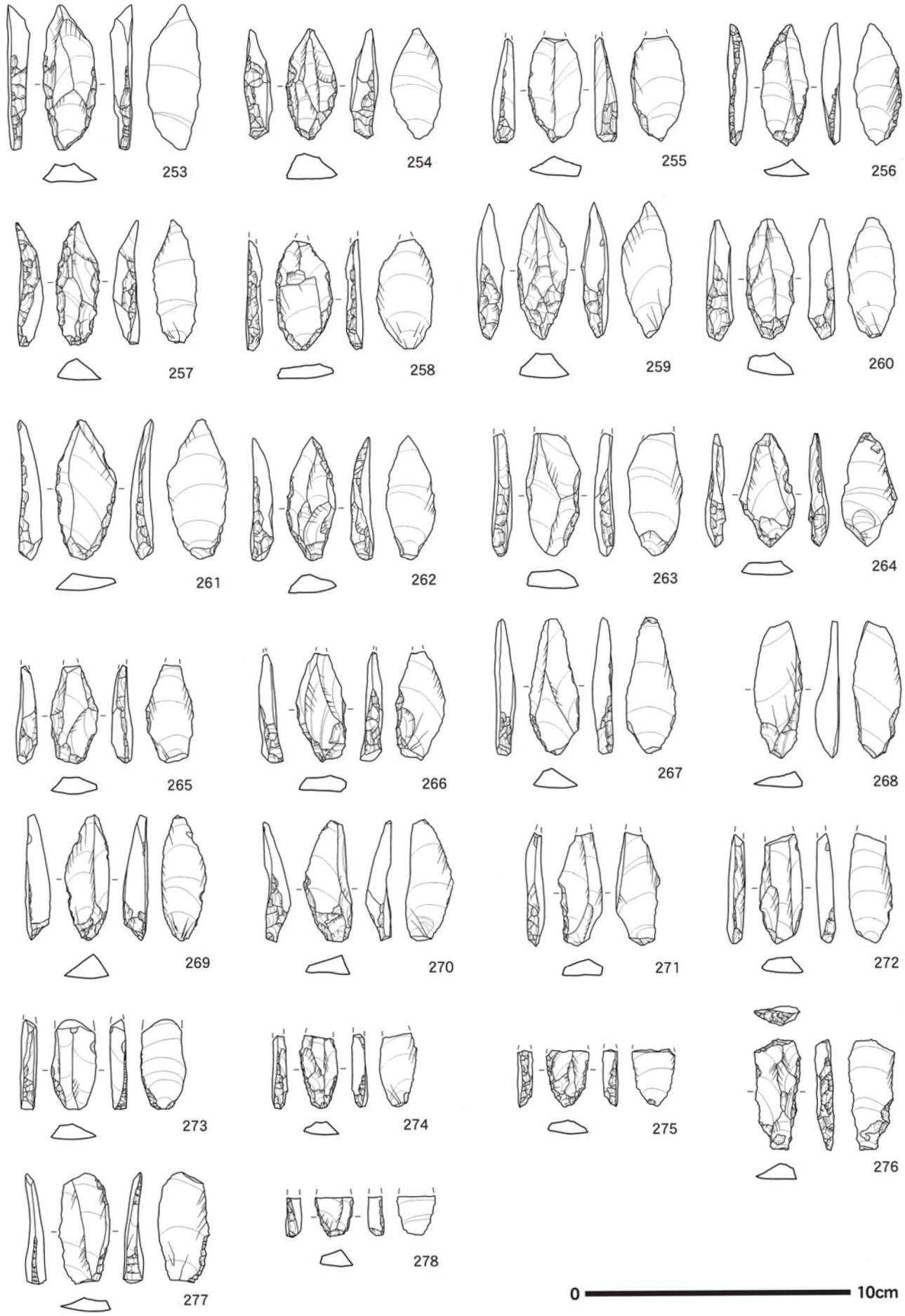
①類の剥片である295は先端部付近にブランディング加工を施している途中に破損したと思われる破片と接合している。



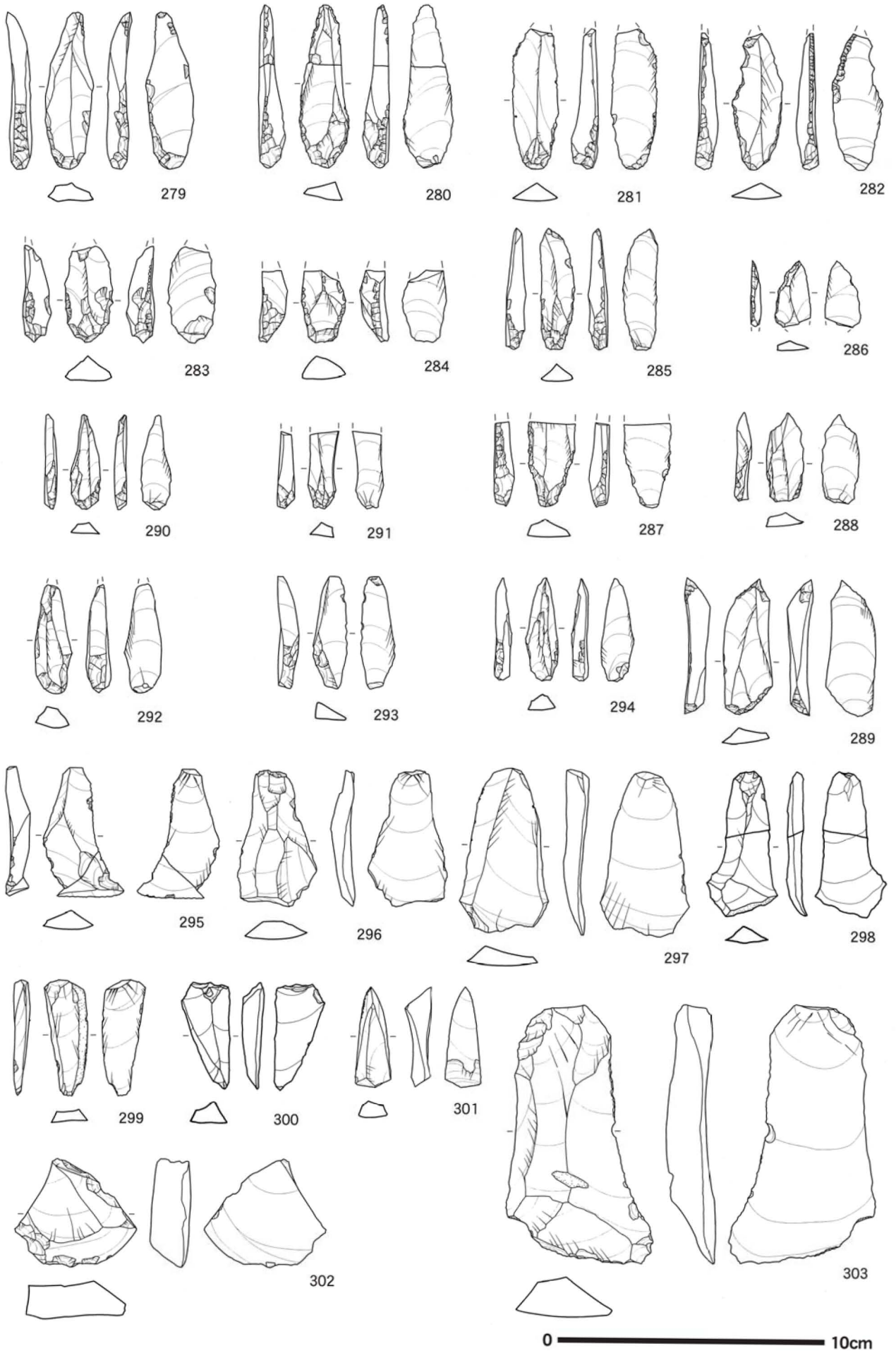
第47図　前ノ田３期　遺構・遺物分布図（Ｓ＝1／600）



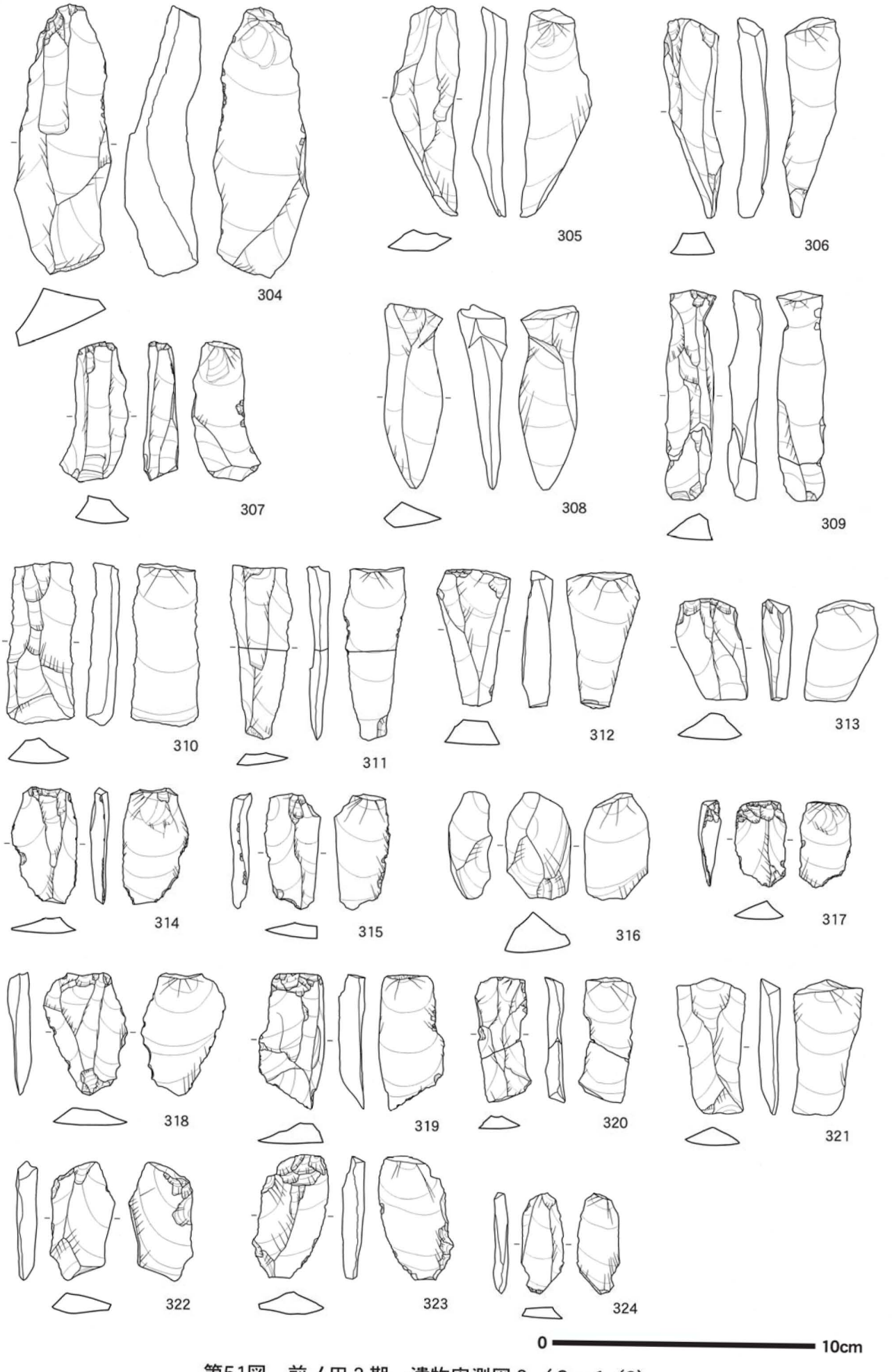
第48図　前ノ田３期　礫群実測図（S＝1／30）



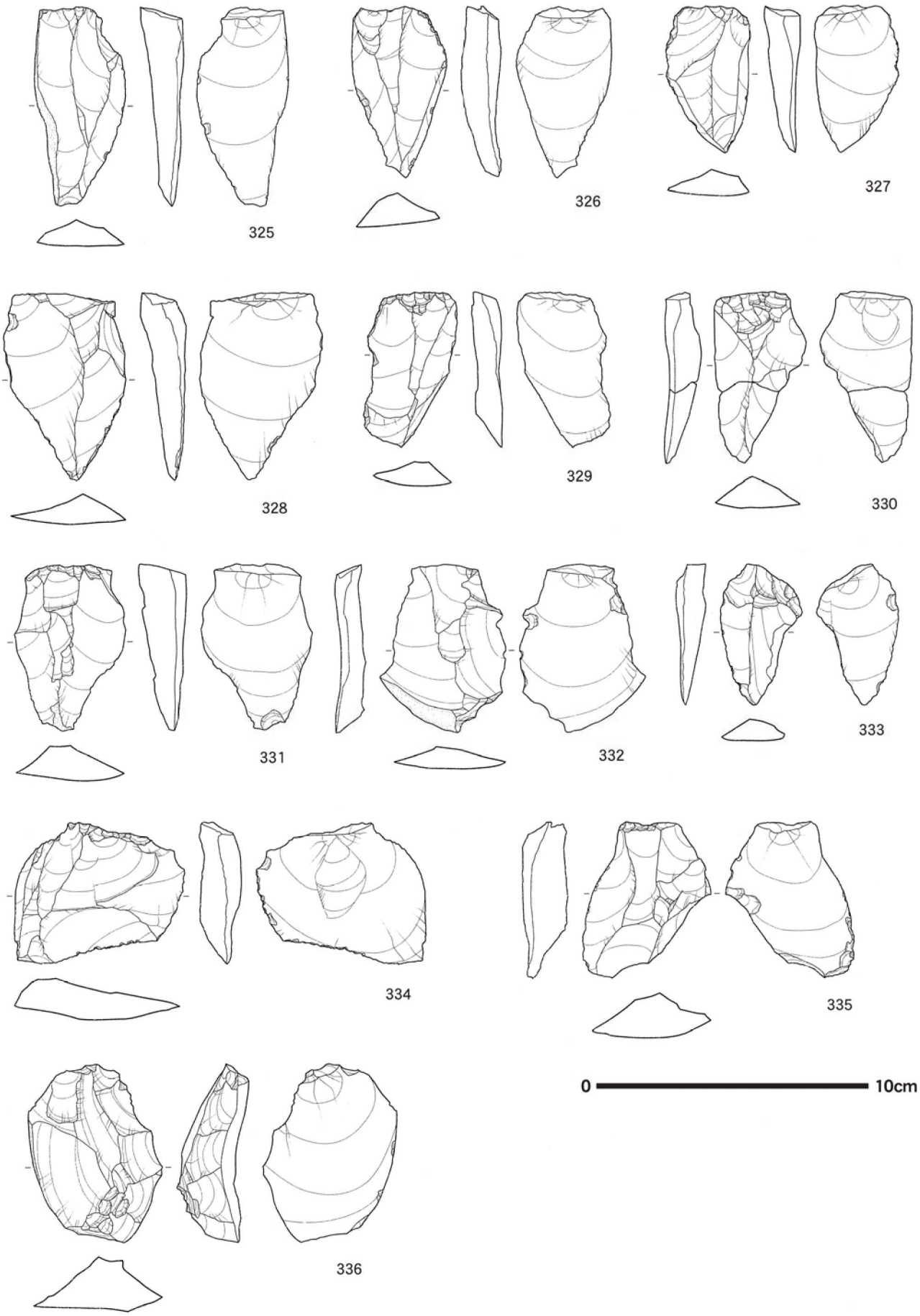
第49図　前ノ田３期　遺物実測図１（S＝1／2）



第50図　前ノ田３期　遺物実測図２（S＝1／2）



第51図　前ノ田３期　遺物実測図３（Ｓ＝1／2）



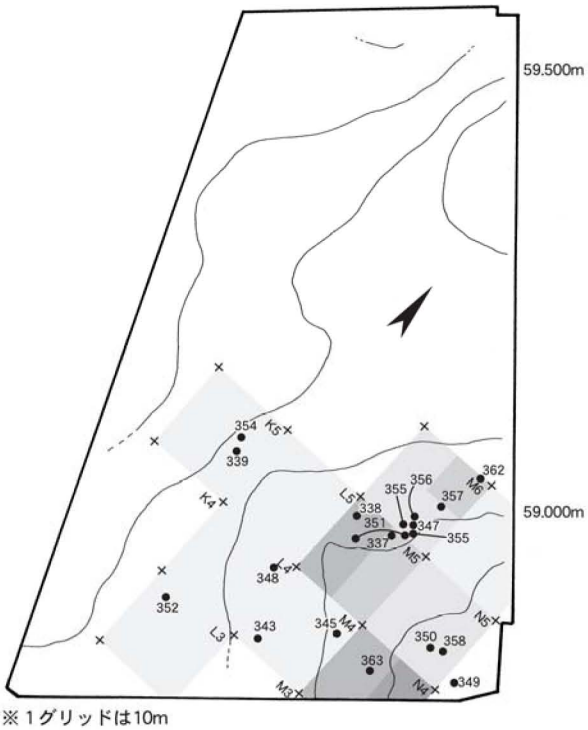
第52図　前ノ田３期　遺物実測図４（Ｓ＝1／2）

6．前ノ田４期

Ⅱｂ層～Ⅲ層を中心に、細石刃、細石刃核が出土している。

【遺物】（第53・54図）

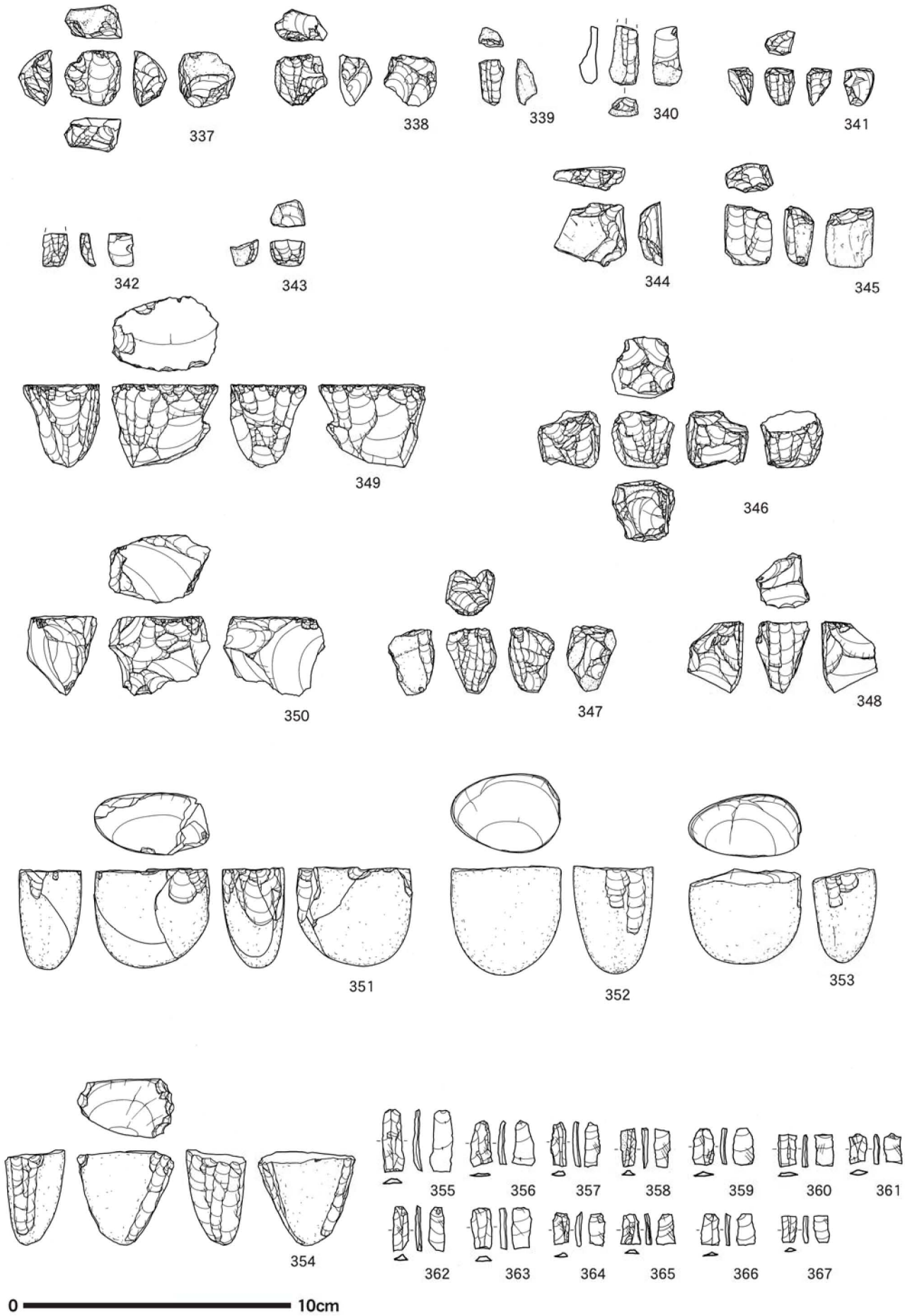
細石刃核は黒耀石Ａ・Ｂを用いた小型のものが多く見られ、打面を変えながら細石刃剥離を行ったもの（337～341・346）、扁平な素材を用いた細石刃核（344・345）、石材Ｉを使用した船野型（348・349・350）、石材Ａを使用した畦原型（351～354）が見られる。351～353は顕著な細石刃剥離が見られない。黒耀石製の細石刃は、チップ類を伴っており、頭部調整痕の残る剥片類（342・343）も含まれ、Ｎ４、Ｍ５グリッド付近に集中区を持つ。黒耀石は総計133.6ｇ出土している。



第53図　黒耀石出土分布図（Ｓ＝1／800）

第１表　黒耀石産地別出土内訳表

グリッド	黒耀石Ａ（桑ノ木津留）		黒耀石Ｂ（腰岳）		黒耀石Ｃ（日東）		その他	
	重量（ｇ）	個数	重量（ｇ）	個数	重量（ｇ）	個数	重量（ｇ）	個数
Ｌ３	4.5	3	1.7	2				
Ｌ４	11.1	13						
Ｌ５	1.3	3	1.8	1	0.8	1		
Ｍ４	4.4	11						
Ｍ５	29.4	83	1.9	3	2.3	1	2.8	1
Ｍ６	19.7	34						
Ｎ５	1.2	5	0.9	2				
Ｎ４	33.5	100	3.8	17	0.9	2	1.1	1
Ｎ５	17.9	28			0.9	1	3.9	1
Ｎ６	5.1	4						
Ｋ５	5.5	8						



第54図　前ノ田４期　遺物実測図（Ｓ＝1／2）

第２表　礫群分析表

※左表：グリッドごと　右表：礫群ごと

第１期

グリッド	総個数	総重量(g)	完形率 100～80% 個数	%	80%以下 個数	%	赤化 ◎～○ 個数	%	△～× 個数	%	割面の赤化 個数	%	黒色付着物 個数
H 10	64	33,852	34	53.1	30	46.9	51	79.7	9	14.1	41	64.1	8
H 12	62	25,297	30	48.4	17	27.4	29	46.8	9	14.5	22	35.5	
H 13	8	4,908	8	100.0	—	—	4	50.0	—	—	2	25.0	
I 12	11	3,485	5	45.5	6	54.5	6	54.5	3	27.3	5	45.5	7
I 11	29	25,706	24	82.8	4	13.8	7	24.1	3	10.3	1	3.4	
J 11	2	2,151	1	50.0	1	50.0	1	50.0	—	—	1	50.0	
G 12	4	782	4	100.0	—	—	1	25.0	—	—	—	—	
?	4	3,912	4	100.0	—	—	1	25.0	—	—	—	—	
G 11	10	4,246	9	90.0	1	10.0	1	10.0	3	30.0	4	40.0	1
H 11	35	19,396	16	45.7	7	20.0	1	2.9	6	17.1	8	22.9	2
I 10	5	4,603	3	60.0	2	40.0	—	—	1	20.0	1	20.0	
計	234	128,338	138	59.0	68	29.1	102	43.6	34	14.5	85	36.3	18

礫群番号	実測番号	グリッド	総個数	総重量(g)	完形率 100～80% 個数	%	80%以下 個数	%	赤化 ◎～○ 個数	%	△～× 個数	%	割面の赤化 個数	%	黒色付着物 個数
1	PSI20	H 10	61	32,621	31	50.8	30	49.2	59	96.7	9	14.8	41	67.2	8
2	PSI23	H 11	10	6,030	9	90.0	1	10.0	10	100.0	—	—	2	20.0	4
3	PSI37	H 11	8	3,531	6	75.0	2	25.0	6	75.0	2	25.0	2	25.0	
4	PSI24	H 11	5	4,603	3	60.0	2	40.0	2	40.0	1	20.0	1	20.0	
5	PSI24-3	I 11	6	1,293	4	66.7	1	16.7	—	—	6	100.0	1	16.7	
6	PSI24	I 11	5	9,058	5	100.0	0	0.0	1	20.0	4	80.0	—	—	
7	PSI24	I 11	7	8,026	4	57.1	3	42.9	1	14.3	6	85.7	—	—	
8	PSI12	I 12	3	1,208	3	100.0	—	—	2	66.7	1	33.3	—	—	3
10	PSI10	I 11	7	5,029	7	100.0	—	—	3	42.9	2	28.6	1	14.3	
11	PSI22	H 12	4	4,130	—	—	4	—	1	25.0	0	0.0	1	25.0	
12	PSI28	H 13	7	3,367	4	57.1	3	42.9	4	57.1	2	28.6	3	42.9	
13	PSI21	H 12	12	2,327	5	41.7	7	58.3	11	91.7	1	8.3	9	75.0	
15	PSI25	G 11	10	4,246	9	90.0	1	10.0	3	30.0	3	30.0	4	40.0	1

第２期

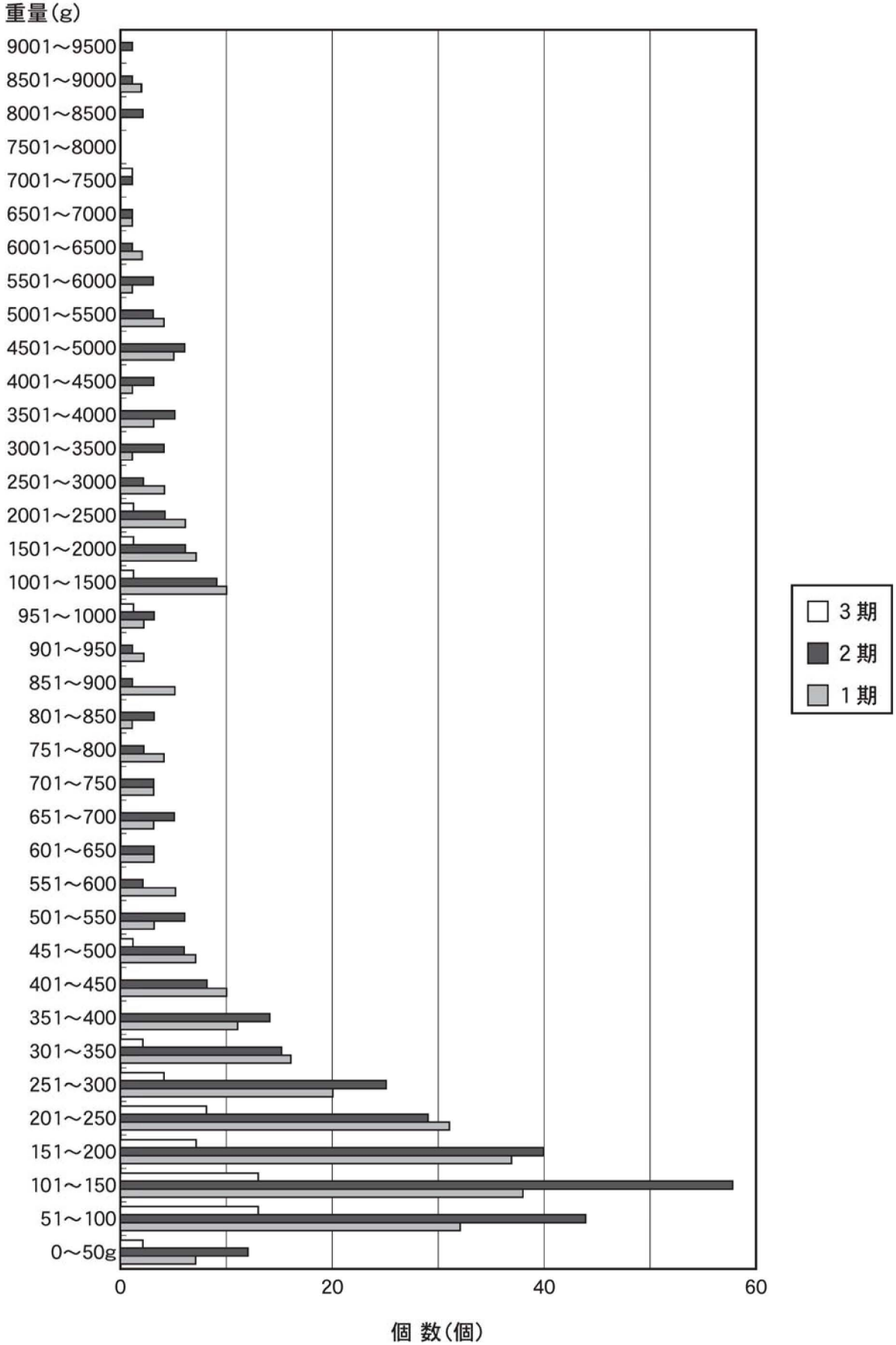
グリッド	総個数	総重量(g)	完形率 100～80% 個数	%	80%以下 個数	%	赤化 ◎～○ 個数	%	△～× 個数	%	割面の赤化 個数	%	黒色付着物 個数
K 3	16	10,282	12	75.0	4	25.0	5	31.3	11	68.8	3	18.8	
K 4	33	20,710	26	78.8	7	21.2	20	60.6	13	39.4	12	36.4	1
L 3	176	50,582	91	51.7	85	48.3	72	40.9	92	52.3	50	28.4	
I 4	64	30,992	47	73.4	17	26.6	9	14.1	35	54.7	3	4.7	
L 5	5	5,536	3	60.0	2	40.0	1	20.0	4	80.0	1	20.0	
L 6	17	8,146	14	82.4	3	17.6	13	76.5	4	23.5	5	29.4	
M 3	173	154,138	101	58.4	72	41.6	94	54.3	71	41.0	71	41.0	
M 4	147	159,860	93	63.3	50	34.0	82	55.8	61	41.5	64	43.5	
M 5	11	10,893	7	63.6	4	36.4	8	72.7	3	27.3	4	36.4	
M 6	35	23,533	18	51.4	16	45.7	25	71.4	10	28.6	17	48.6	
N 4	224	217,710	136	60.7	88	39.3	123	54.9	101	45.1	100	44.6	2
N 5	70	66,703	44	62.9	28	40.0	39	55.7	36	51.4	32	45.7	1
N 6	23	23,059	14	60.9	9	39.1	7	30.4	16	69.6	5	21.7	
計	994	782,144	606	61.0	385	38.7	498	50.1	457	46.0	367	36.9	4

礫群番号	実測番号	グリッド	総個数	総重量(g)	完形率 100～80% 個数	%	80%以下 個数	%	赤化 ◎～○ 個数	%	△～× 個数	%	割面の赤化 個数	%	黒色付着物 個数
16	PSI33	K 3	16	10,282	12	75.0	4	25.0	5	31.3	11	68.8	3	18.8	
17	PSI21	K 4	33	20,710	26	78.8	7	21.2	20	60.6	13	39.4	12	36.4	1
18	PSI 5	L 3	176	50,582	91	51.7	85	48.3	72	40.9	92	52.3	50	28.4	
19	PSI14	I 4	64	30,992	47	73.4	17	26.6	9	14.1	35	54.7	3	4.7	
20	PSI24	L 5	5	5,536	3	60.0	2	40.0	1	20.0	4	80.0	1	20.0	
21	PSI17	L 6	17	8,146	14	82.4	3	17.6	13	76.5	4	23.5	5	29.4	
22	PSI7	M 3	173	154,138	101	58.4	72	41.6	94	54.3	71	41.0	71	41.0	
23	PSI13	M 4	147	159,860	93	63.3	50	34.0	82	55.8	61	41.5	64	43.5	
24	PSI28-3	M 5	11	10,893	7	63.6	4	36.4	8	72.7	3	27.3	4	36.4	
25	PSI28-2	M 6	35	23,533	18	51.4	16	45.7	25	71.4	10	28.6	17	48.6	
26	PSI27	N 4	224	217,710	136	60.7	88	39.3	123	54.9	101	45.1	100	44.6	2
27	PSI26	N 5	70	66,703	44	62.9	28	40.0	39	55.7	36	51.4	32	45.7	1
28	PSI28	M 3	11	17,112	5	45.5	5	45.5	4	36.4	5	45.5	6	54.5	
29	PSI29-1	M 3	7	18,739	5	71.4	3	42.9	4	57.1	2	28.6	2	28.6	
30	PSI29	M 3	8	1,946	2	25.0	6	75.0	2	25.0		0.0	2	25.0	
31	PSI22	N 4	10	9,055	8	80.0	3	30.0	7	70.0	4	40.0	5	50.0	
32	PSI12～14	L 3	35	3,181	24	68.6	15	42.9	16	45.7	25	71.4	13	37.1	
33	PSI9	M 4	23	23,763	12	52.2	3	13.0	5	21.7	10	43.5	—	—	
34	PSI-y 2	M 4	8	5,037	6	75.0	3	37.5	4	50.0	4	50.0	4	50.0	
35	PSI18	L 3	24	4,967	12	50.0	13	54.2	16	66.7	8	33.3	8	33.3	
36	PSI23	M 3	23	13,986	14	60.9	10	43.5	13	56.5	11	47.8	10	43.5	
37	PSI-y1	M 4	4	13,460	4	100.0	—	—	—	—	4	100.0	—	—	
38	PSI21	M 4	13	2,752	2	15.4	11	84.6	13	100.0	—	—	—	—	
39	PSI15	N 4	22	36,591	15	68.2	8	36.4	13	59.1	18	81.8	9	40.9	
40	PSI11	N 6	23	23,059	14	60.9	9	39.1	7	30.4	16	69.6	5	21.7	

第３期

グリッド	総個数	総重量(g)	完形率 100～80% 個数	%	80%以下 個数	%	赤化 ◎～○ 個数	%	△～× 個数	%	割面の赤化 個数	%	黒色付着物 個数
L 4	36	43,028	20	55.6	16	44.4	15	41.7	21	58.3	14	38.9	1
L 3	18	16,214	9	50.0	10	55.6	8	44.4	10	55.6	8	44.4	
L 7	48	12,124	38	79.2	10	20.8	31	64.6	15	31.3	14	29.2	
M 3	29	9,461	17	58.6	12	41.4	13	44.8	14	48.3	10	34.5	
M 4	36	31,511	23	63.9	11	30.6	26	72.2	10	27.8	10	27.8	3
M 5	21	12,731	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
M 6	70	21,503	30	42.9	41	58.6	61	87.1	9	12.9	44	62.9	1
N 4	15	4,217	6	40.0	8	53.3	8	53.3	7	46.7	11	73.3	
O 5	22	12,979	14	63.6	8	36.4	12	54.5	10	45.5	12	54.5	
K 5	164	29,610	79	48.2	38	23.2	43	26.2	80	48.8	44	26.8	
計	459	193,378	236	51.4	154	33.6	217	47.3	176	38.3	167	36.4	5

礫群番号	実測番号	グリッド	総個数	総重量(g)	完形率 100～80% 個数	%	80%以下 個数	%	赤化 ◎～○ 個数	%	△～× 個数	%	割面の赤化 個数	%	黒色付着物 個数
41	PS14	N 4	15	4,217	4	26.7	3	20.0	1	6.7	8	53.3	—	—	
42	PS13	M 5	35	10,769	2	5.7	11	31.4	8	22.9	28	80.0	1	2.9	
44	PS18	K 5	103	12,723	21	20.4	14	13.6	—	—	29	28.2	8	7.8	
45	石プロ2	L 7	28	5,008	17	60.7	4	14.3	—	—	16	57.1	5	17.9	
46	PS12	K 5	61	16,887	40	65.6	8	13.1	2	3.3	6	9.8	38	62.3	
47	PS16	L4～L5	12	23,077	7	58.3	—	—	3	25.0	1	8.3	—	—	



第55図　礫群重量別組成図

第５節　縄文時代の調査

Ａ区南側において集石遺構が４基と土坑群・ピット群が、Ｂ区において集石遺構と炉穴が各１基ずつとピット群を検出している。土坑はＡ区の東西２群に分かれて検出されており、土坑の平面形は不整形なものが多く、底面をピット状に掘り窪めたものが大半を占めている。

遺物は、少量の無文土器・隆帯文土器、石鏃・台石が出土している。

【集石遺構】（第57・58図）

Ａ区で検出された集石１～４においてはⅡb層下面、Ｂ区で検出された集石５はⅢb層上面で検出されている。集石５は調査区の壁面に赤化礫が認められ、一部拡張したところ集石遺構が検出された。よって集石遺構の分布は調査区外に広がる可能性も考えられる。

集石１・２・４は近接して検出されており、集石５はＢ区で検出されている。集石１・２・４付近においては、無文土器が集中して出土している箇所がある。また、集石３の近くには、隆帯文土器の口縁部１点と、同一個体と思われる小片が数点出土している。

集石遺構の様相は、第３表の通りである。明瞭な掘り込みは平面的には確認できず、礫が埋まっている範囲を掘り込みとして捉えている。

集石１は礫を壁面に貼り付けるように配置しており、中でも最も大きい台石状の礫については、礫が露出している部分と土に埋まっている部分とに、明瞭な赤化・非赤化の対応が見られ、礫が原位置で機能していたことを窺い知ることができる。

集石２は集石１に隣接して検出されている。しかしながらその形態は、小振りな割礫が散在した状態で検出されている。礫の分布が広く、また掘り込みを持たないことから、集石１の使用に伴う礫である可能性も考えられる。

今回Ａ区で検出された集石遺構は、いずれも調査区外に広がる低地の落ち際付近で検出されている。構成礫はすべて本遺跡の基盤礫層である尾鈴山酸性岩類である。

【炉穴】（第59図）

Ｂ区の集石５近くで検出されている。検出面はⅢ層上面ではあるが、掘り込み面はさらに上層である可能性が高い。焼土を含む層が、炉穴の床面より上面で見られる。

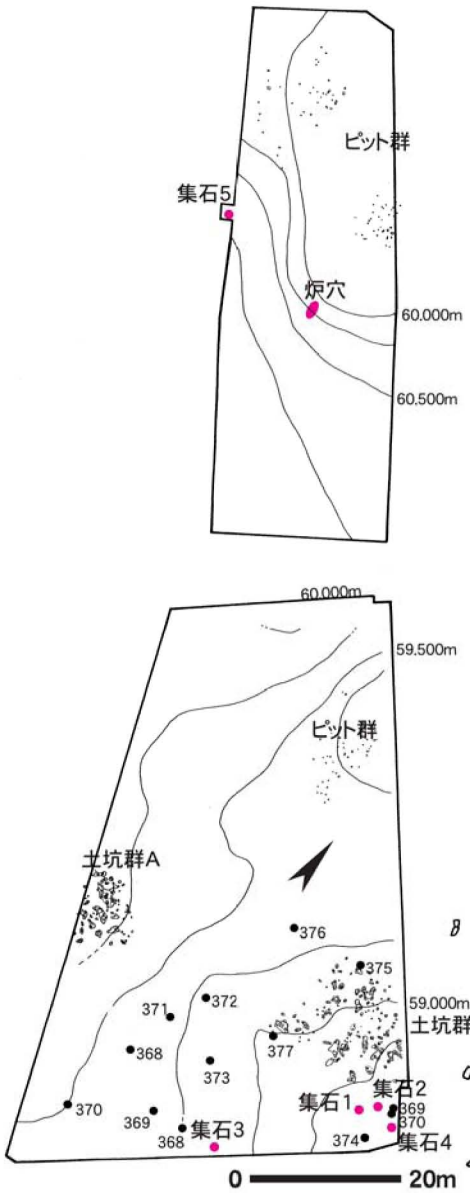
【出土遺物】（第60図）

遺物は、土器、石鏃、台石等が出土している。土器は、無文土器と隆帯文土器が大きく２つの場所に分かれて出土している。つまり無文土器は、集石４近くで、隆帯文土器は、集石３の近くにて出土している。

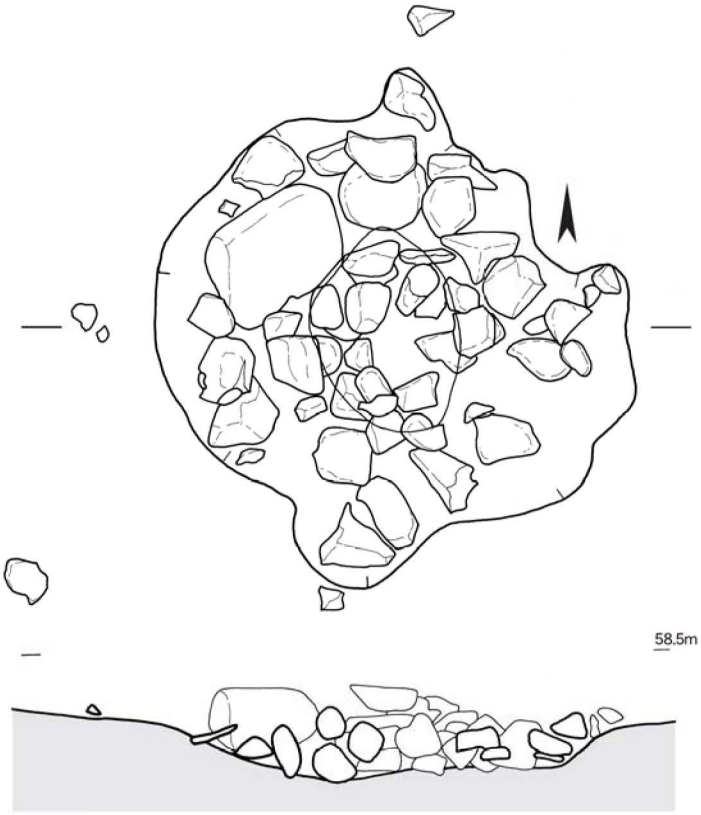
石鏃については、局部磨製石鏃を含み、抉りが非常に浅いものが多く見られる。また、石鏃には石材Ｐ（チャート）が多く使用されている。

第３表　集石遺構一覧表

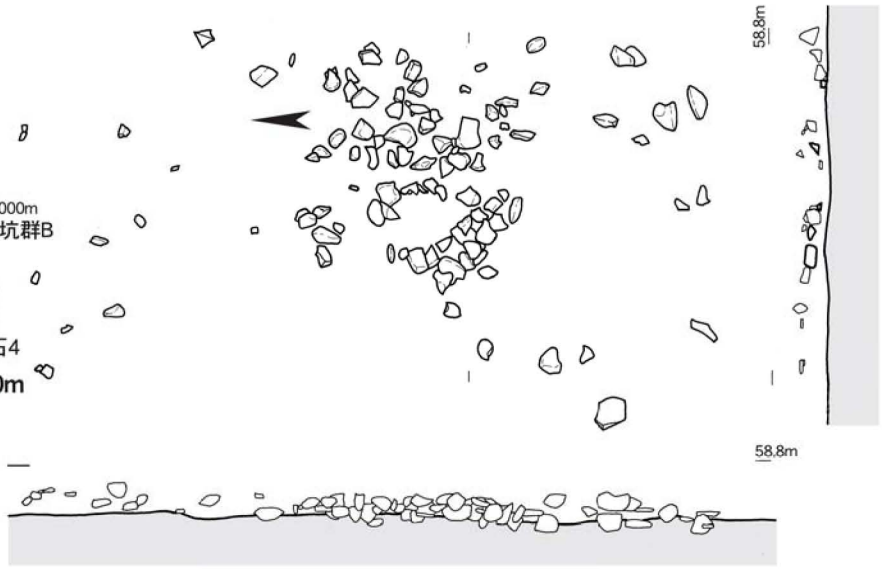
	規模(m)	掘込の深さ(m)	配石	礫の粗密	総重量（g）	総個数（個）	石　材
集石１	1.8×2.0	0.13	なし	密	52,000	94	尾鈴山酸性岩類
集石２	0.5×0.4	なし	なし	疎	8,400	42	尾鈴山酸性岩類
集石３	0.8×0.7	0.08	なし	密	18,000	96	尾鈴山酸性岩類
集石４	0.7×0.6	なし	なし	密	－	－	尾鈴山酸性岩類
集石５	1.4×1.2	なし	なし	密	78,000	596	尾鈴山酸性岩類



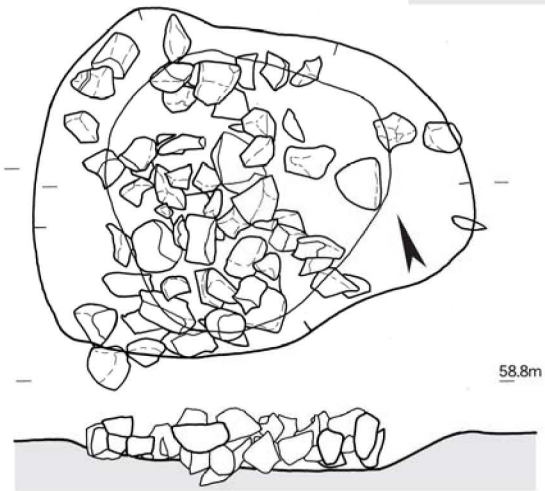
第56図　縄文時代遺物・遺構分布図
（S＝1／1000）



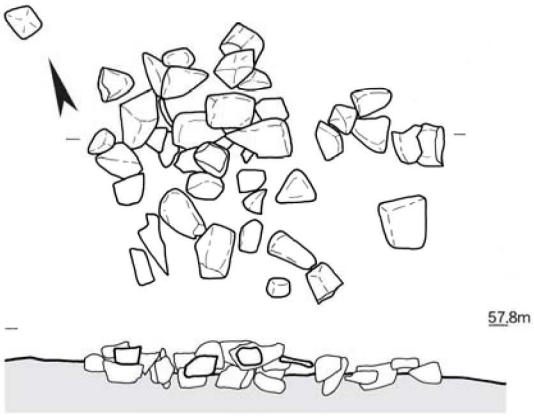
集石 1



集石 2



集石 3

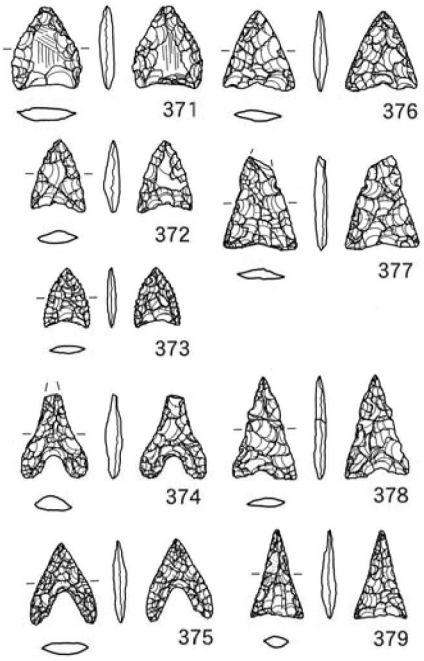


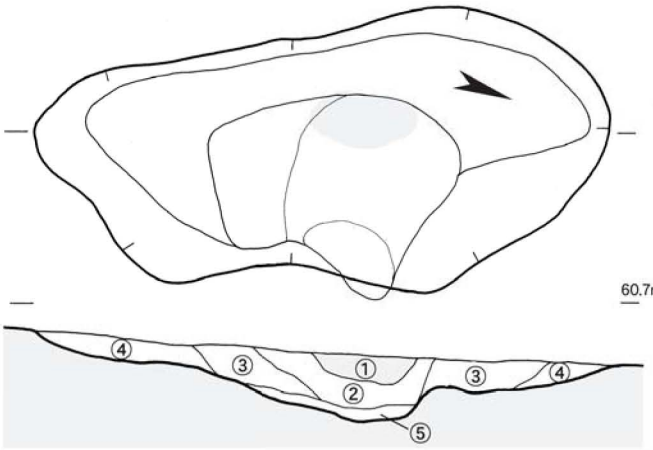
集石 4

第57図　集石遺構実測図 1 （S＝1／30）　0 ―― 1m

集石５

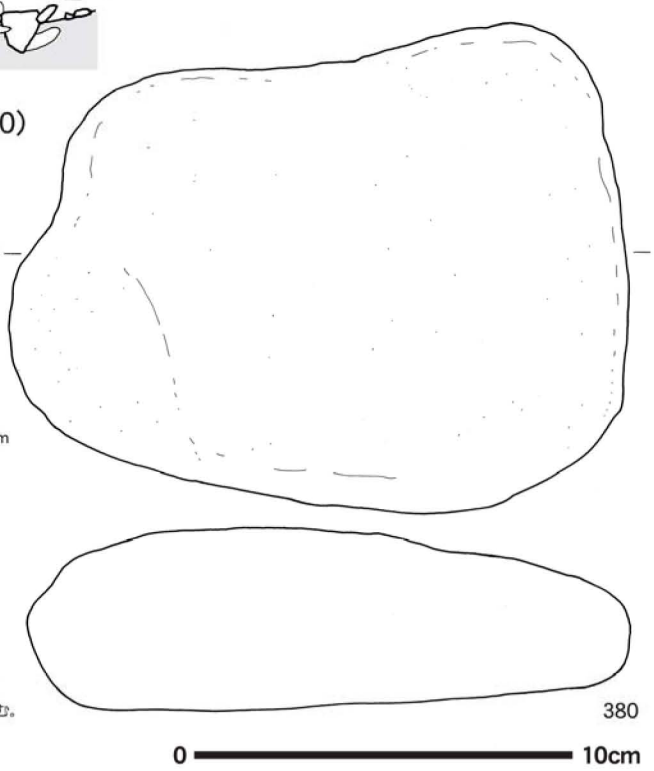
第58図　集石遺構実測図２（Ｓ＝1/30）

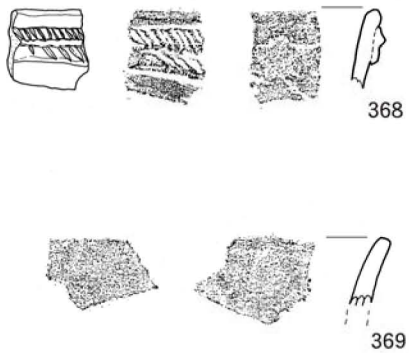




第59図　炉穴実測図（Ｓ＝1/30）

土層注記
①黒褐色土(10YR2/3)締まりが強く、粘性無し。焼土粒を多く、炭化物（1mm）を含む。
②黒褐色土(10YR3/2)締まりは強く、粘性あり。暗褐色土（10YR3/3）を斑状に焼土粒、炭化物粒をごく僅かに含む。
③暗褐色土(10YR3/4)締まりは強く、粘性あり。黒褐色ブロック（5mm）を含む。
④暗褐色（10YR3/4）③層に比べて軟質である。粘性無し。炭化物、焼土粒子をごく僅かに含む。
⑤暗褐色土（10YR3/3）締まりは普通で、粘性あり。炭化物粒をごく僅かに含む。





第60図　縄文時代遺物実測図

（367～369はＳ＝1／3、370～379はＳ＝1／2）

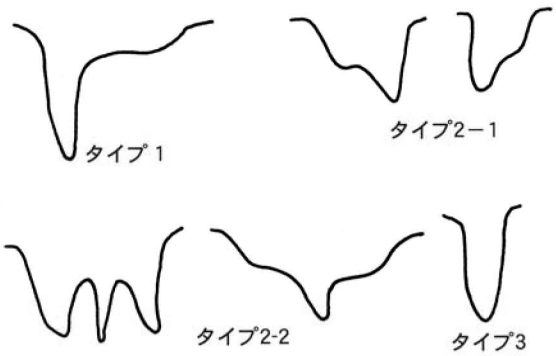
土坑について

Ⅲ層上面にて土坑を多数検出している。土坑は群を成しており土坑群Ａ、土坑群Ｂに分かれる（第56図）。それぞれ東西に位置し、双方の間には空白域が存在する。

土坑の平面形態は大きく不整形、楕円、円形に分けられる。中でも不整形なものが多く、底面には１個から複数個のピット状の掘り込みを持ち、ＡＴや礫層にまで至っているものが多く見られる。

断面形態は以下のタイプ１～３に分類できる。平面形態と断面形態、伴うピット数の関係は第４表の通りである。

タイプ１：浅い平場とピット状の掘り込み
タイプ ２－１：ピットに向かって斜めに掘り込む
タイプ２－２：土坑を深く掘り込み、更にピット状に掘り込む。
タイプ３：ほぼまっすぐに掘り込む



第61図　土坑断面模式図

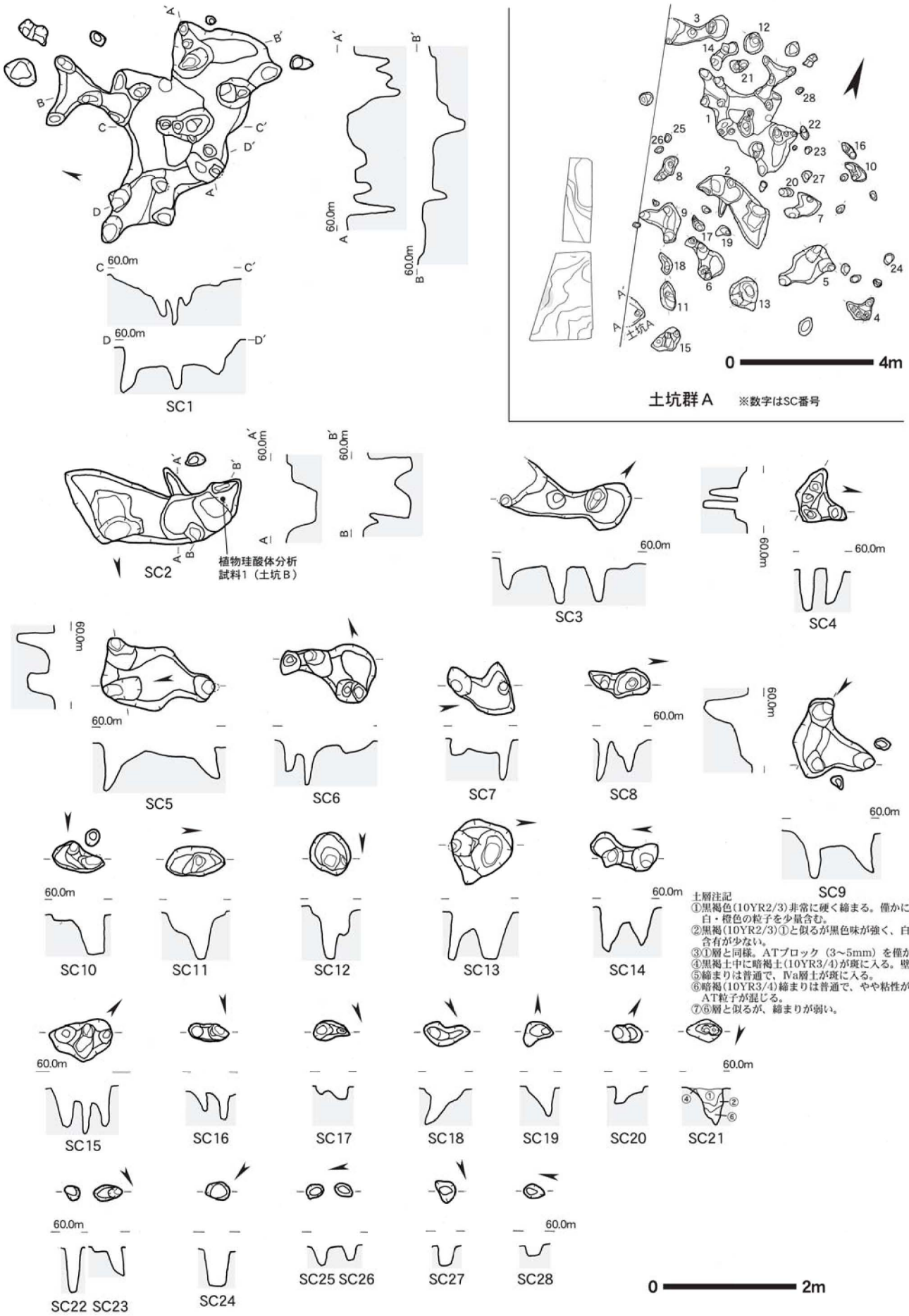
第４表からは土坑の平面形態とその規模、ピット数は連動する傾向があり、平面プランが不整形なものは規模も大きく、ピット数も多くなる傾向にある。また断面形態についてはタイプ１のものが多くを占める。

円形のものはタイプ３の断面を示し、土坑の規模も0.5m未満のものが多く、通常ピットとして捉えられているものが大半を占める。

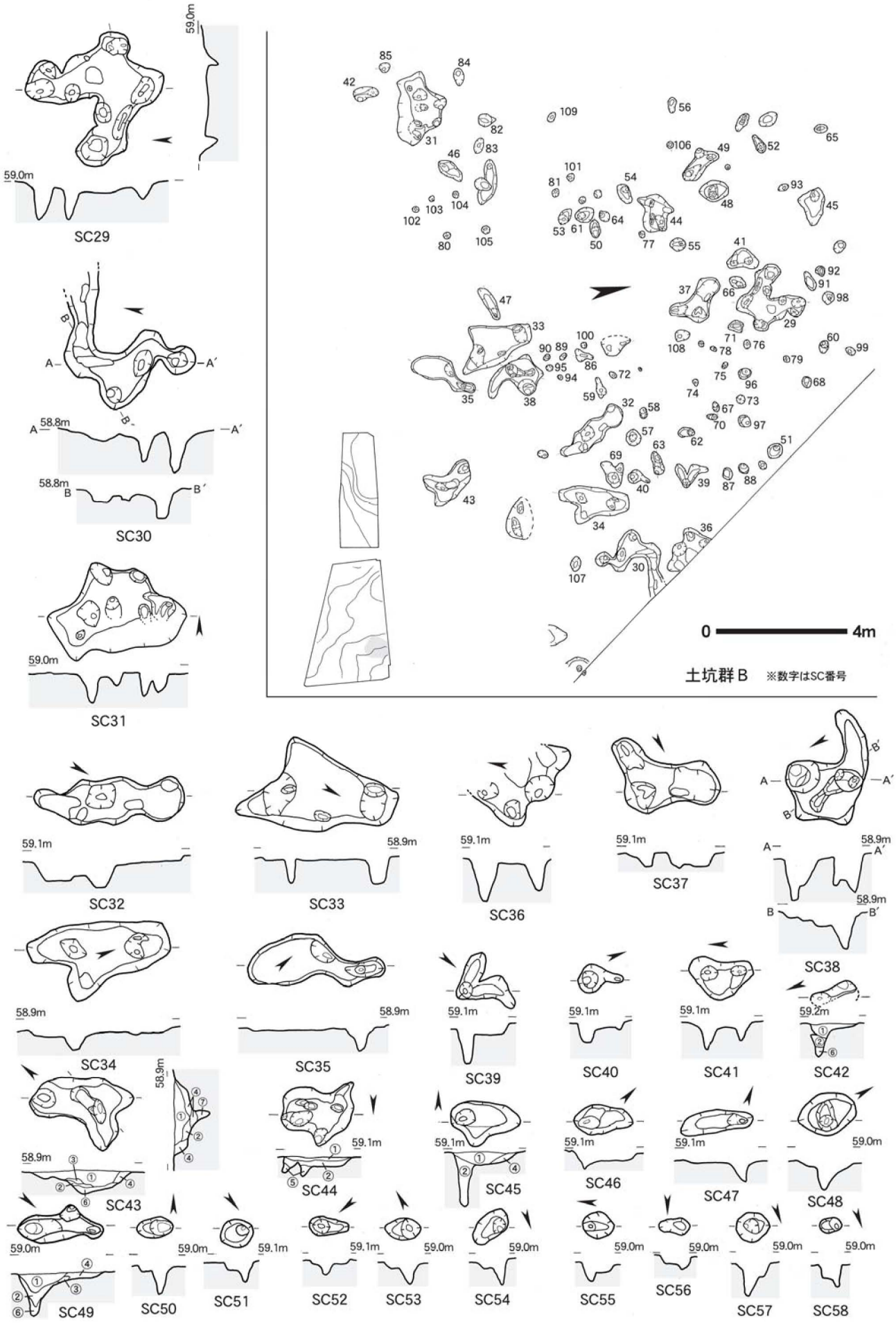
楕円形のものは、様々なタイプの断面形態が混在する。その中でも多く見られるタイプ１の典型例としては、楕円の片側に深く掘り込みを持つタイプのもの（SC50～54）が挙げられる。浅い掘り込み部分（平場）には、所々浅い凹みが見られる。また、土坑の埋土には特に平場部分付近にてＡＴブロックを含む土が観察された。さらには、土坑の掘削壁面において埋土が斑点状、または筋状に残る状況が観察された。それらの埋土を除去した結果、その埋土は深くまでは至っておらず、斑状のものは先細りしながら５～６㎝程で地山に至り、また壁面に対して、約60度の鋭角となっている状況にあった。しかしながらこれを人為的な痕跡であるかは、熟考を要する。

第４表　土坑分析表

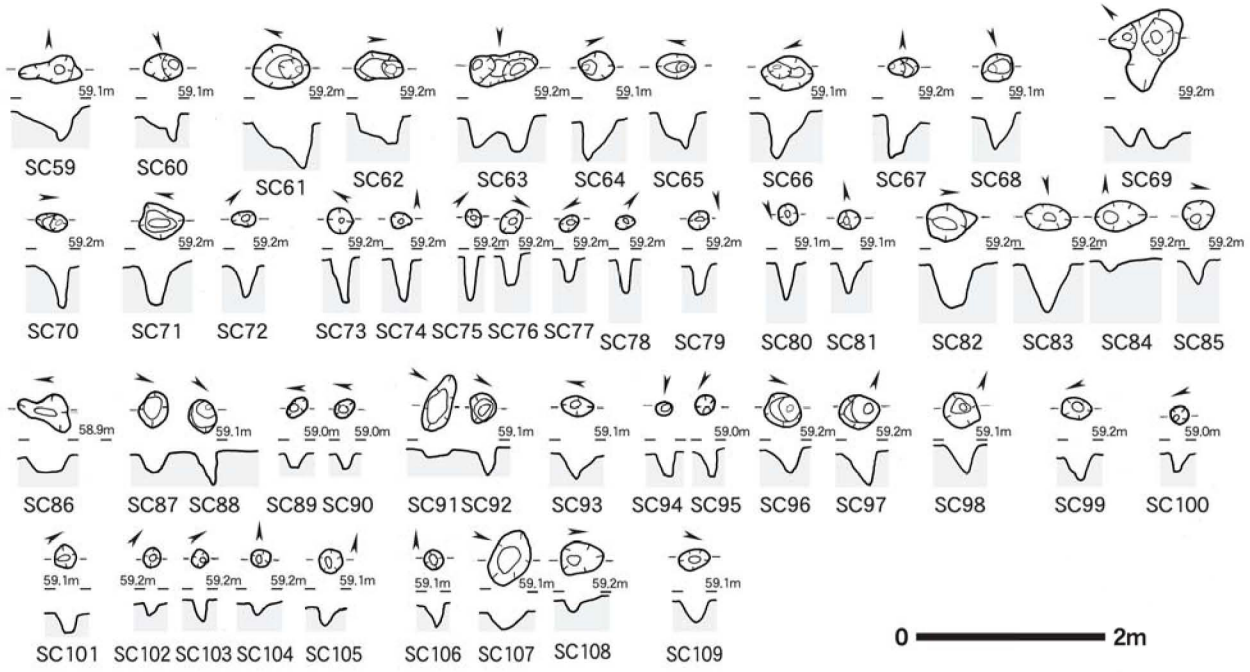
土坑の平面形態	ピット数	断面状況					土坑の規模			
		タイプ1	タイプ2-1	タイプ2-2	タイプ3	不明	2mより大	1～2m	1～0.5m	0.5m未満
不整形	1	4	－	2	2	－	1	4	2	1
	2	6	－	－	－	－	1	3	2	－
	3以上	15	－	2	－	－	8	7	2	－
楕円	1	14	8	6	9	－	－	1	21	15
	2	5	－	3	－	－	－	2	6	－
	3以上	－	－	－	－	－	－	－	－	－
円	1	3	4	2	32	－	－	－	1	46
	2	－	－	1	－	1	－	－	1	1
	3以上	－	－	－	－	－	－	－	－	－



第62図　土坑群Ａ実測図（Ｓ＝1／80）



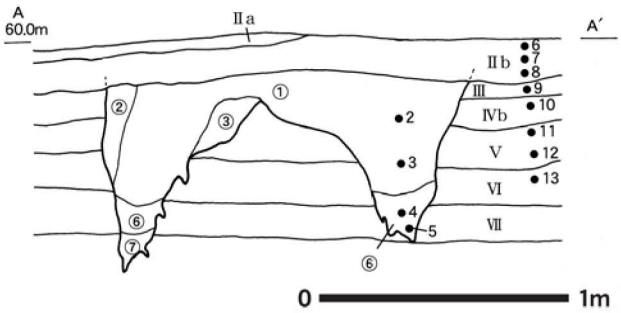
第63図　土坑群B実測図1（S＝1／80）



第64図　土坑群Ｂ実測図２（Ｓ＝1／80）

【土坑の掘削時期について】

土坑に伴う遺物の出土が無かったことから、時期を特定するのが困難な状況にあった。また土坑はⅢ層上面にて検出したが、更に上面からの掘り込みの可能性も考えられ、基本土層と土坑埋土を植物珪酸体分析により比較するべく、古環境研究所に分析を委託した（第65図）。その結果、Ⅱb層中位～Ⅲ層上面からの掘り込みの可能性が高いとの結果を得た（第Ⅳ章参照）。つまり、実際検出した面か、それよりやや上層からの掘り込みである可能性が高い。当該層からは主に縄文時代、後期旧石器時代前ノ田３期の遺物が混在している。また遺構はⅡb層中～下部において集石遺構、Ⅲ層上面からは礫群を検出している。土坑の埋土はⅡb層の土と類似しており、また縄文時代の遺構の埋土とも似る。よって土坑は縄文時代草創期～早期に伴う遺構である可能性が高いと考えた。



第65図　土坑Ａ自然科学分析
（植物珪酸体試料）採取点2～13
※①～⑦は第62図の土層注記に対応

【ピットについて】

Ⅲ層上面にて、ピット群を検出している（第56図）。これらは土坑と同様、シミ状にぼんやりと検出された遺構群である。ピットが検出された場所は、Ａ・Ｂ区とも谷部分に位置している。断面を断ち割り、掘り込みの有無を確認したが、不明瞭なものが多く、また配置に規則的なものは見られなかった。谷部分に位置するという状況からも、人為的なものというよりは、樹痕等の可能性を考慮すべきかもしれない。

第６節　弥生～古墳時代の調査

竪穴住居跡が３軒検出された。SA1・２は焼失住居であるが、SA3は土層確認のためのトレンチ断面で確認されたため、詳細は不明である。

またＢ区のトレンチャーによる撹乱部分において、弥生土器がまとまって出土している。

弥生～古墳時代の遺構の分布は、後期旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物の分布が、調査区南側の低地への落ち際付近に位置していたのに対し、遺跡内での標高が高い場所に位置するものが多く分布を違える。

第５表　竪穴住居跡一覧表

	規　模	形	柱穴	貼床	炉	備　考
ＳＡ１	5m×5m	方形	4	○	－	焼失住居
ＳＡ２	4m×4m	方形	2	○	地床炉	焼失住居
ＳＡ３	－	－	－	○	不明	不　明

SA1（第67図）

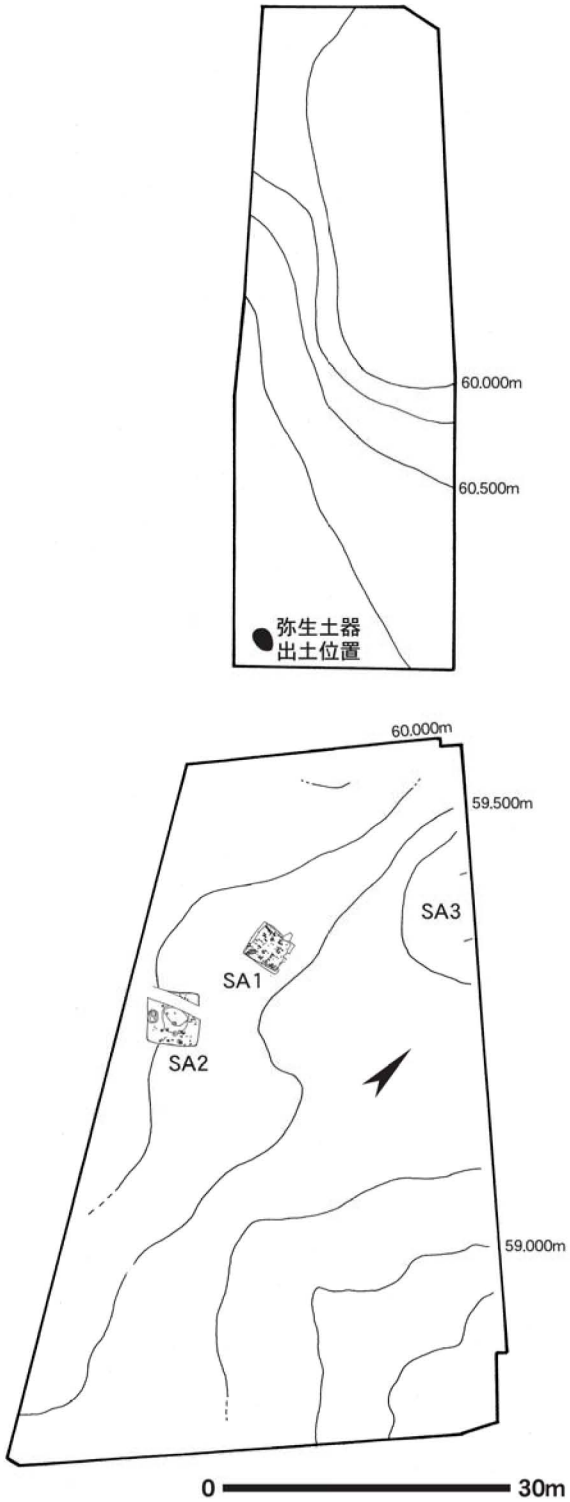
確認調査段階で確認されていた住居跡である。北壁と東壁において一部、撹乱を受けている。耕作土を除去し、残存しているアカホヤ上面にて検出しており、検出面から床面までの深さは0.2m、掘削面までの深さは約0.3mを測る。炭化物と焼土を含む層が、ほぼ床面直上に広がっていた。

貼床には、アカホヤブロックを含む黒褐色土を使用しており、約10㎝にわたり住居床面全体に広がる。また、特筆すべき点として、柱穴底面でも貼床と同様の土が確認された。柱を立てるにあたり、何らかの地固め的な土の可能性も考えられる。なおＳＡ２の柱穴においても同様の状況が観察された。

【炭化材】

炭化材の検出状況としては、住居床面直上付近に放射状に広がる。分布は住居床面の縁辺部に密に見られ、中央には散漫である。また、炭化材の上下には焼土が部分的に含まれている。

炭化材の断面は船底状のものもあったが（註２）、住居の縁辺部中心に見られる材は、幅約15㎝を測り、他遺跡のものに比して幅広である傾向が見られた。これらの炭化材を古環境研究所に委託して樹種同定を行ったところ、コナラ属クヌギ節の結果を得た（第

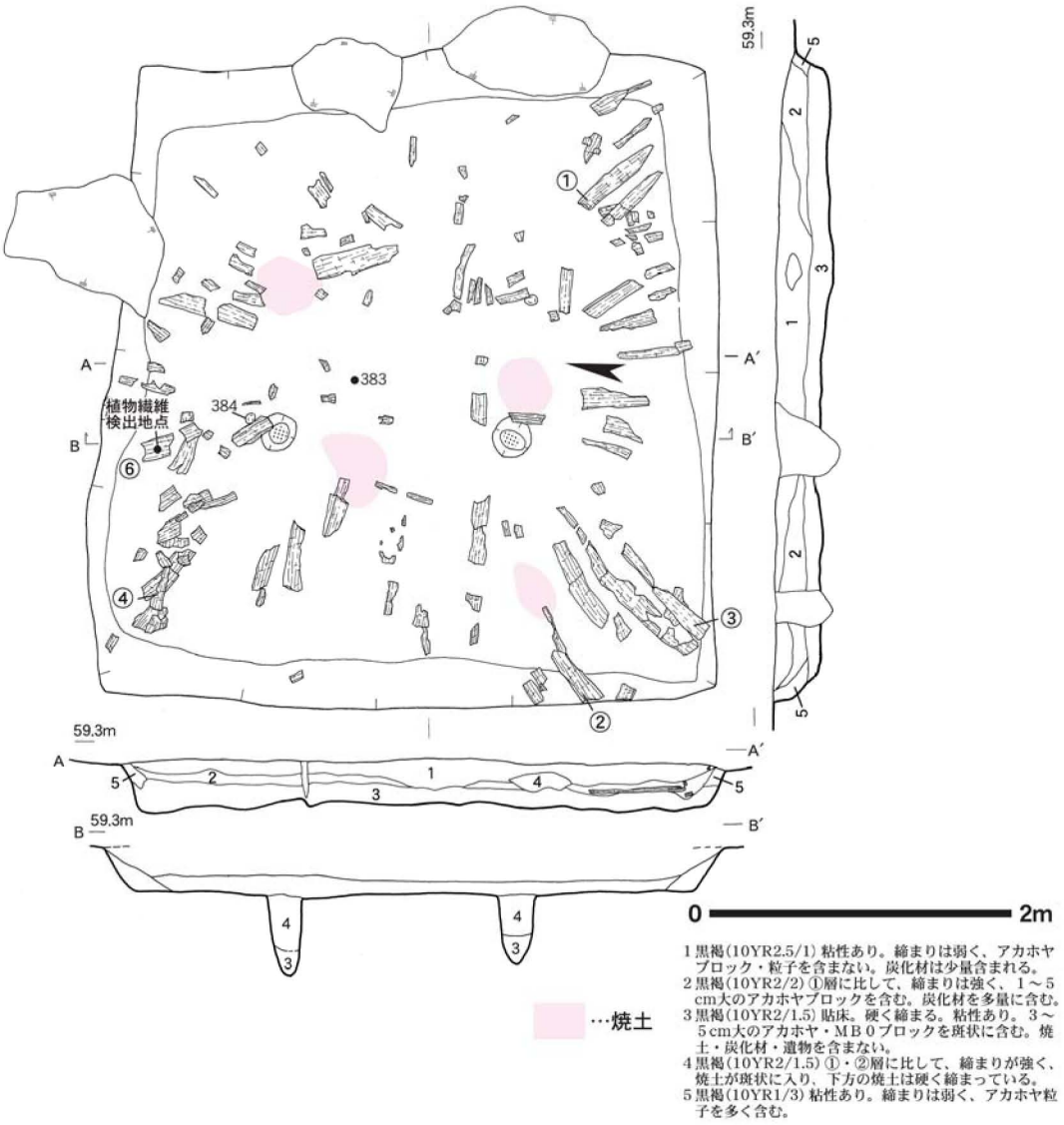


第66図　弥生～古墳時代遺構分布図
（Ｓ＝1／800）
※コンターラインはⅢ層上面

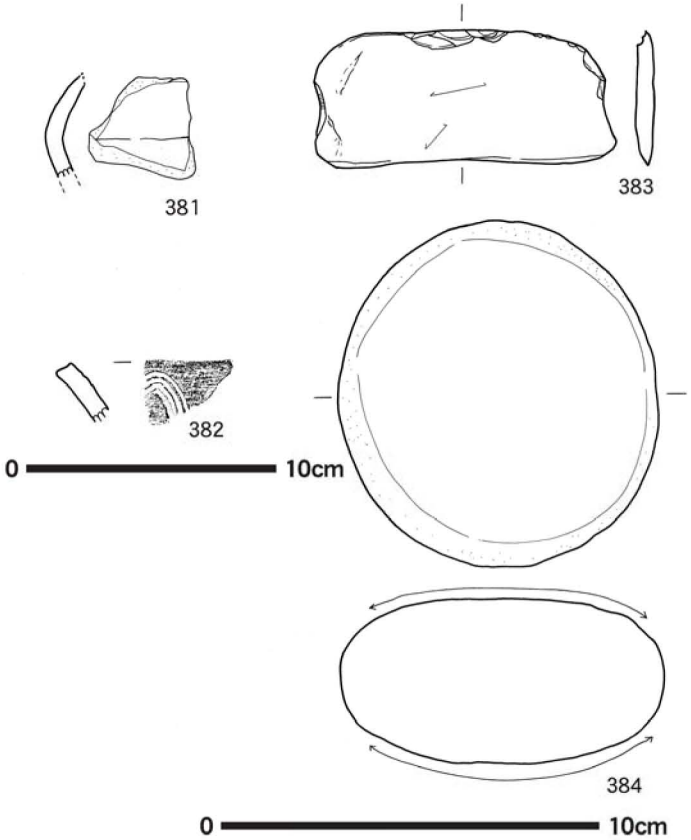
Ⅳ章参照)。また、炭化材の下より植物繊維体を検出した。同じく樹種同定を行ったところ、「肉眼での外観的特徴より、萱・稲などの草本と考えられるが、同定には至らなかった」という結果に終わった。

【出土遺物】(第68図)

出土遺物はごく僅かで、甕の頸部、複合口縁壺の口縁部、石庖丁(383)と磨石(384)が出土したのみであった。いずれも埋土からの出土である。



第67図　SA1実測図(S＝1/50)
※①～⑥は自然科学分析を行った試料



第68図　SA1出土遺物実測図
（381・382はS＝1/3，383・384はS＝1/2）

SA2（第69図）

A区中央西側に位置する方形住居である。Ⅰ層（アカホヤ）上面で検出しているが、北側は現代の撹乱により大半を切られている。床面は中央部分がレンズ状に窪み、緩やかなベッド状遺構を削り出している。遺構検出時の平面状況として、方形プランの中央部分の埋土が、縁辺部分に比べて黒色味が強く、埋土の違いが見られた。これはつまり、縁辺部分はベッド状遺構を作り出しているためレベルが高くなっており、埋没段階の差異が平面的に見る埋土状況で顕著に現れた結果であると考えらえる。

また、掘り込み面は凹凸が顕著であり、その凹み幅は約7㎝のものが多く見られた。貼床は、住居の縁辺部を中心に、これらの凹凸を埋めるように貼られている。

【土坑】（第70図）

土坑は、西側に1基（SC1）南側に3基（SC2～4）、中央部に1基検出されている。中でも中央部の土坑は埋土が焼土となっており、地床炉と考えられる。SC1は西側壁面にて検出しており、この場所では貼床が見られず、住居掘削面からの掘り込みであったと考えられる。底面付近では口縁部が欠損した小甕（389）が出土している。

【焼土と炭化材】

焼土は中央部北側に集中し、帯状に分布する。焼土の密度は南側に向けて低くなる。焼土の特徴として、0.5～1㎝の黒色の硬ブロックが混在することが挙げられる。また、ベルトでの土層の堆積状況を見ると、東西ベルトでは、アカホヤブロックが混じり、炭化材を含まない3層の流れ込みがまず見られ、その後2層の堆積が見られるのに対し、南北ベルトにおいては間に層を挟まず2層の堆積が見られた。炭化材は住居プランの縁辺部において少量検出しているがSA1に比して少ない。

【出土遺物】（第71・72図）

SA1に比して多くの遺物が出土した。遺物は、床面付近から出土したもの（385～398・404～406）、埋土1から出土したもの（399～403）の大きく2つに分けられる。底部形態は両者とも丸底か僅かな接地面を持つ平底のものが占めている。また、小型の甕、鉢が多く見られる特徴もあげられる。甕は土坑内での出土が目立った。

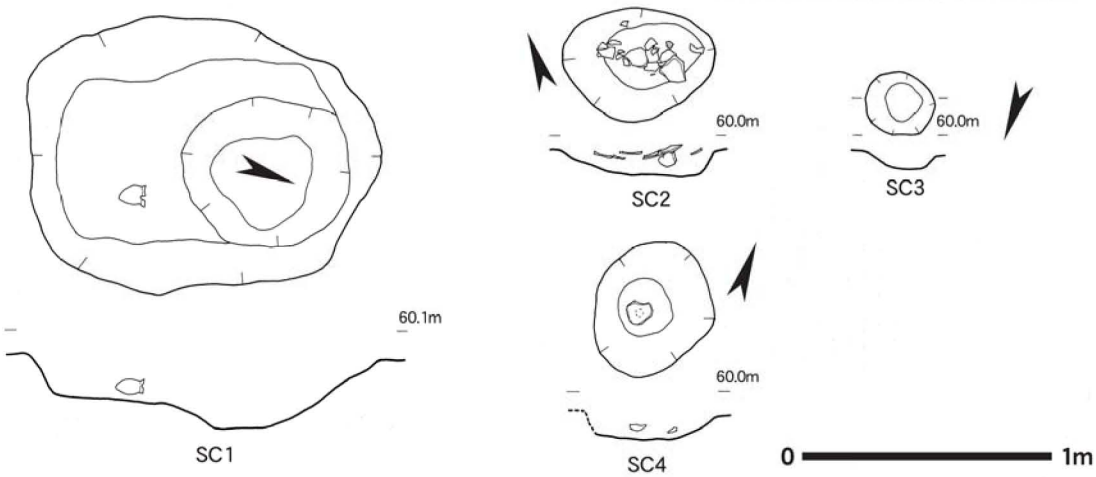
甕の表面に残る煤の付着状況は、胴部最大径付近に顕著である一方で底部付近には見られず、器壁が赤化している。SA2の炉の形態が地床炉であることからも、底部は炉に埋めての使用が考えられる。

395の鉢は球状の底部を呈しており、底部と胴部の接合部分において板ナデの痕跡が残る。この形態と類似する鉢は西ノ別府遺跡SA1、国光原遺跡SA3からも出土している。これらの住居から出土している他の土器を比較してみると、甕では西ノ別府遺跡がタタキ調整によるものであるのに対し、国光原遺跡、前ノ田村上第2遺跡においてはハケメや板ナデによる調整を用いているが、おおよそ同一型式の所産であると考えられる。その他の器種のセット関係においても、他の遺跡のものは一括廃棄資料ではあるが、鉢や甕の小型器種が多いなど類似点が見られる。

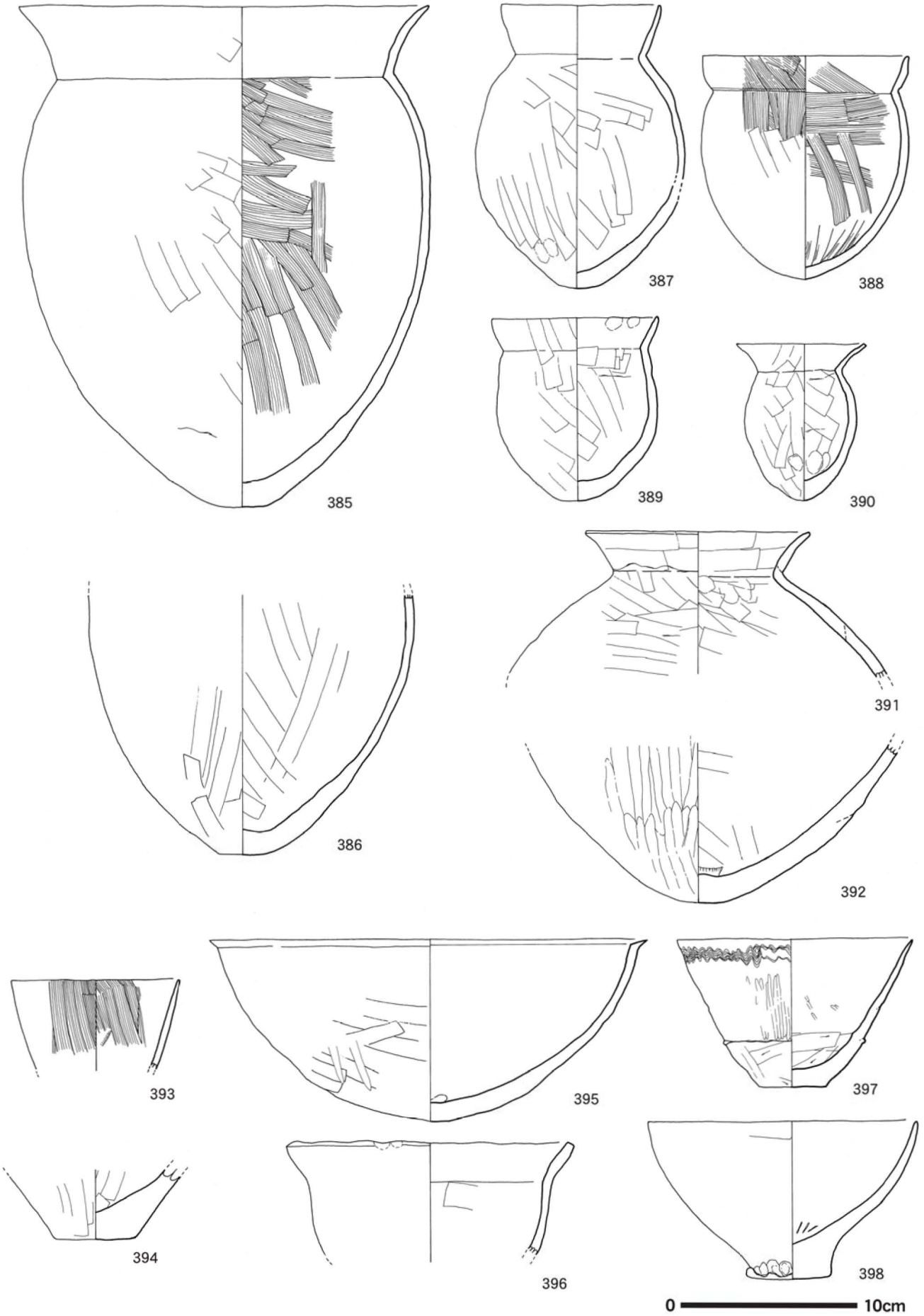
397は口縁部に櫛描き波状文を持つ精製鉢である。口縁部と体部との境目に粘土の撚れのような痕跡を残し、体部は内外面ともケズリによる調整が見られる。

第69図　SA2実測図（S＝1/50）

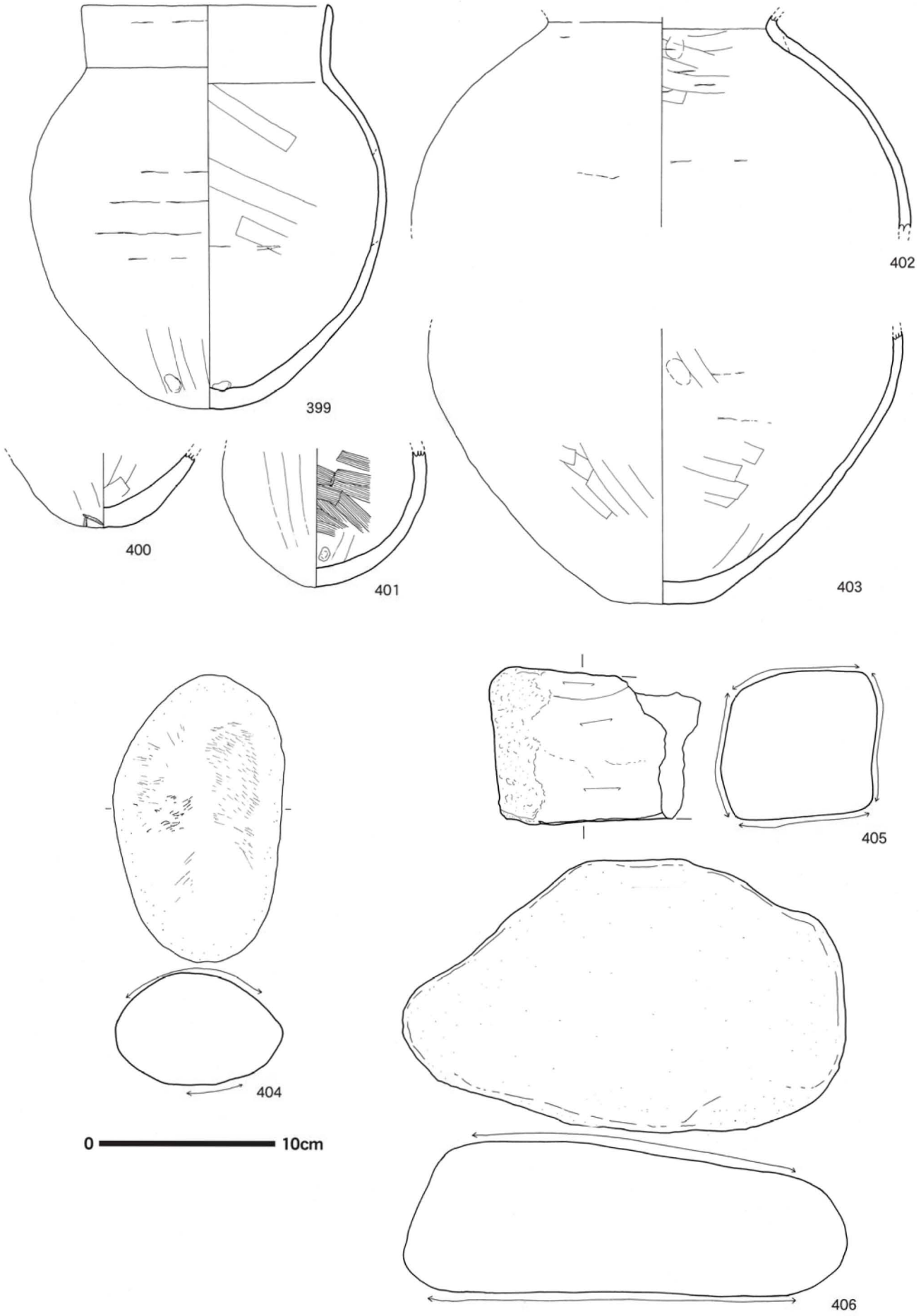
1 黒色(10YR2/1)締まり弱い。焼土粒子（1mm以下）、炭化物粒子(1～3mm)を多く含む。粘性があり、水分を含みやすく、乾きにくい。炭化材は含まない。
2 黒褐(10YR1/3)締まり、やや弱い。粘性あり。炭化材、焼土ブロック(1～2cm)を含む。
3 黒褐(10YR2/2)粘性あり。アカホヤ粒子(1～3mm)を多く含む。炭化物・焼土を含まない。
4 黒褐(10YR1/3)貼床。アカホヤブロック(1～2cm)を多く含む。
5 黒褐(10YR3/1)締まりは普通で、粘性ややあり。アカホヤブロック(5cm)・粒子を多く含む。
6 黒褐(7.5YR2/2)壁際土。締まり弱く、粘性無し。アカホヤ粒子を多く含む。
7 黒褐(10YR2/2)アカホヤブロック(1cm大)を多く含む。締まり弱い。
8 黒褐(10YR2/2)粒子細かく粘性ややあり。締まり弱い。



第70図　SA2土坑実測図（S＝1/30）



第71図　SA2出土遺物実測図１（S＝1／3）



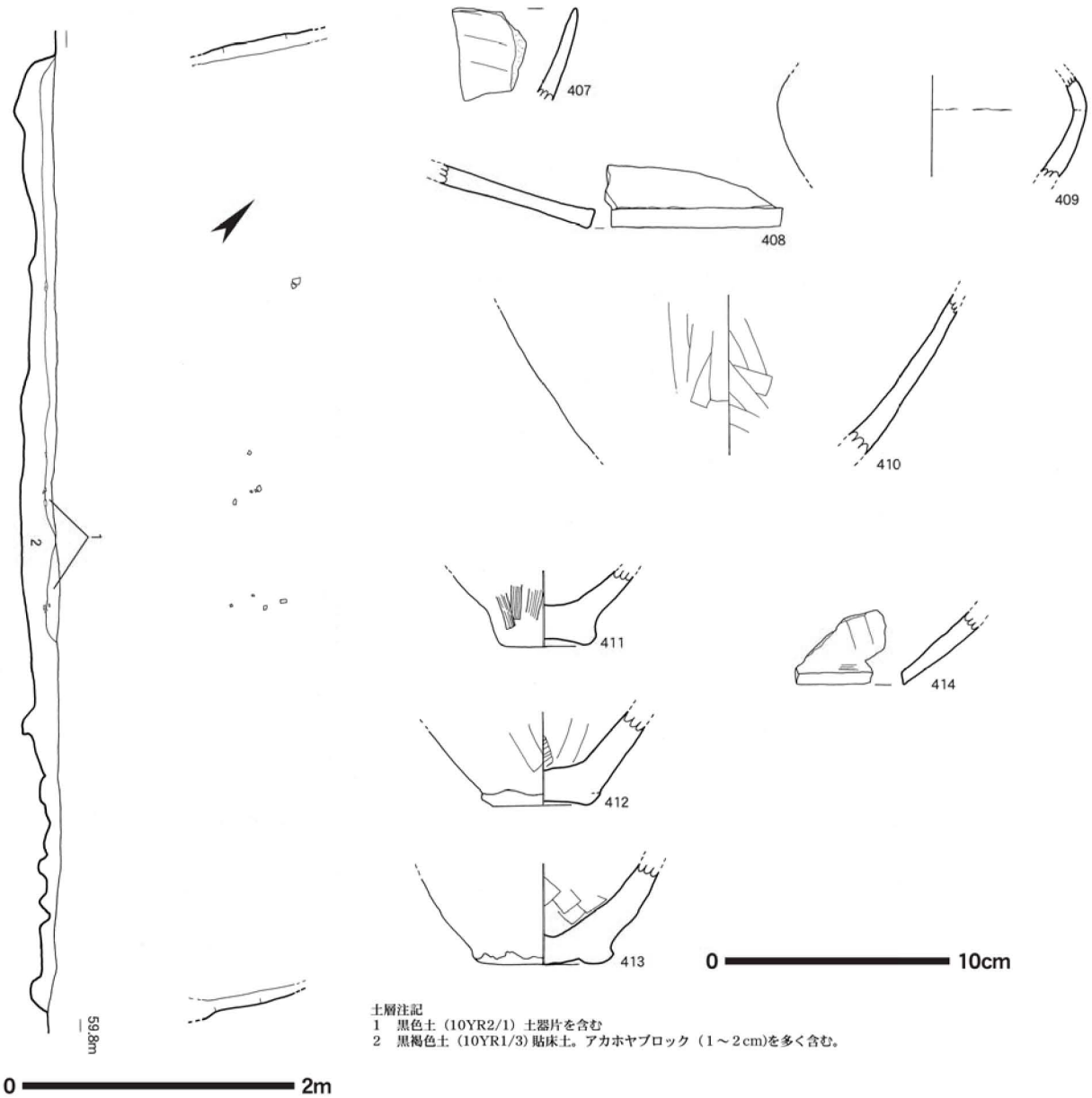
第72図　SA2出土遺物実測図２（Ｓ＝1／3）

SA3（第73図407～410）

遺跡内の東壁に土層断面用のトレンチを設けており、そこでの観察時に、SA1・2の貼床と同様のアカホヤブロックを含む土層を確認した。SA3は調査区外に続くと思われる。

B区出土の弥生土器（第73図411～414）

B区南端において、弥生土器が出土している。アカホヤ上の土はトレンチャーによる攪乱を受けており、落ち込んだクロボク土中から弥生土器がまとまって出土している。出土した土器は、底部が多く、その形態はやや上げ底のもので占められている。A区のSA1・2より出土した土器の底部は丸底に近いものが大半を占めるのに対して、様相が異なる。また、これらの土器に伴い炭化物も出土している。



第73図　SA3遺構・出土遺物（407～410）およびB区出土遺物（411～414）実測図